

第四章

浦添への移住

—新しい都市を
形成した移住者たち—



市昇格祝賀パレード（1970年8月）浦添市立図書館所蔵

第四章 浦添への移住 ―新しい都市を形成した移住者たち―

概要

第一節 新しい浦添の建設

桃原一彦

一 敗戦後帰ってきた人・入ってきた人

下地安広

二 基地建設がもたらしたもの

清水史彦・仲間孝藏

三 一号線建設

仲間孝藏

四 発電所建設

仲間孝藏

五 マチナト・コマ―シャルエリア

仲間孝藏

第二節 人口の増加と都市形成

一 浦添の都市形成の過程とその変化

前津政廣

二 新しい家に移り住む

桃原一彦

三 自治会を通じた人々のつながり

桃原一彦

第三節 いくつもの「シマ」をもつ人びと

一 移住者たちの浦添

前津政廣

二 郷友会に参加する移住者たち

土屋なおか

コラム 小湾の移住―地主会から郷友会へ―

長間安彦

コラム 米軍基地と文学

又吉栄喜

コラム 特 飲 街

又吉栄喜

概 要

第四章 浦添への移住 概要

本編第三章までは、海外への移民、戦前・戦中期におけるアジア太平洋地域への開拓・植民、そして国内出稼ぎや八重山・大東諸島への開拓など、浦添からの移民・移住のありようを中心に構成されている。第四章では、人の移動に対するまなざしの向きを変え、浦添に移住した人々について論じていく。とくに、戦後浦添の復興を起点として一九五〇年代から八〇年代までの浦添の都市化およびベッドタウン化を構成した移住者の移動と定住および地域生活のありようについて紹介する。

第一節では、沖縄戦終結後から一九五〇年代にかけて、浦添の戦後復興と産業化や市街地化を支えた人々の移動と労働について概観する。

まず、仲間収容所での生活と復興作業について文献の証言記録から紹介する。沖縄戦終結後、沖縄県民の大半は米軍保護下の収容所から戦後の生活を開始している。よって、終戦直後の住民の大規模な移動とは、元の居住地に帰ることだった。各収容所に離散・収容されていた浦添の人々が浦添村に帰還することができたのは、一九四六年（昭和二一）の二月からである。ただし、それは直ちに元の居住地に戻れたことを意味するものではなく、復興作業の起点となった仲間の収容所に先遣隊を帰還させるというものだった。

また、同年七月から漸次開始された元の居住地集落への帰還、移動後の復興作業とその生活のありようを証言記録から

紹介する。なかでも、沖縄戦によって焼け野原となった各集落で、住居がどのように確保され、「衣・食」などの物資がどのように配給されていたのかという事柄に焦点をあてていく。

ところで、一九五〇年（昭和二五）の朝鮮戦争勃発と二年後のサンフランシスコ講和条約（および旧日米安全保障条約）の公布は、沖縄における米軍機能の再編・強化を進展させた。それに伴い、浦添に米軍補給地区の機能が集約され、施設の建設や整備が開始された。それは、基地建設作業や軍雇用を創出し、その周辺における産業化や市街地化にもなって一定の労働市場を生み出した。この労働市場の創出が、浦添への労働力移動の受け皿となっていく。その主たる就労の場となった、米軍牧港補給地区および軍道一号線の建設、牧港火力発電所建設、そしてマチナト・コマーシャルエリアについて言及する。

牧港補給地区建設について、浦添を管理下においていた米陸軍が同施設の建設をどのように構想し、それが地域住民の移動と生活にどのような影響を与えたのか、城間と小湾の事例を取り上げて言及する。また、同補給地区の建設労働者がどのように調達・動員されたのか、日本人捕虜の労働のありようを考察する。軍雇用に関しては、労働力を押し出す力（基地周辺地域における農村再建の困難や県内農漁村における経済的困窮など）と、労働力を吸収する力（基地建設工事にともなう関連企業の進出や比較的安定した収入が得られる軍労働の登場など）の両面に着目して論じていく。

軍用道路一号線（現国道五八号）や牧港火力発電所の建設は、浦添に労働力を引きつける大きな吸引力となっている。米軍政府にとって、沖縄島全域に広がる基地機能を効率的に連携させるうえで、軍道路の整備・拡張は急務だった。また、電力の発電量・供給量の絶対的な不足は、米軍施設の安定的な運用において早期に解決されなければならない問題であった。以上のような一九五〇年代のインフラ整備が、軍政府による沖縄占領政策や県外の大手建設会社の参入にどのように関連していたのかを概観し、浦添の人々の生活や労働および牧港地区の市街地化にどのように影響を与えたのかについて取り上げていく。

さらに一九五〇年代から六〇年代にかけて、浦添における産業化と都市化の一側面として、「マチナト・コマーシャルエリア」（牧港外人商社街）の誕生と外国人住宅の建設をあげることができる。マチナト・コマーシャルエリアは、牧港を中心に一号線沿いに進出した外国人経営者および外国資本の卸売業・小売業、保険業、建設業などの事務所・営業所が建ち並ぶエリアのことを指している。また、米軍基地周辺に散見される「ハウジングエリア」（外国人住宅）は、米兵および軍属向けの住宅として沖縄の住宅建築会社によって建設され、浦添では一号線やパイプライン通り（現県道二五一号）周辺にみられた。第二節で詳述するが、外国人商社は少なからず浦添の人々の就労の場となり、その経営者がハウジングエリアに居住していたケースもある。また、ハウジングエリアは、一九七二年（昭和四七）の「復帰」前後から浦添

に移住する人々の住居となっている。

第二節では、浦添の都市形成過程を俯瞰したうえで、浦添にたどり着くまでの移住者個々の移動歴と定住過程、自治会形成と地域生活について、事例を中心に考察する。

まず、浦添の都市形成過程については、一九五〇年代の「発芽期」、一九六〇年代～七〇年代の「創設期」、一九七〇年代中ごろ～一九八〇年代の「発展期」、そして一九八〇年代以降の「成長期」という四つの段階に区分して俯瞰する。

「発芽期」は米軍基地建設にともなう市街地形成の段階であり、先ほどのマチナト・コマーシャルエリアの誕生や外国人住宅の建設に加え、基地の「門前街」ともいえる屋富祖商店街の形成と変容について詳述する。「創設期」は那覇市の都市圏拡大にともなう新たな住宅地の形成・拡大の段階となる。なかでも、那覇市と隣接し商工業地の拡大とベッドタウン化が進展した、勢理客と内間における住宅地の形成について概観する。また民間の宅地開発業者が手がけた新興住宅地と、公営住宅や公務員住宅の建設について言及する。「発展期」は、一九七〇年代から引き続き行われた都市基盤整備や土地区画整理の発展段階となる。とくに、土地区画整理事業は未整備な都市的環境を適切に配置・整備していく重要な事業となっており、その実施状況を概観する。「成長期」については、市内の地価高騰にともなう中層・高層住宅の建設など土地の高度利用が本格化した段階となる。

浦添の都市形成段階をマクロな視点で概観したうえで、次

概 要

に移住者個々の移動歴と定住過程について、目的や動機づけ、社会関係のあり方を中心にミクロな視点で言及する。

まず、一九五〇年代～六〇年代の軍雇用と基地周辺労働を中心に、移動・定住過程の事例から考察していく。とくに、牧港における発電所建設と貸間街形成に携わった移住者の事例について取り上げ、軍労働者として働き続け浦添に定住した事例について紹介する。浦添を起点とした移動や就労が個々の生き方にどのように作用し、また「他所者」「寄留民」に対して排他的だと言われていた浦添の各集落が地域社会のあり方をどのように変えていったのか、さらに一九六〇年代後半から頻発した軍労働の大量解雇に対して移住者たちはどのように対処し、浦添の地に根をおろしていったのかについて考察する。

次に、一九六〇年代～七〇年代の移住者の事例から、那覇都市圏の拡大にともなう浦添の近郊都市化、ベッドタウン化の状況について言及する。ここでは、浦添の各集落に移住したケースと新興住宅地に移住したケースに分けて考察しているが、いずれのケースも、海外からの引き揚げ、沖縄戦、米軍による土地接収など歴史的な側面が少なからず影響している。よって、戦後の混乱した状況のなかにあって、家族や親族、友人や知人、そして同郷者間のネットワークなど、インフォーマルな関係がどのように移動生活を支え、浦添への定住を導いたのかという点に着目する。

さらに、浦添に移住した人々が地域社会でどのような社会関係を構築し、コミュニティ意識を萌芽させたのか、これも

個々の証言を中心に考察していく。まず、沖縄戦以前から存在する「古村落」や、戦後間もなく誕生した「新村落」に移住した人々の地域生活とその共同性について言及する。主に勢理客、牧港、経塚の事例を取り上げるが、かつて地元民と移住者との間に一定の距離が見られたものの、一九七〇年代以降はPTAなどの地域活動をおして移住者が自治会に参加していく様子を垣間見ることができる。

次に、一九六〇年代からの建設ラッシュであまに誕生した新興住宅地域において、移住者はどのような地域生活と共同性を構築したのか、地域住民組織（自治会）の形成過程とその活動史から考察する。ここでは、緑ヶ丘自治会、浦城自治会、牧港ハイッ自治会、浦添ニュータウン自治会の事例を取り上げるが、その大きな特徴は地域の生活基盤から自治のありようまで基礎から作り上げてきたという点にある。とくに、地域住民には子育て世代が多かったため、生育環境を向上させようとする活動が住民の帰属意識と共同性を高める契機となっている。また、牧港ハイッのように外国人住宅がそのまま移住者の受け皿となり自治会を形成したケースもあるが、緑ヶ丘や浦城のように外国人住宅と混在したケースも少なくない。よって、浦添の新興住宅地の特徴の一つとして、地域生活における外国人住宅との関わりについて言及する。

最後の第三節では、地元民と移住者が混在する浦添市の地域社会のありようとコミュニティの諸側面について言及する。

はじめに、浦添への人口流入の受け皿となった市街地化と

宅地開発を概観したうえで、地域社会のあり方について言及する。まず一九八七年刊行の『浦添市史』から、自治会組織を「新住民型」「新村落型」「解体型」「地元型」「二重組織型」に分類した先行研究を紹介したうえで、本編では「新住民型」自治会を「初期団地型」「民営団地型」「公営団地型」「区画整理型」に下位分類する。

また、二〇〇三年～二〇〇四年に実施された「高齢者の生活行動実態調査」から各地区住民の出身地、居住年数、居住形態の特徴について言及する。さらに、移住者の生活と意識のあり方について、二〇一四年実施の調査データから考察する。同調査は、先述した「新住民型」自治会から一〇地区を選定して、浦添への移住や定住の状況、自治会への加入と地域活動の状況、浦添および地域への愛着や帰属意識、出身地との関わりや郷友会への参加状況などの質問項目を設定している。

次に、移住者が大半を占める浦添市の多様なコミュニティの一つである、同郷者団体（郷友会）について論及する。第二節でも宮古出身者の同郷者間の相互関係をうかがい知ることができるが、浦添市を含む中南部の都市圏は「郷友会社会」とまで言われているほど、さまざまな出身地の郷友会が結成されている。まず一九五〇年代の基地建設の時代に与那城村平安座や伊平屋村から浦添に移住した人々の事例を取り上げ、同郷者間の相互関係や家族・親類の呼び寄せのあり方を概観する。

また、郷友会の結成過程とその活動内容について事例を中

心に紹介する。とくに、郷友会結成当初の共済組織的な機能をはじめ、会員間の親睦交流活動、母村との行事等の連携など活動内容の諸特徴について言及する。

さらに、移住者が郷友会活動の経験をいかして集落の地域活動や行事に参加していく事例について取り上げていく。議会選挙や自治会の会長・評議員の選出など、地域政治において郷友会や同郷者の投票行動がどのように影響しているのかについて言及する。

最後に、郷友会組織の変容と今後の展望について考察する。今日、郷友会会員は高齢化が進み、移住者二世・三世の参加も減少しており、活動が停滞している組織も少なくない。第二節で言及するように、この問題は浦添市内の地域自治会が抱えている問題とほぼ共通している。この問題の背景に、社会構造、生活構造、意識面のうえでどのような変化があるのかについて概観する。

その一方で、いったん活動が停滞したり閉会したりしたものの、再スタートや再結成を果たした郷友会の事例もある。これらの事例を手がかりに、今後の郷友会活動の展望を考察する。

第一節 新しい浦添の建設

一 敗戦後帰ってきた人・入ってきた人

沖縄県民の戦後は大半が米軍保護管理下の各地区収容所から始まった。当時の浦添村民も、その多くは本島各地区に設けられた収容地区（辺土名、田井等、瀬嵩、久志、古知屋、宜野座、漢那、石川、平安座、前原、胡差、知念等）の収容所からであった。一九四五年（昭和二〇）一〇月、軍政本部から各地区隊長に住民移動の指示があり、各収容地区から戦前の居住地への沖縄住民の移動が始まった。しかし、浦添村民に浦添への移動許可が下りたのは一九四六年（昭和二一）二月六日で、浦添村の仲間部落に限定されたものであった¹。

浦添の字仲間地区では、住民の受け入れに向け各収容所から派遣されたメンバーで復旧設営隊を組織し、米軍から入手した棒テントの仮設小屋約四百戸からなる仲間収容所（キャンプ）の設営作業が始められた。収容所は住民を守る等の理由から周囲を金網で囲い、部落別に区域を分け、親族単位で仮設小屋で共同生活する状況であった。沖縄本島の各収容所から仲間収容所への移動が完了したのは同年六月、その総数は五五六七人であった。戦後、真っ先に浦添へ帰ってきたのはこの五五六七人の村民で、仲間収容所から新たな生活が始まった。

仲間収容所の頃の住民証言が『浦添市史第七巻』の「第一章収容所からの出発」や「第二章終戦直後の市民生活」に記載があったので、そこから一部を紹介する。

「浦添国民学校のコンクリート校舎がその原形をとどめていた（中略）、浦添城址から首里方面をみると、木一本も見当たらないほど砲弾が撃ちこまれていた。」

「各地区から集結したひとたちは自警団、炊事班、散髪屋とかに班編制していくことになった。」

「戦場の跡にはまだ誰も足を踏み入れていない時だったので、周辺には米軍の野戦食の缶詰類が



浦添小学校全景（1953年）石川真徳提供



仲間キャンプのテントの前で撮影（1946年）平敷寿恵子提供

1

浦添市史編集委員会編『浦添市史 第一巻通史編 浦添のあゆみ』浦添市教育委員会、一九八九 一五一頁

第1節 新しい浦添の建設

多数散乱しており、当時食事に困ることはなかった。」

「浦添城址の上り口にある駐車場や浦和之塔から仲間部落の東側、浦添小学校の下運動場、仲間部落内まで同じ規格のテントがぎっしり張られて、各部落・各親族が共同生活を送っていた。」

「薪拾い、水汲み、芋掘り作業などに対しては集団でその外側（収容所から外側への意味）にでかけることができた。」

「再興にあたって浦添村役所の名前を復活させて建設部、畜産部、農業部などと各部を設置した。」

「浦添小学校のコンクリート校舎の一階は、一教室は職員室として使用して、残りは役所が住民への配給などに利用していた。二階は砲弾で穴が空いた部分をベニヤ板などで塞ぎ小学校の授業が行われていた。²」

仲間収容所が各部落出身者でいっぱいになった頃、収容所から元の集落に移動する動きが始まった。その態勢づくりは、部落ごとに先発隊が編成され、戦禍の後かたづけと農耕の準備、さらには標準家屋の建設等と順次進められた。しかし、実際は米軍から移動許可の下りた部落順に進められた。浦添市行政記録によれば、各部落の移動許可月日は次のとおりであった。

一九四六年（昭和二十一年）

七月十五日 沢岬、安波茶、西原、経塚、前田

七月十九日 宮城

一九四七年（昭和二十二年）

二月十日 伊祖、当山、大平

四月十二日 仲西、城間、屋富祖、牧港、勢理客、内間、港川

一九四九年（昭和二十四年）

二月三日 小湾住民は宮城クモト原へ

2

浦添市史編集委員会編『浦添市史
第七巻 資料編六 浦添の戦後』
一九八七、浦添市教育委員会、十一、
十六頁



仲間に放置されていた戦車の残骸（1952年）
比嘉正育提供

3 仲間収容所から各部落へ戻った時の証言も『浦添市史第七巻』にあったので少し紹介する。

「自分が部落を初めてみた光景は、あれほど茂っていた松が一本もなく、あたり一面赤土がむきだしになって、真っ赤な焼けた原野であった。家屋はなんにもないのに、わが家は爆弾で押し潰されて焼けずに残って瓦などが散乱していた。」（経塚の大田朝英）

「自分の屋敷は屋根瓦・石垣が崩れ落ちて足の踏み場もないほどであった。庭木や屋敷林は燃え落ちて、青い木は一つもなかった。目の前の大名丘陵も真っ白の石山になっていた。先発隊がテント家建築予定の屋敷やその周辺道路を歩けるように崩れ落ちた石垣、瓦などを片づけてあった。そして先発隊が建てたテント家屋で故郷での生活がはじまった。」（沢岬出身の玉城ヨシ）

「安波茶部落住民が総出で部落内の焼け残った家屋から建築に使えるような材木を探しだし、それを集積してみんなに配給していった。当然、それだけでは足りないので村からの配給もあった。それから軍からの払い下げのツーバイフォー（材木）や伊祖に近い仲間部落の軍の大きなチリ捨て場から建築資材を入手してきた。役場には工務課が設置され大工班が編成されていた。その大工班が材木の準備された屋敷の家の骨組みを組み立てていくと、後は素人の部落住民が共同作業で茅を刈ってきて屋根を葺いていった。こうして小さな家屋を次々建設していった。」（先発隊の一員であった宮城篤一）

「家屋建築が始まったが、その材料は大謝名の米軍兵舎であった。いらなくなった兵舎を解体して、先発隊全員で部材を部落まで運んだ。それから建築班長を割り当てそれぞれで区域を決めて標準家屋を次々と建てていった。しかし、各世帯別に入居できるほどの材料はなかったため、五人以上の家族を優先しながら、できあがった家屋への同居の形をとった。」（西原の又吉真一や呉屋実栄）

帰ってきた村民の「衣・食」は、そのほとんどが米軍から支給される補給物資に頼らざるを得ない状況であった。配給所は初めの頃、旧浦添国民学校のコンクリート残骸校舎一階を利用していた。配給物資は当初無償であったが、一九四六年四月の琉球民政府の創設



焼け野原になった浦添国民学校付近（1945年）
『OKINAWA : THE LAST BATTLE』

や五月からの賃金の支払いに伴い配給物資の現金販売となり、同年六月には軍指令により配給業務の民間移管、次に個人営業の小売店へと移行した。配給の主なものは、食糧では米、メリケン粉（小麦粉）、粉ミルク、ラード、砂糖、塩、缶詰類で、衣類は米軍作業服（HBT）、カッパ（雨具）、帽子類であった。無償配給は初めの頃、稼動者と非稼動者に大別して配給し、次第に非農家、補給農家、自給農家の三つに分けて配給、その次に年齢別、労務階級別に差をつける六区分の配給へと変わった。有償配給になった一九四六年六月以降は、非就労者を年齢別で六区分、就労者を労務別で四区分、妊産婦一区分の計十一区分による配給となり、一九四九年九月から翌年四月までは職業別、受給率による物資の配給となった。

一九四六年（昭和二一）八月になると本土からの引揚帰還も開始され、本土や海外からの引揚者の中には親族や親戚等を訪ねる等の動きも散見されている。その結果、浦添では翌年には前年比で二九二七人の人口増となっている。この頃、浦添へ帰ってきた村民もいたが、中には親戚等を頼りに、または仕事を求めて等の理由で浦添に入ってきた人々も少なからずいたと推察する。

戦後、一〇から十五年以内に浦添に入ってきた人を捉えるため、戦後一九四五年（昭和二〇）から一九六〇年（昭和三五）までの間に浦添へ進出して来た主な企業と大きな工事及び住民の本籍地人口等を見ながら、当時の浦添の人口動向について少し概観する。⁴

浦添村内にいち早く設立された主な企業としては、一九四五年（昭和二〇）、字城間に名護鉄工所、一九四六年には字伊祖に沖縄コカコーラボトリング（旧沖縄ソフトドリンクス）である。そして、一九五〇年（昭和二五）六月から牧港火力発電所建設工事や米軍基地建設工事、翌年（一九五一）には村域の米軍施設一号線道路（現国道五八号）の拡張工事が始まった。また、その頃、知花ブロック工業が一九五〇年に字勢理客に設立し、一九五一年（昭和二六）にはフォーモスト・ブルーシール（旧インターナショナル・デアリーズ）が字牧港に、大城物産工場が字港川に設立している。さらに琉球皮革が一九五三年に字小湾、堀川工業所が一九五四年に字港川、牧港ヒューム管工業は一九五九年に字牧港に



牧港火力発電所 浦添市立図書館所蔵

第1節 新しい浦添の建設

設立している。一方、一九五六年（十一月）には米軍補給（QM）部隊が具志川村天願から浦添村城間地域に移動する。

一九六〇年（昭和三五）の浦添住民の就業者構造を国勢調査から観ると、第三次産業が五一四一人と全体の五七・三％で第一位、第二位の第一次産業は二二九〇人で二五％である（戦前までは就業者の約八割が第一次産業で大半が農業・畜産業であった）。また、第三次産業はその中でも卸小売業とサービス業（軍雇用含む）が八五％を占めている。一方で、一九六〇年（昭和三五）の浦添住民の本籍地別人口の一部（表1）を観ると、浦添村人口（二万四五一人）の内、約四五％に相当する一万一〇三二人は浦添村以外の本籍地となっている。また、前記した本籍地が浦添村外の方々の本籍地は、沖縄本島の北部・中部・南部をはじめ、他の都道府県（奄美諸島を含む）二二三五人であることを確認できる。

前記した戦後浦添の企業設立や建設等の工事、米軍補給部隊の移動等に関連するように、浦添の西部地区と呼ばれる牧港、屋富祖、宮城、仲西、勢理客、小湾等で著しく人口が増えている（表2）。また、併せて「浦添住民の本籍地別人口の状況」等を踏まえると、戦後一九六〇年までに浦添に入ってきた人の多くは、沖縄の各地等から第三次産業を主な職業として浦添の西部地区を中心に定住するようになったと考察する。

（下地安広）

表1 1960年（昭和35）の浦添住民の本籍地別人口

地 域		人 口	
浦添村		13,480	
浦添以外	沖縄本島	北部	2,735
		中部	2,194
		南部	2,136
	宮古群島		794
	八重山群島		293
	その他離島		631
	他都道府県		2,135
	外国		112
	不詳		2
	小計		11,032
計		24,512	

資料：国勢調査を一部抜粋・修正（浦添市史第七巻より）

表2 字別人口の推移

区域・年次		1950 (昭和25) 年	1955 (昭和30) 年	1960 (昭和35) 年	昭和25年と 昭和35年の増減	1960/1950 ＝％
総数		11,910	18,832	24,512	12,602	206%
西部地区	西部総数	5,007	12,067	17,158	12,151	343%
	牧 港	883	1,908	2,656	1,773	301%
	港 川	261	469	651	390	249%
	城 間	1,515	3,393	2,782	1,267	184%
	屋富祖	525	2,181	3,854	3,329	734%
	宮 城	1,086	1,963	3,175	2,089	292%
	仲 西	323	661	850	527	263%
	勢理客	389	1,012	1,705	1,316	438%
中部地区	小 湾	25	480	485	460	1940%
	中部総数	1,482	1,759	1,879	397	127%
	伊 祖	768	801	863	95	112%
	大 平	302	405	398	96	132%
東部地区	内 間	412	553	618	206	150%
	東部総数	4,404	5,006	5,475	1,071	124%
	西 原	1,400	1,630	1,812	412	129%
	当 山	237	261	291	54	123%
	仲 間	634	799	865	231	136%
	安波茶	235	301	368	133	157%
	前 田	694	774	882	188	127%
	経 塚	522	475	560	38	107%
	沢 舩	682	717	697	15	102%

※国勢調査より一部抜粋し（浦添市史第七巻より）、増減や％を加筆

参考文献

- 一九八九年 浦添市教育委員会『浦添市史第一巻』「第七章戦後 一各収容所から仲間への移動」
- 一九八七年 浦添市教育委員会『浦添市史第七巻』「第三章農村から都市へ Ⅰ 第一節人口からみた戦後の浦添、第二節産業からみた戦後の浦添」

表3 浦添村の終戦から1950年代までの主な出来事

西暦	元号(年)	月	事 項	備 考
1945	昭和20	6	沖縄戦における日本軍の組織的抵抗終了	
		8	日本の敗戦(ポツダム宣言受諾)	
		9	沖縄戦終了(7日)、沖縄の日本軍の降伏文書調印	
1946	昭和21	2	浦添村民の浦添移動許可下りる(仲間部落に限定)	仲間キャンプ始まる
		4	第一次通貨交換(B円軍票の交付)	戦後沖縄の通貨
		4	沖縄民政府を設置	
		6	浦添村民、各収容所より仲間キャンプに移動終了	約6000余名、棒テント400戸
		7	安波茶・前田・沢舩・経塚・西原・宮城の旧住民に移動許可	
1947	昭和22	2	軍雇用仲介業務のため、村役所に労務課新設	
		2	伊祖・当山・大平の旧住民に移動許可	
		4	屋富祖・城間・仲西・内間・勢理客・牧港・港川の旧住民に移動許可	
		4	村役所で臨時戸籍事務の開始	
		10	第一回各字対抗陸上競技大会を開催	
		11	村民奉仕作業による村全域遺骨収集作業を実施、遺骨は納骨堂へ	
1948	昭和23	2	戦後初の浦添村長選挙の実施	
		3	仲西初等・中等学校、字宮城に設置	
1949	昭和24	2	小湾住民は字宮城クモト原にて集落復興を始める	
		11	浦添村庁舎(瓦葺平屋)の着工	
1950	昭和25	2	浦添村消防団を組織	
		6	牧港火力発電所建設工事始める	
			村内の米軍基地建設が始まる	
1951	昭和26		村域の米軍施設一号線道路(現在の国道58号)の拡張工事始まる	
1952	昭和27	9	浦添城跡内に浦和之塔建立	
1953	昭和28	2	浦添村区設置条例施行(19区を設置)	
1954	昭和29	4	屋富祖通り会の発足	
		9	浦添村全域が電化される(松岡配電による)。	
1955	昭和30	8	浦添ようどれの英祖王陵復元工事の竣工	
1956	昭和31	4	浦添村役所屋富祖支所の開庁	
		11	米軍補給(QM)部隊が具志川村天願から浦添村城間地域に移動	
1957	昭和32	7	浦添村育英会の設立	
		9	浦添村広報「うらそえ」を創刊	
1958	昭和33	4	仲西小学校・中学校が分離独立する	
		9	B円軍票と米国ドルの交換を実施	通貨が米国ドルへと換わる
1959	昭和34	10	シャロット台風で村内被害24万3,000ドル	

第1節 新しい浦添の建設

二 基地建設がもたらしたもの

(一) 牧港補給地区の建設

一九四五年（昭和二〇）四月一日、沖縄本島に上陸した米軍は、戦場を生き残った人々を民間人収容所に送り込みながら、次々に米軍基地を建設していった。

米軍による沖縄進攻作戦の完了後、一九四五年七月二三日には陸軍側と海軍側との間で「グアム合意」が結ばれ、沖縄本島及び周辺諸島における陸軍、海軍の担当エリアが決定された。「グアム合意」に基づく陸軍、海軍のそれぞれの担当エリアとは、沖縄本島中部に限って言えば、石川―仲泊以南の本島中部を中央から東西に二分し、その西側を陸軍の担当、東側を海軍の担当とするものであった。¹

陸軍、海軍が沖縄本島中部を東西にそれぞれ分担する方針は、日本政府がポツダム宣言を受諾した一九四五年八月一日以降も明確に引き継がれた。一九四六年（昭和二一）一月四日付で陸軍工兵局が作成した「基地展開マスタープラン」には、陸軍基地を中心とした詳細な情報を見ることができ（図1）。

図1には石川―仲泊以南の沖縄本島中部のほぼ全域が示されており、この時期における米軍基地の配置状況が概観できる。「グアム合意」を踏襲するように、本島のほぼ中央には島を東西に分割するように境界線が引かれており、浦添村を含む、境界線の西側一帯には陸軍基地がくまなく配置されていることが確認できる。主だった陸軍基地としては、北から弾薬庫、読谷飛行場、嘉手納飛行場、普天間飛行場、那覇軍港、那覇飛行場などが一号線に沿うように配置されており、二〇〇六年（平成十八）に全面返還された読谷飛行場、一九七二年（昭和四七）の施政権返還とともに自衛隊との事実上の軍民共同利用となった那覇飛行場、そして一九四六年一月の時点では未構想だったキャンプズケランを除けば、二〇一五年（平成二七）現在とほぼ変わらない配置であることも見て取れよう。

浦添村にかかる米軍基地としては、“9TH STATION HOSPITAL”や“ENGINEER DEPOT”との中間地点の一号線西側に“MACHINATO GENERAL DEPOT”が確認できる（図2）。この図が示しているように、一九四六年一月の段階で、現・牧港補給地区の一

1

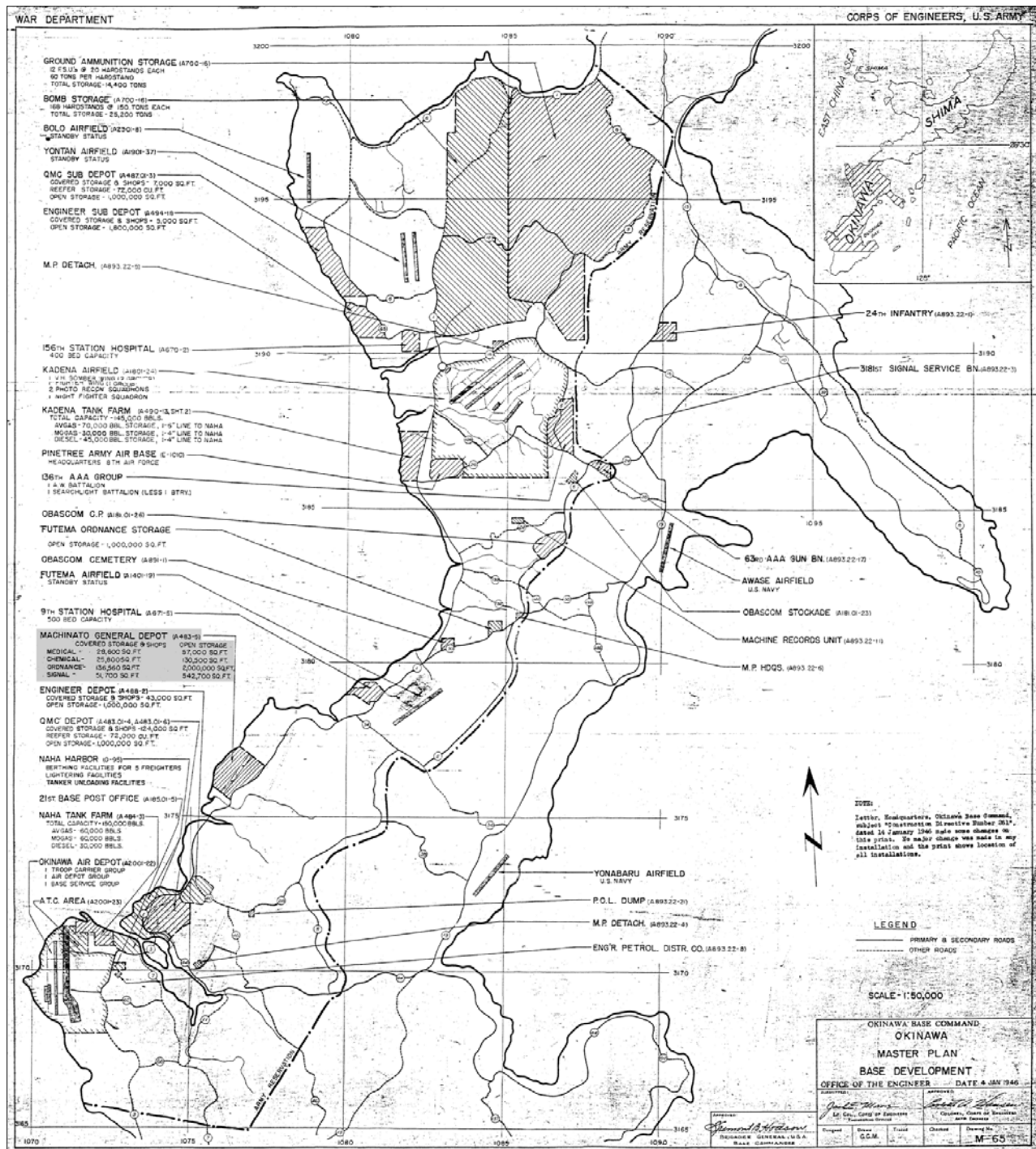
林博史「米軍基地建設と住民強制退去―その植民地主義と人種主義―」『アメリカ史研究』第三十六号 日本アメリカ史学会 二〇一三年 九四―九五頁

2

キャンプズケランの成立過程については林博史の研究に詳しい。林によると、一九四六年八月六日付で陸軍省が作成した「海外基地計画」によって、キャンプズケランの前身である「ズケラン連隊駐屯地」の構想は大きく拡大され、ズケランエリアは在沖陸軍地上戦闘部隊全体を収容する基地として計画されていく。計画の拡大に伴って名称の変更も検討され、一九四七年四月一〇日、極東軍は「キャンプズケラン」という名称を承認し、キャンプズケランは総合的な陸軍施設として建設計画が進められていくことになる。

林博史『差別と暴力としての米軍基地』かがわ出版 二〇一四年 一〇二―一〇八頁参照

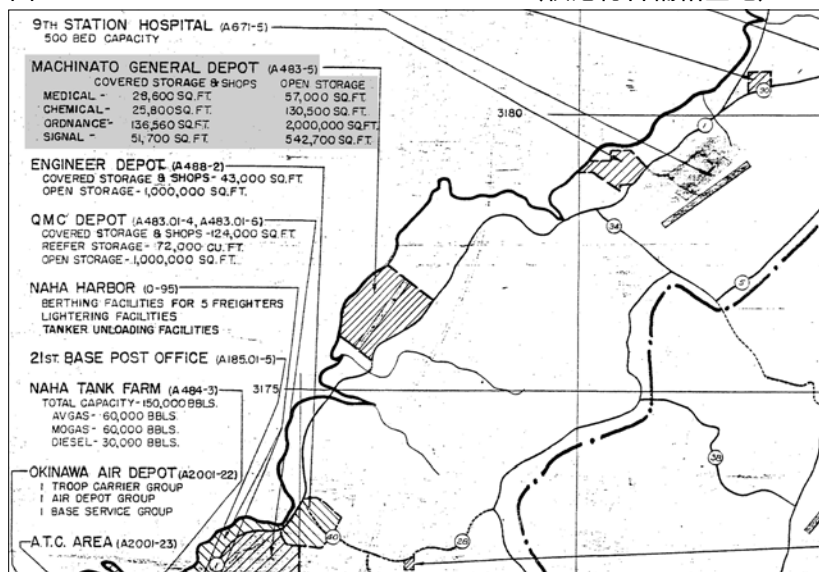
図1 1946年1月4日付「基地展開マスタープラン」



出典 Office of the Engineer, Okinawa Base Command, "Okinawa Master Plan Base Development" 4 Jan, 1946 ("A-153 General, Okinawa Base Command Historical Report" 沖縄県公文書館所蔵 資料コード: U00002099B)

第1節 新しい浦添の建設

図2 MACHINATO GENERAL DEPOT (牧港総合補給基地)



出典 Office of the Engineer, Okinawa Base Command, "Okinawa Master Plan Base Development" 4 Jan, 1946

帯が、医療物資、化学物質、軍需物資、通信物資を貯蔵する、「牧港総合補給基地」として構想されていたことが分かる。

ところで、日本軍の陸軍南飛行場を原型として、米軍が「牧港飛行場」を拡張・整備していたことはよく知られておりである。³ 前出の図2においても、斜線で示されている「牧港総合補給基地」のほぼ中央に滑走路とおぼしきラインがエリアを縦断しているのが確認できるだろう。事実、一九四五年一〇月の段階では、沖縄本島及び伊江島に八つの陸軍飛行場―北から伊江島、本部、ボーロー、読谷、嘉手納、普天間、牧港、那覇―を建設する計画が策定されており、六五〇〇フィート（約二〇〇メートル）の滑走路を持つ

「牧港飛行場」の建設が構想されていた。⁴ こうした計画に基づき、「牧港飛行場」の建設が進められていったが、その後の基地建設計画には修正が加えられ、一九四五年十二月には「牧港飛行場」の構想は撤回、「総合補給基地」へと転用する方針に切り替えられていったのである。⁵

以上の基地建設計画に伴って、沖縄本島中南部の大部分の地域が陸軍、海軍の軍用地として確保された。浦添村においても例外ではなく、再定住計画の完了予定日である一九四六年一月一日を想定した「土地分布計画図」を見る限り、村のほぼ全域が陸軍の「恒久保有地」として確保されていることが分かる。⁶ 陸軍、海

3 例えば大城将保「第三軍の沖縄配備と全島要塞化」『沖縄戦研究Ⅱ』沖縄県教育委員会 一九九九年 あるいは『沖縄県史ビジュアル版五 空から見た沖縄戦 沖縄戦前後の飛行場』沖縄県教育委員会 二〇〇〇年など。

4 "Okinawa Base Command Historical Report" 21 March 1946 ("A-153 General, Okinawa Base Command Historical Report" 沖縄県公文書館所蔵資料コード: U00002099B) 本文に引用した八つの陸軍飛行場のほか、一九四五年八月の時点で、金武、泡瀬、与那原の三つの海軍飛行場をそれぞれ建設する計画が策定されていた。

5 前掲 "Okinawa Base Command Historical Report" 21 March 1946

6 "Map of Okinawa Proposed Land Distribution as of 1 January 1946" 『沖縄戦後初期占領資料』第三八巻 緑林堂 一九九四年 一一八頁

軍ともに、軍用地はもちろんのこと、その隣接地においてさえも住民が定住することに難色を示した。したがって、浦添村内の定住可能な地域は、住民の受け入れ地区として一九四六年二月六日に開放された字仲間以外には皆無であった。⁷

沖縄各地の収容所に四散していた浦添村民が字仲間へと帰還するにつれて、字仲間にはテントが立ち並び、各字・各親族を単位とした共同生活が営まれていった。青年層を中心として、村民は戦争で破壊された地域社会の再興に力を注いでいった。しかしその一方で、各収容所からの帰還者のみならず、南洋群島、台湾、日本本土からの引揚者の受け入れに伴って、字仲間の密集生活が問題となっていたことは想像に難くない。村内の可耕地面積の拡大、農業生産量の増加、農業生産性の向上も、村の喫緊の課題とされたであろう。⁸

こうした問題を抱えつつ、一九四六年七月以降、字仲間から浦添村内の各字への居住許可／移動が段階的に行われていった(表1)。

表1から見える傾向として、一九四六年七月十九日に居住許可が下りた宮城を除けば、浦添村内の一号線沿いの字、すなわち牧港補給地区に隣接する仲西、城間、屋富祖、牧港、勢理客、内間、港川、小湾の居住許可／移動が、内陸部の字に比べて遅れて行われていることがうかがえる。もともと、一号線沿いのそれぞれの字への居住許可／移動が行われたとはいえ、このことは人々が戦前の居住地に定住できたことを必ずしも意味するものではない。事実、牧港補給地区によって戦前の居住地を接収された仲西、城間、屋富祖(名護屋取)、牧港の人々は、それぞれの字の農地などに定住し、集落のほぼ全域を接収された小湾に至っては、集落ごと宮城クモト原への移動を余儀なくされたのである。⁹

こうして基地の周辺に定住せざるを得なかった地域社会の生活状況は、安定を得るには程遠いものであった。

城間の事例

戦前の居住地が牧港補給地区に接収された城間では、集落の東側の野原を戦後の定住地とし、人々はツルハシ、スコップ、鍬などを用いて字の再建に取り掛かった。ツルハシや

表1 浦添村内の居住許可／移動

居住許可年月日	字 名
1946年7月15日	沢岬、安波茶、西原、経塚、前田
〃 7月19日	宮城
1947年2月10日	伊祖、当山
〃 4月12日	仲西、城間、屋富祖、牧港、勢理客、内間、港川
1949年2月3日	小湾住民が宮城クモト原へ移動

『浦添市史』第七巻資料編6「浦添の戦後」16頁より作成

7 『浦添市史』第七巻資料編三「浦添の戦後」浦添市教育委員会 一九八七年十一頁

8 浦添村字仲間と同様に、住民の受け入れ地区に指定された宜野湾村野嵩では、一九四六年一〇月の時点で約一万一〇〇〇人の収容人口を抱えており、「不利不便ノ点」として、「人家密集」や「飲料水ノ欠乏」のほか、衛生環境の悪さや農作業における「生産能力」の悪さもあわせて報告されている。一九四六年一〇月二五日付 宜野湾第一八〇号「部落概況調査報告ノ件」『宜野湾市史』第八巻「戦後資料編I」宜野湾市教育委員会 二〇〇八年 四六―四七頁参照

9 『浦添市史』第一巻通史編「浦添のあゆみ」浦添市教育委員会 一九八九年 三二〇―四六二頁参照

スコップなどの簡易な道具を用いての字の再建は、さぞかし難渋をきわめたことであろう。青年層、壮年層の多くを戦争で失ったことや、食糧事情の悪さからくる低栄養状態及び貧困も、その難渋さに影を落としていたはずである。

こうした困難さを抱えながら出発した城間の再建は、その先行きが見通せないほどの不安定なものであった。

当時、「城間二区」の区長を務めた宮城三郎さんは、この頃の城間の様子を以下のように回想している。

「村民の安住の地は一日も早く整備せねばならぬ。でなければこの土地も（米）軍施設の用地に転化されるおそれがある。〔略〕私は米軍の設備拡張がこの土地に広がるのを一番恐れていたのである」¹⁰

宮城さんの回想からうかがえるように、城間では日常的に基地拡張と対峙する緊張度の高い生活を送っていた。このような日常にあつて、城間の人々が営々と再建に励んだ戦後の定住地は、やはり人々の生活の命綱であつたはずである。生活の命綱であるこの土地を米軍へ引き渡すよう通告されたときも、宮城さんは断固たる拒否を貫いた。米軍側を相手にした再三にわたる粘り強い折衝の結果、城間の人々は米軍に対して土地の引き渡しを断念させるに至つた。¹¹

小湾の事例

戦前の居住地への帰還が米軍によって却下された小湾では、人々は旧居住地に替わる新たな定住地を求めていた。代替地を求めること自体が苦渋に満ちた「選択」であつたであろうが、一九四七年十二月の字民大会では勢理客城門原への移動が満場一致で決定され、浦添村当局も勢理客への移動を内定していた。大城政英さんによると、勢理客城門原の地とは、「岩石だらけで最悪の土地で農耕は不可能」であるにもかかわらず、「いずれ開放さ

10

『城間字誌』第二卷「城間の歴史」城間字誌編集委員会 二〇〇三年 三八六頁

11

前掲『城間字誌』第二卷「城間の歴史」三八六頁

れるはずの、小湾に近い場所」であり、「一時居住するには最適の場所と、私たち住民はみな思っていた」という。¹²つまり、小湾の人々が郷里に隣接する勢理客への「一時居住」を切望したのは、人々が郷里への帰還を信じていたからにはかならなかったからである。勢理客への移動に向けた、小湾の人々の切なる願いは、以下の一文に集約されている。

「〔勢理客は〕大農耕地ニ不便アリモ、今後發展上便利ナル地点デアリ水田モ復興セバ耕作可能、海ニ便アリ、商売上非常に便アリ。旧部落方面ノ耕作ニモ便利アリ、現在軍使用地ナリシモ、必ラズヤ世界平和来求スレバ農耕出来ル可能ナリ」(傍点は引用者)

生活再建の土台が基地の行方に大きく翻弄される日常のなか、小湾の人々は自らの戦後生活の展望を、「世界平和」の希求を通じて描いていたのである。ここでいう「世界平和」の希求とは、基地が開放されることによってはじめて成り立ちうる、自律的な生活へとつなげていく営為であったといえよう。

しかし、一九四九年一月十八日、米軍は「建築許可証」を公布、軍施設及び兵舎から一マイル以内の建物の建築を禁じた。小湾の人々が移動を希望していた勢理客は「一マイル制限」の該当地となり、勢理客への「一時居住」も、郷里への帰還も、事実上閉ざされていった。

一九四九年二月、小湾の人々は割当地であった宮城クモト原への移動を余儀なくされた。当地は「水モ不便ナリ、前途發展上不可能ノ地帯」¹⁴であっただけではなく、隣接地にはMP部隊が駐留する「無法地帯」でもあった。小湾の人々、とりわけ女性は、半鐘のボンベが鳴り響くや否や、壕や墓に逃げ込み、あるいは布団をかぶって、米兵やフィリピン兵による性暴力の恐怖に怯える日々を送った。¹⁵

(二) 基地建設に携わった日本人捕虜

基地建設計画に伴って、陸軍、海軍が沖縄本島中南部の大部分の地域を軍用地として確

12 『小湾字誌』(戦中・戦後編)「小湾新集落の建設とあゆみ」小湾字誌編集委員会 二〇〇八年 一四二頁

13 前掲『小湾字誌』「小湾新集落の建設とあゆみ」三四四頁



小湾集落のようす (宮城クモト原、1955年)
外間次郎提供

14 前掲『小湾字誌』「小湾新集落の建設とあゆみ」三四五頁

15 前掲『小湾字誌』「小湾新集落の建設とあゆみ」一五〇―一五一頁

16 「労働力の不在」の前提として、青年層及び壮年層の多くを戦争で失ったことを挙げておかなければならない。分遣隊に登録されていた合計一万八六六二人からなる男女別、年齢階層別の人口統計(一九四五年八月現在)をサンプルとして、軍政府は、「一五歳から五四歳にかけての年齢層のなかで、生き残った男性は総人口のおおよそ九%である」と分析しつつ、「労働供出の将来的な可能性としては、女性が二六%であるのに対して、男性はおおよそ一〇%である」との見通しを立てていた。

第1節 新しい浦添の建設

保していたことは、前に見たとおりである。浦添村内の定住可能な地域は大きく制限され、牧港補給地区に隣接する一号線沿いの字では、郷里へ帰還できない多数の人々を生み出した。

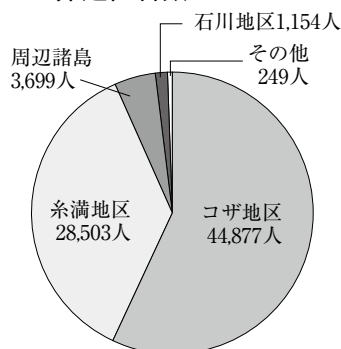
しかしながら、沖縄の基地化によって生じた問題はこれだけにとどまらなかった。

米軍は自軍の部隊要員の減少を民間人の労働力によって補おうとしたが、沖縄の基地化によって本島中南部を中心として人々の再定住が大きく遅延したため、「労働力の不在」といった事態が生じたのである。¹⁶ 軍事施設が集中する地域で労働力を必要としていた米軍は、「最低限の技術を身につけた健全な男性労働力を十分に供給することが不可能」であるとし、民間人の「健全な男性労働力」の代替として「日本軍捕虜の労働を最大限に活用する」との方針を立て、約一万二〇〇〇人の日本人捕虜を軍作業の労働力として頼ったのであった。¹⁷ 換言すれば、米軍側が軍作業の労働力を日本人捕虜に頼ったこと自体が、「軍用地の確保」と「労働力の供給」という、きわめて矛盾した米軍の方針の産物であったともいえよう。

一九四五年一〇月二三日、軍政府は沖縄各地の民間人収容所に四散している人々を再定住させる指令を公布、一九四六年一月一日までには計画を完了させる見通しを立てた（「住民再定住計画及び方針」）。ここで再定住計画について指摘しておかなければならないことは、計画自体が必ずしも人々を各自の戦前の居住地に帰還させることを想定していない点である。指令によると、「家族及び各個人の元住居への帰還は、この指令の他の目的が達成された後とする」（第二項）とあり、さしあたって受け入れキャンプへの定住が規定されている（第七項）。したがって、浦添村の場合、各収容所からの村民の帰還先が字仲間という村の一角であったのは、こうした条項に基づく措置であると考えられる。

このような措置を取ってもなお、再定住計画は大きく遅延した。一九四六年三月九日の段階での「非定住者」の総数は八万人近くにまで達しており、なかでも糸満地区及び浦添村を含むコザ地区の出身者の「非定住者」の合計は七万人を超え、総数に占める割合は実

グラフ1 非定住者数



非定住者総数：78,482人

"Non-Resident Population, By Districts, 9 March 1946"より作成

17

鳥山淳「軍用地と軍作業から見る戦後初期の沖縄社会―一九四〇年代後半の「基地問題」―」『浦添市立図書館紀要』No. 一二 浦添市立図書館 二〇〇一年 七〇―七二頁

“Population Data (Compiled by Welfare Department)”『沖縄戦後初期占領資料』第三〇巻 一一九―一二二頁参照

に九〇%を超えている（グラフ1）。浦添村出身者の場合、計四五六三人が「非定住者」とされている¹⁸。

ただし、鳥山淳も指摘するように、グラフ1に示される「非定住者」には、同一の軍政地区内に留まっていた者が含まれていないことに留意しなければならない¹⁹。つまり、コザ地区のどこかの地域で仮の定住生活を送っていた浦添村出身者は、「非定住者」四五六三人には含まれていないのである。試みに、コザ地区にいたであろう浦添村出身者を「非定住者」の中に含入するならば、言うまでもなくその数は四五六三人を上回るはずである。さらに言えば、これとは別の統計になるが、一九四五年一〇月現在の浦添村出身者の総人口が五七四九人である²⁰ことを踏まえると、一九四六年三月の時点での「非定住者」四五六三人という数字は、コザ地区のどこかで暫定的に定住していた浦添村民を含めていないにしても、浦添村においても再定住計画が大きく遅延していた事実を如実に示している。

その一方、一九四五年一〇月二五日の二八人を第一陣として、日本人捕虜のうち沖縄出身者が屋嘉捕虜収容所から段階的に解放されていった。沖縄出身の捕虜の解放に並行して行われたのが、沖縄各地に開設された捕虜収容所への日本人捕虜の移送であった。一九四五年九月に開設された楚辺捕虜収容所に続き、同年一〇月末には浦添村城間に牧港捕虜収容所が開設され、このとき約一〇〇〇名の日本人捕虜が屋嘉から牧港へと移送された²¹。

屋嘉から牧港に移送された元捕虜によると、他の捕虜収容所同様、牧港捕虜収容所には監視塔がそびえ、有刺鉄線の囲いの中には多くのテントが立ち並んでいた²²。捕虜収容所としての体裁が整うなか、牧港においても連隊、大隊、中隊、小隊に至るまで日本人捕虜の組織化が進み、連隊には連隊本部が置かれ、第一から第七に至る各大隊にはそれぞれに大隊本部が置かれていた²³という。

一九四五年一〇月末の開設以降、牧港捕虜収容所には次々と日本人捕虜が移送され、一九四六年四月末日現在、牧港捕虜収容所は、沖縄各地の捕虜収容所の中でも最大規模の収容人口を抱えていた（表2）。

牧港捕虜収容所がこれほどの収容人口を抱えていた確かな理由については、現時点では

表2 各捕虜収容所の収容人口一覧

通 称	人 員
本部屋嘉	287人
第一支所牧港	3,531人
第二支所楚辺	2,075人
第四支所奥武山（那覇）	1,560人
第五支所那覇飛行場（小禄）	1,459人
第六支所軍事司令部（普天間）	718人
第七支所嘉手納	2,874人
入院（第九病院）	139人
合計	12,643人*

1946年5月11日付「沖縄新聞」より作成

*資料には12,691人とある

- 18 “Non-Resident Population, by Districts, 9 March 1946” 『沖縄戦後初期占領資料』第三八巻 一三五頁
- 19 前掲鳥山「軍用地と軍作業から見る戦後初期の沖縄社会」一九四〇年代後半の「基地問題」一七〇頁
- 20 “Comprehensive Analysis Chart on Okinawan Population” 『沖縄戦後初期占領資料』第三八巻 一〇九頁
- 21 『読谷村史』第五巻資料編四「戦時記録下巻」読谷村役場 二〇〇四年三一八頁
- 22 関根清『血塗られた珊瑚礁 一衛生兵の沖縄戦』JCA出版 一九八一年一九頁
- 23 前掲関根『血塗られた珊瑚礁 一衛生兵の沖縄戦』一一九―一二〇頁

第1節 新しい浦添の建設

明らかではない。ただし、可能性の一つとして、「この連中は要塞の作業に使われるらしい。とても内地には帰れそうにもない」²⁴との不安を漏らす捕虜がいたことから推察するに、牧港が三五三一人もの日本人捕虜を収容していたのは、米軍が牧港捕虜収容所の日本人捕虜たちを「要塞の作業」、すなわち基地建設の労働力の主力として位置付けていたからなのかもしれない。

米軍側の資料によると、一九四六年七月の時点での、米軍が日本人捕虜に割り振った業務内容ごとの大まかな内訳は、概数である計一万二六〇〇人のうち、航空隊に直接使役される捕虜が四七五〇人、補給作業に二二三五人、建設作業、テクニカル・サービス、補修作業及び捕虜収容所に五六一五人とされている。²⁵このデータが示すように、日本人捕虜が基地建設に動員されたことは明白であるが、実際に米軍がどの業務内容を牧港の日本人捕虜に割り振っていたかまでは不明である。それを明らかにするための現時点での手がかりとしては、牧港に収容されていた元捕虜の回想によらなければならないが、それによると、牧港の捕虜に割り振られた業務内容は、テントの跡片付け、道路の補修、糧末置場の整理、米兵の炊事道具の洗浄、米軍墓地の清掃などで、ちなみに、捕虜への業務の割り振り方は「行き当たりばったり」であったという。²⁶

いずれにせよ、牧港捕虜収容所における収容人口と日本人捕虜の具体的な業務内容とをめぐむ問題は、現時点では明らかではなく、基地建設計画の展開を確認しながら、米軍側の一次資料の調査・分析も含め、今後の研究課題となろう。

牧港に収容されていた元日本人捕虜たちの回想で共通してみられるのは、牧港捕虜収容所の食糧事情の悪さである。例えば、屋嘉から牧港に移送された元捕虜の回想によると、牧港では「石川^マとちがい、作業隊だけに、病人以外は全部出動」しなければならなかったほどの重い労務を課せられていたにもかかわらず、捕虜に与えられる食事は「いままでのレーションや米の配給はなく、ビスケット二、三枚にスープだけ」であったという。²⁷また別の元捕虜も「十一月に入ったころ、急に朝・昼・晩の三食ともビスケット三枚、スープ

24 松本謙治郎『阪神タイガース松本一等兵の沖縄捕虜記』現代書館 二〇一二年 一七二頁

25 "SX 41992 GSCOM" 30 July, 1946
* (AFWESPAC (U.S. Army Forces, Western Pacific), April 1946; June 1946; July - December 1946."
沖縄県公文書館所蔵 資料コード: 0000099608)

26 前掲関根『血塗られた珊瑚礁 一衛生兵の沖縄戦』一一一―一二三頁

27 前掲松本『阪神タイガース松本一等兵の沖縄捕虜記』一七二頁

がカップに半分の食事になった。やっと体力が戻りつつあったのに、再び飢餓感に苦しむことになった。恐ろしく腹ペコの毎日、しかも作業は厳しい。「略」昭和二十一年の正月は最低であった。空腹は約三ヶ月続いた²⁸と、牧港での「飢餓感」を回想している。

牧港捕虜収容所における食糧事情の悪さは、やがて日本人捕虜たちの不満を高めていき、「ストライキ」にまで発展していった²⁹。米軍との交渉の結果、捕虜への食糧が増配されはじめると、それ以降はその残り物を隠し持つ捕虜が増えていったという³⁰。このほか、牧港の「野戦倉庫」や「病院」から、ビール、チョコレート、薬品、アルコール、シーツ、白い靴下、化粧品などの諸物資を日本人捕虜が盗難する事件が横行し、盗難の発覚を恐れた捕虜が収容所から逃亡を実行したとの元捕虜の証言も見ることが³¹できる。

日本人捕虜による作業拒否及び収容所からの逃亡に対する米軍側の認識は、捕虜の送還が延期されたことに対する不満や、あるいは捕虜収容所での待遇の悪さに対する不満としてではなく、「残存軍隊との連絡の下に仕込まれてゐる組織的なゲリラ的反抗³²」として見なすものであった。日本人捕虜をあくまでも敵兵として見なす米軍側の認識が反映されたためか、牧港では作業場から逃亡を企てたとして、捕虜の一人が「米軍監視者」によって射殺されるという事件が発生した³⁴。牧港捕虜収容所の「連隊長」である日本人捕虜からは、「米軍の命ずることを素直に実行」せよとの厳格な態度が呼び掛けられており、米軍将校からは「米軍に対する反抗行為は、待遇の悪化と帰国の遅延といふ結果をもたらすであらう³⁶」との恫喝もなされていた。それでもなお、逃亡逮捕者は跡を絶たず、二週間の処罰、特殊労役、厳重な監督、自由な時間及び待遇の差別、そして帰国の後回し³⁷などの制裁措置が、収容所内で発刊されていた新聞紙上を通じて、米軍側から日本人捕虜へと再三にわたって通知された。

しかしながら、送還を延期するという再三にわたってなされた恫喝とは裏腹に、このとき米軍側は、「捕虜労働力の損失は、西太平洋軍地区の至る所で深刻な影響を及ぼすであ



捕虜収容所内で発行された「沖縄新聞」
沖縄県平和祈念資料館所蔵

- | | |
|----|--|
| 28 | 上根保『生還 激戦地・沖縄の生き証人六〇年の記録』幻冬舎ルネッサンス 二〇〇八年 一三六―一三七頁 |
| 29 | 前掲関根『血塗られた珊瑚礁 一衛生兵の沖縄戦』一二〇頁 |
| 30 | 前掲松本『阪神タイガース松本一等兵の沖縄捕虜記』一七五頁 |
| 31 | 『金武町史』第二卷「戦争・証言編」金武町教育委員会 二〇〇二年 五三八―五四一頁 |
| 32 | 帰国遅延に起因する作業拒否の事例として、「沖縄新聞」は、読谷村の楚迎捕虜収容所で「サボターチュ的態度」に出た日本人捕虜を報じている。 |
| 33 | 昭和二十二年五月四日付「沖縄新聞」『金武町史』第二卷「戦争・資料編」金武町教育委員会 三八九頁参照 |
| 34 | 昭和二十二年五月四日付「沖縄新聞」前掲『金武町史』「戦争・資料編」三八七頁 |
| 35 | 昭和二十二年八月十六日付「沖縄新聞」前掲『金武町史』「戦争・資料編」四四六頁 |
| 36 | 昭和二十二年五月十七日付「沖縄新聞」前掲『金武町史』「戦争・資料編」三九四頁 |
| 37 | 昭和二十二年五月四日付「沖縄新聞」前掲『金武町史』「戦争・資料編」三八九頁 |
| | 昭和二十二年六月十四日付「沖縄新聞」前掲『金武町史』「戦争・資料編」四一〇頁 |

第1節 新しい浦添の建設

ろう。捕虜の送還の優先順位は、使役されるところのプロジェクトの重要度の逆の順番にすべきである」³⁸との思惑を抱えていた。労働力の確保という観点から言えば、捕虜の送還が延期されることは、沖縄に駐留する米軍にとっては、むしろ都合の良い事態であったのだと言えないこともないが、いずれにしてもここで指摘しておくべきは、先ほどの思惑が如実に示しているように、米軍側は沖縄の日本人捕虜たちの損失を恐れ、また捕虜たちに深く依存していたという実態である。

沖縄の日本人捕虜の本格的な送還が始まる一九四六年一〇月以降、軍労務の主力は次第に沖縄の人々へと移行していく。浦添村においても、牧港捕虜収容所の日本人捕虜たちの労働力に取って代わるかのように、「二二六部隊」³⁹などのカンパンが、沖縄社会の労働力を吸収していくのである。(清水史彦)

(三) 基地で働くために移動してきた人々

アメリカ軍の基地で働くために浦添に移動してきた人々の態様は、①戦争が終結したことにより、アメリカ軍組織の縮小による軍人の減少、②アメリカ軍による強制的な農耕地収用⁴⁰、③基地機能の充実・拡大や関連企業の進出、④若者の農村から都会への憧れなど、また基地を円滑に運営・維持して行くためには住民労働力を確保することが必要不可欠であったことなど幾つかの要因が考えられる。

①アメリカ軍組織の縮小

一九四五年(昭和二〇)八月に二五万人を超えた沖縄のアメリカ軍は、戦争終結により一年後の一九四六年八月には二万人に減少し、三年後の一九四八年(昭和二三)八月には一万人にまで減少したと言われている⁴¹。

しかし、このように縮小したアメリカ軍組織だけでは、「沖縄侵攻作戦計画書」(アイスバーク作戦)や「沖縄恒久基地化構想」(一九四五年一〇月二三日の軍部方針)を実行・遂行することは期待することができなかった。そこで、アメリカ軍はその労働力を多

38 前掲「SX 41992 GSCOM」30 July, 1946

39 構内、屋敷のこと。戦後沖縄では、主に米軍部隊構内の基地従業員宿舎をさして、牧港カンパン、普天間カンパン等と称した。

40 軍用地として農耕地を収用された人々の中には、南米へ移民する者もあった。本編第一章「ブラジル」「ボリビア」を参照。



基地従業員のためのオリエンテーション資料
(1956年)
浦添市立図書館所蔵

41 烏山淳『沖縄基地社会の起源と相克』勁草書房 二〇一三年 四一―四二頁

くの日本軍捕虜に求めた。その具体的な状況は表2のとおりである。

このように日本軍捕虜がアメリカ軍基地で働く（以下「軍作業」という）ということはあくまでも日本本土への帰国までの暫定的なもので、戦争で疎開・避難していた人々が一九四六年（昭和二一）八月から日本本土より沖縄へ引き揚げてくる中で、現地の人による労働力が確保され、日本軍捕虜に代わって沖縄住民が軍作業の主力になっていく。⁴²

②農耕地の収用による農村再建の困難

沖縄本島中部地域の基地周辺の住民が軍作業に流入した背景には、農業の再建を阻害するさまざまな存在があった。一九五〇年（昭和二五）三月の時点での耕地面積は戦前の三五%まで減少している。特に中部では五四%も減少している。⁴³これらのほとんどがアメリカ軍によって強制的に農地が軍用地化されたためである。このような地域に住んでは「もはや農業で生きることが不可能」と考えた多くの人々が次々と故郷を去り、軍作業に従事しなければならなかった。⁴⁴

当時の軍作業は待遇が良く、「通訳」「タイピスト」「運転手（当時はドライバーと言っていた）」は特殊技能保持者としてアメリカ軍から重宝された。中でも運転手は軍で不要になった物資を入手できることもあったという。当時の沖縄は安定した企業も少なく、僅かながら教員などの公務員が恵まれた職業であったが、これらに比べても軍作業は高収入で、教員を辞めて軍作業に就くと給与が三倍になったとの証言もある。⁴⁵

③基地機能の充実・拡大や関連企業の進出

浦添でのアメリカ軍の基地建設や牧港発電所の建設など大型工事に伴って、沖縄本島中・北部や周辺離島、宮古・八重山及び奄美大島などから職を求めて人々が移動してきた。中には工事が一段落した時点で帰郷した人々もいた。しかし、基地機能が動き出すと、これまで基地建設や牧港発電所の建設に携わっていた人々が新たな職場を求めて軍作業員として建設間もない基地で働くようになり、浦添を拠点として活動するようになった。

42 鳥山淳「軍用地と軍作業から見る戦後初期の沖縄社会―一九四〇年代後半の『基地問題』―」『浦添市立図書館紀要』NO・十二 二〇〇一年 七一頁

43 前掲『沖縄 基地社会の起源と相克』一一五頁

44 前掲『沖縄 基地社会の起源と相克』六六頁

45 前掲『沖縄 基地社会の起源と相克』一一九頁

第1節 新しい浦添の建設

一九五〇年（昭和二五）六月に勃発した朝鮮戦争（朝鮮動乱）やその頃から東西冷戦などの国際政治情勢の変化に伴って、アメリカ軍の基地機能が強化され、同時に多くの雇用が生み出された。また、激しい戦争で一家の大黒柱を失い、田畑は荒廃して耕作ができなくなった者たちにとっては、現金収入が得られる基地で働くことは生きるための手段でもあった。

一九四六年（昭和二一）一月のアメリカ軍基地建設計画の中で仲西飛行場（南飛行場）は「貯蔵施設」として転用されていた。特に、一九六〇年（昭和三五）六月に始まったベトナム戦争の頃には、浦添にあるアメリカ軍の基地は「物資の補給基地」（第二兵站部隊）として基地機能が充実拡大されていき、多くの人手を要した。そのため他のアメリカ軍基地から浦添の基地への配置換えも多く、慌しい時期でもあった。

④若者の農村から都会への憧れ・移動

現金収入の少ない農村の若者がアメリカ軍基地で職を求めたのは、都会への憧れに加え、向学心に燃えながらも家庭の経済的な事情・地理的条件等で高等教育を受ける機会に恵まれなかったが「高い給与で学費が稼げる」「よほどのことがない限り残業のない勤務形態」が、この上なくよい職場であったからである。そのため、アメリカ軍基地で働く多くの勤労学生もいた。県都那覇に近い浦添へは、先に移住した親戚や友人等を頼って移動してきた者も多かった。

このように、浦添で職を求め、基地で働く人々の多くは、生活環境や教育環境に恵まれ、今日ではその二世・三世が市の発展の一翼を担っている。（仲間孝藏）

三 一号線建設

一九四五年（昭和二〇）四月に、アメリカ軍は読谷・嘉手納・北谷方面の海岸から上陸し、その日の内に読谷飛行場（北飛行場）と嘉手納飛行場（中飛行場）を占領した。アメリカ軍の沖縄占領政策である「沖縄侵攻作戦計画書（アイスバーク作戦）」によると、上陸したアメリカ軍に課された任務は、上陸と同時に主要道路の建設や戦争で破壊された道

参考文献

- 沖縄タイムス中部支社編集部『基地で働く 軍作業員の戦後』沖縄タイムス社 二〇一三年
- 川平成雄『沖縄空白の一年 一九四五―一九四六』吉川弘文館 二〇一一年
- 我部政明『戦後日米関係と安全保障』吉川弘文館 二〇〇七年
- 平良好利『戦後沖縄と米軍基地「受容」と「拒絶」のはざままで 一九四五―一九七二年』法政大学出版会 二〇一二年
- 鳥山淳『沖縄／基地社会の起源と相克 一九四五―一九五六』勁草書房 二〇一三年
- 中野好夫・新崎盛暉『沖縄戦後史』岩波新書 一九七六年
- 林博史『米軍基地の歴史 世界ネットワークの形成と展開』吉川弘文館 二〇一二年
- 宮里政玄『日米関係と沖縄 一九四五―一九七二』岩波書店 二〇〇〇年
- 若林千代『「みなと村」の構造―戦後沖縄における「占領」の縮図―』『沖縄戦と米国の沖縄占領に関する総合的研究』二〇〇六年



英語と日本語で表記された道路標識（1971年）
浦添市立図書館所蔵

路や橋の再建・修理が最重要課題であった。

いち早くこのような占領方針を明確にしたのは、日本本土侵攻作戦に向けて、本島中部では大規模な基地建設が必要であったからである。アメリカ軍が沖縄を占領する上で、道路の確保と整備が如何に重要なことであったかが領^{うな}けるものである。

また、「米陸軍省戦史編集部の資料によると、『上陸後ほどこなく、沖縄西海岸南部道路には「合衆国一号線」の標識が各所に立てられ、道路が確保されるたび工兵隊の計画に従って、全主要道路に番号を付けられ、同じような方法で道路標識が打ち立てられていった。』と記されている。¹

このような背景で企画・立案された「沖縄侵攻作戦計画書」の具体的内容は「それぞれの戦闘地域内において、三十五トン荷重の負荷に耐える全ての主要交通道路の建設・再建工事及び修理担当の義務を負う」というものだった。²

しかし、戦争によって破壊された道路や橋、またアメリカ軍の侵攻を阻止するために日本軍によって破壊された橋などの建設・再建には、アメリカ軍だけでは人手不足であった。特に、本土上陸を視野に入れているアメリカ軍にとっては、主要幹線道路である一号線の整備・拡張は急務の作業であった。

そこで、アメリカ軍が採ったのが、激しい戦争を生き抜いた地域の人々を雇用することであった。これがいわゆる道づくりから「軍作業」は始まったと言われる所以である。

アメリカ軍占領下で軍道路として建設された一号線は、那覇の明治橋から国頭村奥までの沖縄本島を縦断する約一二三キロの幹線（現在の国道五八号）となった。

戦前まで沖縄の人々が利用していた那覇から北へ向かう道路は、起伏のある地形を迂回しながら比較的平坦な土地を通っていた。ところが、アメリカ軍は物資の輸送や基地機能の充実強化のため、この曲がりくねった細い道路を真直ぐにすると同時に整備・拡張を行った。浦添での工事の状況が以下の写真で確認できる。

アメリカ軍の政策によって開通した一号線は、これまでの道路機能とは雲泥の差で、流通機能が格段に発達した。特に那覇から浦添を通り、嘉手納までの区間の整備・拡張は浦



住民が道路建設に携わるようす（月刊沖縄社）
『やんばる国道物語』77頁



パイプライン（伊祖付近）にあった標識（1983年）
浦添市立図書館所蔵

1 『やんばる国道物語』やんばる国道変遷誌編集委員会編、内閣府沖縄総合事務所北部国道事務所、二〇〇五年、七〇頁

2 前掲『やんばる国道物語』七〇頁

第1節 新しい浦添の建設

添の発展に大きく関係した。

この道路は、那覇から読谷までの六五キロが軍道路で、読谷から名護までを軍営繕道（後に軍道）、名護から奥までが純政府道路という管理が定められていた。

当初は重量に耐えうると同時にトラックや戦車などの通行に支障のない程度に道幅を広げる程度の道であった。各地の基地が建設・整備されるようになると、これまでの道幅や砂利道では物資輸送や緊急時の対応に支障を来すと同時に一九五〇年（昭和二五）に勃発した朝鮮戦争（朝鮮動乱）や東西の冷戦の影響を受け、軍事基地の機能の強化にともなって、主要道路から随時アスファルト舗装道路へと変わって行った。また道路の両脇には電柱などの障害物もなくいかにも滑走路を髣髴させるため、当時はこのアメリカ軍の政策を「一号線は非常時に滑走路にするためだ」と言われた。

四 発電所建設

浦添では現在の国道五八号（旧軍用道路一号線）から西海岸に至る広大な地域をアメリカ軍は終戦直後から軍事物資の集積場として使用していたが、一九四八年（昭和二三）にこの大部分の二六五万平方メートル（約八〇三万坪）を強制的に接収した。

その後、アメリカ合衆国やイギリスを中心とする西欧諸国とソ連や中国などの国々との政治的な思想の違いによる世界情勢の急激な変化が起こった。その結果、一九四九年（昭和二四）一〇月に中華人民共和国（中国）が成立。また一九五〇年六月朝鮮戦争勃発といった東アジア情勢の急激な変化を背景に、沖縄の各地に恒久的なアメリカ軍の軍事基地建設が始まった。

集落の復興・整備を進める浦添では、一九五〇年頃から米軍基地建設が始まり、それに合わせて企業の創業・進出が相次いだ。基地建設工事等に関連する企業として、知花ブロック工業が一九五〇年に勢理客で、牧港ヒューム管工業が一九五九年に牧港で創業している。また、特に、米軍人・軍属や基地工事、それに関連する企業の設立に伴う人々の移動、及び職を求め浦添や近郊に移住してきた人々を市場と考えたフォーモスト・ブルー



沖縄電力株式会社（2014年） 仲間孝蔵撮影



1号線屋富祖付近（1960年代）
浦添市立図書館所蔵



牧港橋付近の工事『浦添のあゆみ』73頁

シール（旧インターナショナル・デアリース）が一九五一年に、更に琉球皮革が一九五三年に創業している。

大型工事の始まりや企業の進出が目覚ましい頃であった。中でも牧港火力発電所の工事や軍用道路一号線（現在の国道五八号）の拡張改良工事は浦添の発展に大きな影響を与えた。

各種企業の進出や電力の需要に伴って牧港火力発電所は、一九七二年（昭和四七）五月の沖縄の本土復帰と同時に、社名を「沖縄電力株式会社」と改め、電力事業だけでなく、一次、二次、三次産業の発展のために大きく貢献し、今日では沖縄県においては大きな企業となっている。

牧港の市街地の整備

戦前の牧港について、柳宗悦は「平板に大きく一枚の石を切って、それを縦に並べて塀を作る。この式は時折他でも見かけたが、此の村程よく集った所は少い。之が為に村全体に力が加わり、美しさが増し、風情があつて忘れ難い。何か大まかで、単純で、それに石味も加わって見事である。琉球の農村を語る時は、是非此の場面を加えていい」と観察している。³

栗石の壁や石垣で知られたこのような美しい景観を醸し出していた戦前の牧港集落は、戦争で壊滅的に破壊された。更に集落の元の住宅地であった現在の株式会社琉薬やマクドナルド牧港店辺りはアメリカ軍用地として接収されたため、戦前は農耕地であった元の集落の南東側の小字桃園に新しい集落を建設しなければならなかった。

新しい集落建設の際の測量は、アメリカ軍の電話線に一間単位の赤い布を結んで、四名以上の家族の場合は七二坪、それ以下の場合には三六坪と、家族の員数によって土地の区画が割り当てられ、元の地主に対しては優先権を与えた。その後はくじ引きで決定し、家屋建設に先立ってドラム缶便所が造られた。

家屋はテント屋根から始まり、次第に茅葺屋根の生活に変わってきたと、『牧港字誌』⁴



牧港 伊祖グスクからの遠望（2014年）
仲間孝蔵撮影

3

柳宗悦『柳宗悦全集』第十五巻 筑摩書房 一九八一年 二〇九頁。なお漢字は新字体に改め「平板」にルビを付した。

4

『牧港字誌』浦添市牧港自治会 一九九五年 一〇三頁

第1節 新しい浦添の建設

は記している。

戦争で壊滅的に破壊され、戦後復興も先が見えない中で、人々はその日その日をどのようにして生きて行くかを案じた。一九四七年（昭和二二）四月に仲間キャンプから帰郷した牧港の人々は、まずは住居の確保を考えなければならなかった。割り当てとはいえ、家・屋敷の確保に安堵したものであった。

しかし、急場を凌ぐための混乱した中で街づくりがなされたため、集落内の生活道は道幅が狭く、未だ戦後の面影を残し、今日のような車社会では何かと不便な所も出てきている。

牧港火力発電所の建設

牧港火力発電所は、一九五〇年（昭和二五）六月から建設工事が始まった。それまでアメリカ軍も大容量の発電所をもっていたのではなく、ディーゼル発電機を利用して地区ごとに何とか自家需要を満たしているというのが実情であった。

各地域にあった群小の電力供給源にたよって細々と需要をまかなってきた沖縄の電気事業が、全島系列化に向けて動き出すきっかけとなったのは、占領地域統治救済資金とよばれる、米政府予算計上の資金援助で、第二次世界大戦後、占領地域の人々を飢餓・疾病・社会不安などから救済することを目的としたガリオア資金であった。アメリカ軍は基地の本格的建設に連動して、ガリオア資金により大型火力発電所の建設に乗り出した。その第一号が牧港火力発電所であった。

総出力四万六〇〇〇キロワットの発電所の工事に当たったのは、建物建設を担当する清水建設、発電機その他これの付随計器類を担当する東京芝浦電気とボイラー・ファンを受け持つ東洋バブコック、タービンの石川島芝浦タービン共同工事（J V）などの本土企業によって行われた。

発電所の完成後は、アメリカのギルバート社が請け負い、営業を開始した。

表1 沖縄へのガリオア援助

単位は1,000ドル

区分	年	1947年	1948年	1949年	1950年	1951年	1952年
建築関係		0	0	774	18,998	12,455	2,769
電力施設					5,000	2,000	73
水道施設					200	1,469	0
その他					13,798	8,986	2,696
物資及びサービス		9,260	13,949	24,082	30,418	24,050	10,125
食料品		8,298	10,700	9,484	9,144	13,237	6,401
肥料、種子類		140	150	4,045	4,455	394	796
油脂類		120	120	936	1,531	1,335	1,288
薬品		160	320	521	1,082	0	0
工業建築資材		0	0	1,538	509	4,770	0
工業機械、部品		0	0	1,367	1,566	364	0
車両部品		0	0	477	1,419	693	0
教育材料		108	298	803	1,315	290	41
その他資材器具		0	1,151	1,454	5,255	2,176	184
運搬費		434	1,210	3,457	4,142	791	1,415
技術援助					0	57	54
教育及び技術訓練					165	183	309
総計		9,260	13,949	24,856	49,581	36,745	13,257

出所：USCAR, Civil Administration of the Ryukyu Islands, Vol.9 no.1

宮里政玄『アメリカの沖縄統治』岩波書店、1966年、28～29ページをもとに作成。



牧港火力発電所（1970年）
浦添市立図書館所蔵

勢理客	内 間	沢 舩	経 塚	前 田	西 原	当 山	大 平	西 洲	キャンプキンザー	伊奈武瀬	計
341	384	616	514	606	1,308	195	282				9,523
349	373	617	510	615	1,289	196	271				9,508
360	407	680	542	661	1,369	227	282				10,367
367	407	697	560	693	1,384	248	289				10,688
389	412	682	522	694	1,400	237	302				10,893
411	414	665	483	692	1,414	223	313				11,075
473	454	684	480	725	1,463	243	364				11,891
538	486	696	479	743	1,484	249	376				13,541
612	520	708	478	761	1,507	255	389				15,654
696	557	719	477	781	1,531	262	403				18,394
722	566	745	493	800	1,599	267	416				19,010
1,103	598	771	510	825	1,753	279	440				20,303
1,321	634	686	513	800	1,793	249	422				20,948
1,347	645	702	524	820	1,848	259	430				21,747
1,649	617	696	568	887	1,817	287	439				24,010
1,675	625	683	577	905	1,863	293	450				25,030
2,017	621	691	567	925	1,893	307	444				26,184
2,075	634	713	592	961	1,929	301	440				27,161
2,348	718	706	591	953	1,965	295	461				28,604
2,823	879	713	595	984	1,967	298	468				30,315
3,267	1,088	728	604	1,000	1,996	289	573				32,503
4,087	1,641	750	622	1,038	2,056	300	735				35,856
4,569	2,364	770	663	1,102	2,223	305	1,019				39,089
4,848	3,044	781	675	1,122	2,340	320	1,215				41,596
5,187	3,650	818	746	1,161	2,434	312	1,417				44,498
5,183	4,381	865	786	1,245	2,477	317	1,692				47,890
5,427	5,233	977	916	1,381	2,563	340	2,090				53,075
5,401	5,747	1,001	979	1,468	2,631	460	2,338				53,790
5,099	6,061	1,076	1,009	1,609	2,647	483	2,323				54,283
5,225	6,348	1,311	1,128	2,022	2,796	564	2,348				57,317
5,209	6,747	1,345	1,284	2,493	2,916	660	2,828				60,513
5,069	7,155	1,538	1,414	3,191	3,081	764	3,228				63,754
4,685	7,529	1,918	1,474	3,755	3,085	754	3,119				65,862
4,839	7,775	2,053	1,549	3,977	3,255	813	3,205				67,425
4,935	7,996	2,151	1,670	4,295	3,345	876	3,286				69,366
4,956	8,012	2,269	1,695	4,428	3,414	974	3,332				70,438
4,909	8,063	2,444	1,734	4,634	5,579	1,106	3,416				75,190
4,849	8,376	2,676	1,769	4,931	4,287	1,196	3,674				77,358
4,865	8,415	2,692	1,775	4,908	4,318	1,195	3,648				77,712
4,834	8,415	3,000	1,847	5,480	5,105	1,355	3,707				82,318
4,670	8,641	3,148	2,298	5,841	5,588	1,413	3,777				85,136
4,516	8,829	3,265	2,628	6,031	5,800	1,473	4,277				87,171
4,499	8,807	3,567	2,510	6,174	5,947	1,545	4,393				88,273
4,465	8,788	3,578	2,538	6,137	5,971	1,548	4,398				88,340
4,378	8,817	3,666	2,718	6,380	6,400	1,665	4,445				90,484
4,309	8,811	3,832	2,800	6,639	6,681	1,665	4,752	1			91,896
4,275	8,790	4,109	2,812	6,765	7,053	1,752	4,977				93,679
4,333	8,693	3,656	2,978	6,913	7,309	1,812	5,421				94,706
4,251	9,196	3,069	3,165	6,987	7,779	1,864	5,515				95,798
4,321	9,163	3,103	3,428	7,027	8,090	1,949	5,534				97,217
4,493	9,122	3,235	3,677	7,214	8,268	1,938	5,679				98,536
4,479	9,164	3,265	3,707	7,221	8,325	1,925	5,660		100		98,722
4,346	9,038	3,723	3,890	7,493	8,765	2,035	5,292		118		101,350
4,391	9,155	3,852	3,941	7,546	9,003	2,155	5,222		151		103,078
4,391	9,270	3,974	4,039	7,597	9,163	2,229	5,182		185		104,308
4,356	9,391	3,973	4,046	7,585	9,277	2,269	5,304		201	1	104,770
4,441	9,399	4,061	3,998	7,670	9,506	2,318	5,338		197	1	105,485

『うらそえの人口（戦後編）』浦添市役所、2003年をもとに作成。

第1節 新しい浦添の建設

表2 字別人口動態表

和 暦	西 暦		仲 間	安波茶	伊 祖	牧 港	港 川	城 間	屋富祖	宮 城	仲 西	小 湾
昭和21年	1946年	12月31日現在	522	205	680	707	218	1,317	419	915	269	25
昭和22年	1947年	12月31日現在	535	191	680	719	216	1,305	420	923	274	25
昭和23年	1948年	12月31日現在	599	223	740	783	255	1,419	469	1,018	308	25
昭和24年	1949年	12月31日現在	627	237	762	809	263	1,443	505	1,047	325	25
昭和25年	1950年	12月31日現在	634	235	768	883	261	1,515	525	1,086	323	25
昭和26年	1951年	12月31日現在	639	230	771	963	257	1,589	544	1,124	318	25
昭和27年	1952年	6月30日現在	680	260	810	1,088	291	1,703	599	1,201	348	25
昭和28年	1953年	12月31日現在	719	272	807	1,309	342	2,145	922	1,518	431	25
昭和29年	1954年	12月31日現在	761	286	804	1,574	401	2,702	1,419	1,919	533	25
昭和30年	1955年	12月31日現在	804	300	800	1,893	472	3,402	2,185	2,427	660	25
昭和31年	1956年	12月31日現在	829	310	813	1,948	505	3,486	2,307	2,505	674	25
昭和32年	1957年	12月31日現在	853	319	835	2,058	518	3,631	2,488	2,601	696	25
昭和33年	1958年	12月31日現在	856	304	835	2,173	492	3,294	2,970	3,025	556	25
昭和34年	1959年	12月31日現在	877	310	847	2,214	497	3,719	3,040	3,082	561	25
昭和35年	1960年	12月31日現在	840	351	872	2,528	561	3,659	3,936	3,573	705	25
昭和36年	1961年	12月31日現在	889	332	902	2,590	602	3,669	4,206	3,971	773	25
昭和37年	1962年	12月31日現在	903	335	912	2,746	646	3,750	4,356	4,213	833	25
昭和38年	1963年	12月31日現在	909	351	926	2,885	676	3,870	4,325	4,611	938	25
昭和39年	1965年	12月31日現在	901	346	921	3,084	747	4,043	4,477	4,894	1,129	25
昭和40年	1966年	12月31日現在	902	358	925	3,293	713	4,145	4,669	5,180	1,378	25
昭和41年	1967年	12月31日現在	885	385	960	3,505	845	4,353	4,945	5,417	1,638	25
昭和42年	1968年	12月31日現在	907	372	1,056	3,903	880	4,472	5,335	5,774	1,903	25
昭和43年	1969年	12月31日現在	916	384	1,262	4,270	918	4,645	5,507	6,035	2,112	25
昭和44年	1970年	12月31日現在	935	406	1,420	4,523	1,004	4,735	5,643	6,256	2,304	25
昭和45年	1971年	12月31日現在	1,203	428	1,652	4,765	1,076	4,785	5,728	6,641	2,470	25
昭和46年	1972年	12月31日現在	1,799	1,176	1,832	4,936	1,102	4,882	5,619	6,968	2,605	25
昭和47年	1973年	12月31日現在	2,022	1,645	2,248	5,249	1,139	5,672	5,694	7,719	2,735	25
昭和48年	1974年	3月31日現在	2,030	1,908	2,568	5,078	908	5,491	5,431	7,703	2,623	25
昭和49年	1975年	3月31日現在	2,110	2,007	2,616	5,149	950	5,485	5,374	7,679	2,572	34
昭和50年	1976年	3月31日現在	2,170	2,293	2,949	5,388	1,153	5,717	5,332	8,230	2,294	49
昭和51年	1977年	3月31日現在	2,139	2,381	3,477	5,585	1,453	5,757	5,299	8,388	2,528	24
昭和52年	1978年	3月31日現在	2,348	2,532	3,898	5,656	1,818	5,746	5,169	8,573	2,551	23
昭和53年	1979年	3月31日現在	2,546	2,927	4,019	5,747	1,898	5,744	5,018	8,727	2,890	27
昭和54年	1980年	3月31日現在	2,640	3,013	4,295	5,865	2,003	5,533	4,886	8,763	2,932	29
昭和55年	1981年	3月31日現在	2,687	3,219	4,498	5,971	2,063	5,679	4,901	8,808	2,960	26
昭和56年	1982年	3月31日現在	2,693	3,456	4,584	6,153	2,081	5,700	4,724	9,036	2,906	25
昭和57年	1983年	3月31日現在	2,746	3,634	4,867	7,256	2,095	6,207	4,724	8,875	2,873	28
昭和58年	1984年	12月31日現在	3,011	3,745	5,593	7,370	2,804	6,456	4,704	8,819	3,067	31
昭和59年	1985年	3月31日現在	3,013	3,778	5,689	7,343	2,871	6,558	4,715	8,878	3,020	31
昭和60年	1985年	12月31日現在	3,191	3,996	6,082	8,159	3,030	6,964	4,639	9,432	3,056	26
昭和61年	1986年	12月31日現在	3,090	4,089	5,345	8,140	4,969	6,876	4,606	9,488	3,128	29
昭和62年	1987年	12月31日現在	3,173	4,077	5,662	8,283	5,201	6,862	4,398	9,513	3,153	30
昭和63年	1988年	12月31日現在	3,261	4,060	5,926	8,270	5,189	6,972	4,350	9,681	3,097	25
平成1年	1989年	3月31日現在	3,256	4,050	5,999	8,187	5,134	6,916	4,292	9,946	3,113	24
平成2年	1990年	12月31日現在	3,411	4,049	6,002	8,185	5,141	7,858	4,229	10,089	3,028	23
平成3年	1991年	12月31日現在	3,408	4,079	6,308	8,112	5,062	7,917	4,337	10,094	3,062	27
平成4年	1992年	12月31日現在	3,415	4,087	6,493	8,227	5,136	7,997	4,347	9,796	3,634	14
平成5年	1993年	12月31日現在	3,370	4,093	6,691	8,152	5,050	8,032	4,410	10,121	3,661	11
平成6年	1994年	12月31日現在	3,525	4,082	6,842	7,981	5,089	8,074	4,372	10,331	3,665	11
平成7年	1995年	12月31日現在	3,648	4,157	7,089	8,041	5,260	8,029	4,427	10,322	3,618	11
平成8年	1996年	12月31日現在	3,675	4,075	7,366	8,046	5,270	8,170	4,431	10,368	3,500	9
平成9年	1997年	3月31日現在	3,660	4,074	7,413	8,025	5,287	8,052	4,480	10,419	3,457	9
平成10年	1998年	12月31日現在	3,639	4,496	7,744	8,179	5,653	8,210	4,484	10,739	3,497	9
平成11年	1999年	12月31日現在	3,883	4,484	7,644	8,308	5,939	8,271	4,447	10,897	3,780	9
平成12年	2000年	12月31日現在	3,902	4,452	7,874	8,335	6,038	8,438	4,483	10,923	3,824	9
平成13年	2001年	12月31日現在	3,889	4,475	7,971	8,343	6,081	8,361	4,532	10,868	3,847	0
平成14年	2002年	12月31日現在	3,836	4,481	8,043	8,335	6,214	8,352	4,480	10,950	3,865	0

牧港火力発電所建設に伴う人々の移動

戦後、間もなくしてこのような大型工事が始まった浦添には、沖縄の各地や本土・奄美大島から多くの工事関係者が集まるようになった。そして工事現場の飯場ができる一方、国道五八号（旧軍用道路一号線）沿いの屋富祖、城間や牧港の各集落内で間借りする人々も多かった。

『浦添市史』によると、「牧港の人口増加要因は、一九五〇年代からはじまった牧港火力発電所工事にともなうて、工事関係者が各地から移ってきたためと考えられる」と記している。⁵

牧港火力発電所の工事現場に近い牧港の集落には、発電所に関連する多くの作業員たちが居住するようになり、人口は急増した。因みに、一九四六年（昭和二一）の牧港の人口は七〇七人であったが、五年後の一九五一年（昭和二六）九九五人で、更にその五年後には一九四八人となっている。このような急激な人口増は浦添の各集落でも見られたことであるが、特に牧港や屋富祖での人口増は各集落の中でも高い増加率を示している。

発電所関連の工事に携わる人々は、那覇や宮古・八重山からも多くが移住してきたが、中でも具志川（現うるま市）や奄美大島方面からの出稼ぎ者が多く、二畳から三畳間位からでも間借りする人がいたため、屋敷内には小さなトタン葺きの家を建て貸間にするのが一つの流行となったこともあった。当時、牧港集落の約二〇〇世帯のうち、三分の一は借家人と言われるほどであった。⁶

証言によると、ヤギ小屋みたいな茅葺も貸家として供給していたため、牧港ではこのような状況を人々は「貸間街」と言っていたようである。⁷

人口増にともなうて、牧港では各種の商店、飲食店、食堂、ランドリー（クリーニング店）、病院、理髪店などもできて活況を呈するようになってきた。⁸

五 マチナト・コマーシャルエリア

沖縄は、戦争によって多くの生命や財産を失い、地形も大きく変貌した。浦添は家屋の

5 『浦添市史』第七巻資料編六 浦添市教育委員会 一九八七年

6 前掲『牧港字誌』一〇四頁

7 聞き取り調査（二〇一二年九月 牧港公民館）に基づく。

8 前掲『牧港字誌』五八頁

第1節 新しい浦添の建設

ほとんどを失い、当時の人口九二一七名のうち四一二名、村民の実に四四・六%の尊い命が犠牲となった。

一九四六年（昭和二一）の二月、人々は石川（現うるま市）やコザ（現沖縄市安慶田と照屋）などの収容所での生活から解放された。最初は先発隊（テント設営隊）として移動を許可された人々で、現在の浦添中学校運動場付近にアメリカ軍のテントを設営した「仲間キャンプ」での共同生活が始まり、ここを拠点としながら各集落の復興が始まった。

ところがアメリカ軍は、牧港・城間・屋富祖・宮城・仲西・勢理客の集落地域の一部と小湾集落のほとんどを終戦直後から軍事物資の集積場として使用していたが、一九四八年（昭和二三）にこの大部分の二六五万平方メートル（約八〇三万坪）を強制的に接収した。

このような状況のため現在の国道五八号（旧軍用道路一号線）沿い集落の復興は容易ではなかった。

一方、強制接収された現在の国道五八号西側ではアメリカ軍の基地建設が始まった。基地建設に伴う軍作業員やアメリカ軍家族を相手にする商店、外資系企業などの建物が増え、国道沿いのこの一帯には多くの人々が集まるようになり、一大商業地域を形成するようになった。

マチナト・コマーシャルエリアの形成

一九四六年（昭和二一）から一九五〇年（昭和二五）代、アメリカ軍事基地キャンプキンザーで働く人々やアメリカ軍人・軍属及びその家族を相手にした商売を始める人々が増えた。基地に面した屋富祖には飲食店、雑貨店、クリーニング店、理髪店、映画館、病院などができ、アメリカ軍基地の影響でさまざまな店が立ち並ぶようになった。

特に、牧港から城間にかけての旧軍用道路一号線（現国道五八号）周辺には、建設業、自動車販売、フィルム、飲料、洋酒などの製造販売をするいわゆる外人商社（外資系企業）が進出してきた。外人商社によって発展したこの一帯は、当時マチナト・コマーシャル



マチナト・コマーシャルエリア（1970年）
浦添市立図書館所蔵

9

「仲間キャンプ」については本編四三六～四三八頁に詳しい。

ルエリアと呼ばれ、本土復帰直前までは、沖縄の中の異国と見間違えうほど外資系企業が軒を連ね、賑わいを見せていた。

復帰後は、これまでの外資系企業に代わり、県都那覇市に近いという好条件から電力供給、自動車販売、ビール、乳製品、食糧などの製造・販売業を中心とした大型の各種企業が集まり、農村だった浦添は戦後急速に都市へと変貌し、今日では沖縄の大きな企業が集まった一大商業地域を形成してきている。

また、浦添に住まいを求める人が増え、一九六〇年代以降、新興住宅や大型団地が次々と建設されるなど、那覇市のベッドタウンとしても発展してきた。

外人住宅

戦後、沖縄にアメリカ軍の基地が造られるようになると、それにとまって多くの外国人が住むようになった。しかし、荒廃していた沖縄には人々を受け入れるだけの住宅はなかった。

そこで、県内の主な住宅建設会社（証言では山城建設の名が出る）が軍人・軍属の住宅難を解消するために、軍事基地に近い地域でアメリカ人向けの住宅建設が始まった。これがいわゆる外人住宅である。

浦添では、港川の学園通り北側（現港川小学校・港川中学校の北側）や港川の崎原地域が主な外人住宅であった。これらの住宅は冷房付きの一戸建て平屋のコンクリート造りで、一見して外人住宅と見える建物が立ち並んでいた。住民の多くは軍人・軍属で、沖縄の中でアメリカの様相を呈し、貧しい沖縄の人々にとっては羨望的であった。しかし、これらの外人住宅も、復帰後は日本政府予算で基地の中に住宅が建設され、軍人・軍属は基地内に住むようになり、今ではわずかにのこる建物だけが当時を偲ばせるものとなっている。

中でも、学園通り北側は住宅表示にもあるとおり、「港川ステイツハイツサイドタウン・ストリート」として、また、アリゾナ、オレゴン、ミシガンなどアメリカの幾つかの州名を表示した通りがあり、古き良き時代の外人住宅の風景を残している。（仲間孝藏）



ミシガンと書かれた通りの表示（2014年）
仲間孝藏撮影



港川外人住宅（2014年）仲間孝藏撮影



崎原外人住宅（2014年）仲間孝藏撮影

第2節 人口の増加と都市形成

第二節 人口の増加と都市形成

一 浦添の都市形成の過程とその変化

浦添の都市化は、米軍基地建設によって、屋富祖地域に屋富祖商店街がいち早く形成されたことに始まる。次に旧一号線（現国道五八号）沿いの城間から港川、牧港に至るいわゆる牧港外人商社街（マチナト・コマーシャル・エリア）の形成と軍人やその家族を対象にした外人住宅の建設によって発展していった。

その後、旧一号線の道路整備拡張や那覇市の都市化によって旧一号線沿いの宮城・仲西・勢理客にかけて商店街、勢理客の埋立地の商工業地、勢理客から内間一帯にかけて住宅地が形成されて急激な人口増加をもたらした。さらに、市の内陸部には、琉球土地開発公社や民間ディベロッパーによる大規模住宅開発（三〇〇～五〇〇戸）と国家公務員住宅や県営住宅、市営住宅、公社住宅等の建設、市の積極的な都市基盤整備事業と土地区画整理事業、国道三三〇号やバイプライン線沿いの中高層の建造物がスプロール¹的に建設され、現在の都市化の骨格を形成した。

浦添の都市景観は、旧一号線（現国道五八号）沿い一帯の商社や車販売会社、大型商店の中高層ビル、マンション・アパート等の中高層住宅の建設、国道三三〇号沿いの中高層住宅の建設、中央から東地区にかけた区画整理事業による一戸建て住宅やアパート群の建設、初期大型団地の増改築、旧集落（西原・前田・沢岬）周辺の宅地化や集落内の空地の宅地化というように変容していった。

戦後から一九九〇年（平成二）頃までの人口増加に伴う浦添の都市形成の過程を、発芽期、創設期、発展期、成長期に分類し、詳細を述べることにする。

図1 浦添の都市形成の過程

時期	地 区	1950	1955	1960	1965	1970	1975	1980	1985	1990	1995	2000
第Ⅰ期	1 屋富祖一帯	←	→									
	2 牧港外人商社			←	→							
	3 外人住宅地			←	→							
第Ⅱ期	1 勢理客の工業地の形成			←	→							
	2 宮城・仲西商店街の形成				←	→						
	3 勢理客の住宅地の形成				←	→						
	4 内間の住宅地の形成					←	→					
	5 民間大型団地の建設					←	→					
	6 国・県・市営団地・公社団地の建設					←	→					
	7 民間小規模団地の建設						←	→				
第Ⅲ期	1 都市基盤整備事業（都市計画決定）				★	★					★	
	2 道路・橋梁の建設					←	→					
	3 都市公園の整備					←	→					
	4 港湾・リゾートの建設					←	→					
	5 公共施設の建設					←	→					
	6 伊祖区画整理事業						←	→				
	7 宮城・仲西						←	→				
	8 城間・伊祖							←	→			
	9 大宮								←	→		
	10 西原									←	→	
	11 北経塚										←	→
	12 浦添南第1										←	→
	13 浦添南第2											←
第Ⅳ期	1 中・高層マンションの建設					←	→					
	2 旧集落周辺への住宅地（アパート建築）									←	→	

前津政廣作成

1 スプロールとは、都市の急激な発展により市街地が無秩序的に郊外に拡がっていく現象のこと。

第Ⅰ期―発芽期

戦後、仲間の収容所から開放され、各集落の復興が始まるとともに、一九五〇年（昭和二五）頃から開始された米軍基地建設に伴う都市形成時期である。都市形成の主な要因としては、基地建設と旧一号线の拡幅整備等による交通の便があげられる。

（一）屋富祖商店街の形成と変容

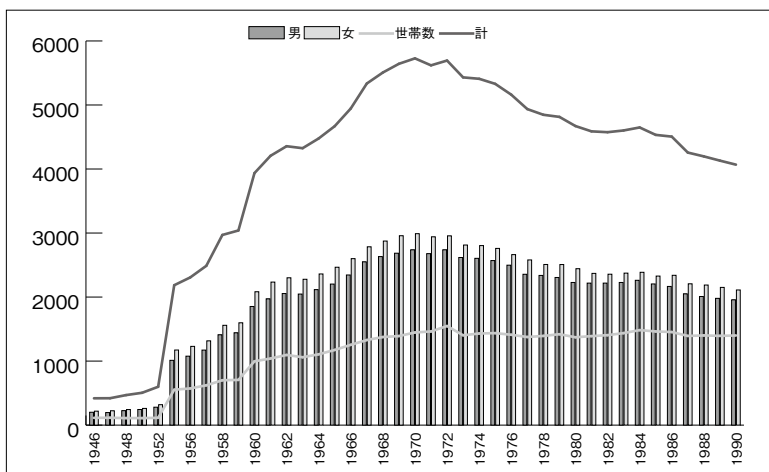
米軍により市域の西側（城間、屋富祖、宮城、仲西、小湾）の土地が収用され、本格的な基地建設が始まった一九五〇年代、県内外から多くの工事関係者が集まってきた。また、米軍基地の建設が本格的に進むなかで具志川村（現うるま市）の天願から移設されたQM部隊²をはじめとする五部隊の移設や増強に伴って軍雇用員やその家族もいっしょに移動してきた。さらに、かれらを対象にした商業活動に稼得を求めて人々が集まってきた。³

屋富祖一帯は急激な人口の伸びに伴って商店や事業所、バーなどの飲食店や映画館等サービス業関係が増加してきた。さらに屋富祖大通りの国道側の突き当たりが基地へ出入りするゲートになったことから、人々の往来が多くなり、また米軍人を相手とした商業も集まり、基地の街としての性格をおびてきた。表通りにはテラー、靴屋、クリーニング店などが立ちならび、裏通りには、Aサインバーとよばれるバー、キャバレー、クラブなどが軒を連ねた。

かつては幅が狭く曲がりくねっていた屋富祖の中道は、米軍によって拡幅整備され、屋富祖大通りとなった。その後、大通りを中心に商店や貸屋、住宅も広がった。それまで配給所に頼っていた生活物資の調達も、一九五〇年六月から配給業務の民間への移行に伴って、配給所は個人の小売店となったほか、自由に商業を営めるようになったことから、食料雑貨店が相次いで出来てきた。

一九五〇～六〇年代の屋富祖は、約五〇〇メートルの通りに、約一四〇の店舗が軒を並べて、浦添で初めての商店街を形成した。「屋富祖大通り商店街」は、基地就業者や近隣市町村からの買物客も多く、映画館、パチンコ店などの娯楽施設も整備され、準広域的な

グラフ1 屋富祖の世帯数と人口推移



『うらそえの人口（戦後編）』浦添市役所企画課・市民課（2003年）をもとに作成。

2 クウオーターマスター(quartermaster)の略。食糧・被服・燃料などをつかさどる補給部。

3 『浦添市史』第七巻 資料編六、浦添市教育委員会、一二九頁

● は店舗、事業所
□ は住宅
× は空地
() 内は出身地

※この図は、宮城次郎さんからの聞き取り調査により作成したものである。

※2000年代の建物は筆者が追加

しかし、こうした基地の街の様相も一九七二年（昭和四七）日本本土復帰ともに様変わりした。基地経済の衰退や車社会の到来のなかで、その波に乗りきれなかったことや、一九七八年（昭和五三）の七三〇交通変更による左側通行への変更により那覇市からの進入商店街だった。

4 戦後米国の統治下におかれた沖縄は右側通行であった。一九七二年（昭和四七）に日本に復帰したことにより一国一方式の国際条約遵守のために一九七八年（昭和五三）七月三〇日、左側通行となった。

が不便になったこと、国道五八号沿いの大型ショッピングセンターの進出がさらに追討ちをかけ、屋富祖商店街は大きな打撃を受けた。かつての中心商店街のイメージはもう見られない。

(二) 牧港外人商社街の形成

屋富祖商店街の形成より少し遅れた一九六〇年代には、旧一号線（現国道五八号）の道路拡張整備とともにさまざまな業種の事務所や営業所や商店が増えていった。中でも城間から港川、牧港一帯に作り上げられた外人商社街は、マチナト・コマール・エリア（Machinato commercial Area）とも称され、一大商業地を形成していった。

戦後、沖縄県で商業活動が本格的に開始されたのはコザ市（現沖縄市）であつたが、一九五〇年代の初めより浦添村の城間から港川・牧港にかけての一号線沿いで外国人による卸売業・小売業・保険業・建設業などが営まれるようになった。

米軍の沖縄占領にともなう家族部隊の沖縄駐留により生まれた外人商社は、米軍人・軍属とその家族をおもな対象とした。現地司令官が承認した商活動に法的根拠を与えるため、一九五二年（昭和二七）十一月に米国民政府布令第九〇号「琉球列島における外国人の投資」が發布され、沖縄側も商活動の対象とされた。

事業主は米国が圧倒的に多かったが、フィリピン、台湾、英国（香港）系などもみられた。営業業種は多種多様で保険業や自動車、食料品、タバコ、酒類、服地（縫製）・飲料水などの輸入、卸小売業が主だった。後に沖縄人商社との競合もみられた。外国商人は華僑を中心に、占領行政の中軸となった米軍司令部や米国民政府の高官と密着し、戦後社会における擬似植民地の外人租界を成し特殊な社会構造を形成していた。

表1 外人商社の事業所一覧表

	名 所	本 社	営 業 種 目
1	パークレイ商事会社	アメリカ	建築および土建用資材、食料品一般商品、自動車販売
2	マンダニー建築資材会社	不 明	土建請負設計、資材販売
3	G・F・シャープ株式会社	フィリピン	船舶代理業、オペレーター、船舶ブローカー
4	キャピタル保険会社沖縄総代理店	アメリカ	輸出入業、仲買人、問屋業、回送業、取次業、倉庫業、不動産業、金融、証券業
5	タトル書店	アメリカ	図書の販売、文房具販売
6	イーデュー・グリフス会社	アメリカ	電気器具、建築資材、食料品、酒類、貿易、輸出入業
7	アメリカ国際保険会社	アメリカ	海上貨物、船体、自動車、火災、台風、労務災害、賠償その他各社保険
8	W・W・テラー	アメリカ	ブローカー委託販売、代理店、輸出入製造販売、貨客輸送附帯事業
9	ウェスタン・パシフィック株式会社	パナマ	一般材木業、保険代理店、海陸運輸業
10	バヤリース・カルフォニアオレンヂ株式会社	パナマ	各種非酒精飲料、ジュース、ソーダ水、鉱泉水エキス製造販売
11	パンオーシャン・リミテッド	香 港	ベンキ木材建築資材、冷蔵庫、電気器具
12	ダンハム・エンド・スミス株式会社	パナマ	原料商品の輸出入、代理業、委託販売、製造卸小売
13	ジェネルペイント株式会社	アメリカ	ペンキ、ニス等販売、建築資材、機械類、化学工業用品、貿易業
14	ホンコンガーデンベーカリー	香 港	レストラン、スナックバー、製パン
15	インターナショナル・デイリーズ琉球株式会社	不 明	不明
16	沖縄ブルーシール販売株式会社	アメリカ	ブルーシールミルク製造販売
17	ディマウロ建設	アメリカ	土建請負、設計
18	アメリカン・ボトリング会社	アメリカ	バヤリース製造販売
19	ランデブークラブ	不 明	レストラン

『浦添市史』第7巻149-151ページをもとに作成。

しかし、一九七五年（昭和五〇）以降、円高や米国のドル防衛政策等によって沖縄人商社に変わり、現在では数社しか現存していない。

（三）外人住宅の建設

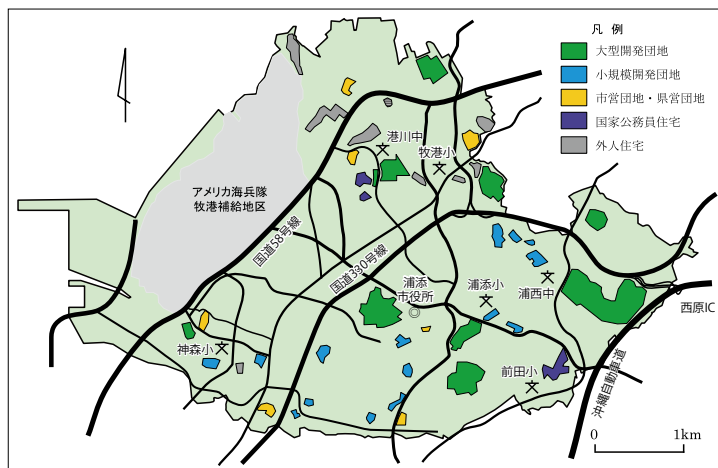
基地建設に伴って、米軍人・軍属が長期にわたって沖縄に滞在するようになると、米軍は基地の外にも軍人・軍属の家族のための住宅が必要になった。そこで米軍政府は、「琉球住宅土地公社」に指示し、次々と基地周辺に「外国人向け貸住宅」の建設を促進していった。これを当時の人々は「外人住宅」と呼んだ。民間の建設会社もその需要に応える形で沖縄本島中南部の市町村（那覇の小禄、浦添、宜野湾、北谷、北中城、コザ、読谷、石川）に米国人向けの貸住宅が建設された。浦添では伊祖、牧港、港川、城間、勢理客などに建てられた。

外人住宅は、一九五〇年代初期から沖縄本島中部の基地周辺に発生した。以後ベトナム戦争が本格化した一九六五年（昭和四〇）頃に「外人住宅ブーム」が起こった。当初は一戸建の建売住宅が主であったが、ベトナム戦争中には多量の需要があり、コザ市を中心にアパートが建設された。

貸住宅一戸の敷地面積は約一〇〇坪（三三〇平方メートル）と広く、建設面積は、約二〇〇二五坪（六六〇八二平方メートル）のコンクリート造りの平屋であった。部屋の間取りは、個室が二〜三室、応接間、キッチン、バス、トイレといった完全な洋式で、家賃は月一二〇ドルから一五〇ドルであった。芝生に囲まれ、見晴らしの良い「外人住宅」は、県民の羨望の的であった。

当時の浦添は、基地経済に依存し、貸住宅は不動産業の走りとして発展していった。しかし、復帰後は、円高ドル安による米国のドル防衛政策や日本政府の思いやり予算などで、基地内での建設が盛んになり、米軍関係の需要は大きく減少した。一九六〇年代にはおよそ四〇〇戸あったのが、一九八〇年代には約三〇戸と激減している。⁵

図3 浦添市内の住宅開発の分布図



宮内久光作成

5

一九八〇年頃から具志川市天顔や浦添市牧港補給地区内に、日本政府による思いやり予算で家族部隊のために高層住宅と低層住宅が建設されている。ちなみに、牧港補給地区内には約三〇〇人の家族部隊の為に高層住宅はじめ病院、学校、PX等が建設されている。

第Ⅱ期―創設期

基地建設が一段落した一九六〇年代から一九七〇年代にかけて、勢理客一帯の工業地の形成と旧一号线沿いの牧港外人商社から南側（那覇市寄り）へ続く宮城、仲西に拡大する商店街の形成、那覇市の都市化に強く影響をうけた勢理客と内間一帯にスプロールのな住宅地化の形成、一九七二年（昭和四七）の本土復帰を目の前に、国家公務員や商社員のための住宅建設が行われた時期である。

（一）勢理客一帯の宅地形成

勢理客は市の南西に位置し、面積は〇・九八キロ平方メートルである。北は仲西と西流する小湾川の一部を境に小湾、東は内間、南は安謝川の河口を境に那覇市に隣接し、西は東シナ海に臨む。早くから海岸線の埋立てが行なわれ、戦前は浦添村では最大の稲作地帯として知られていた。

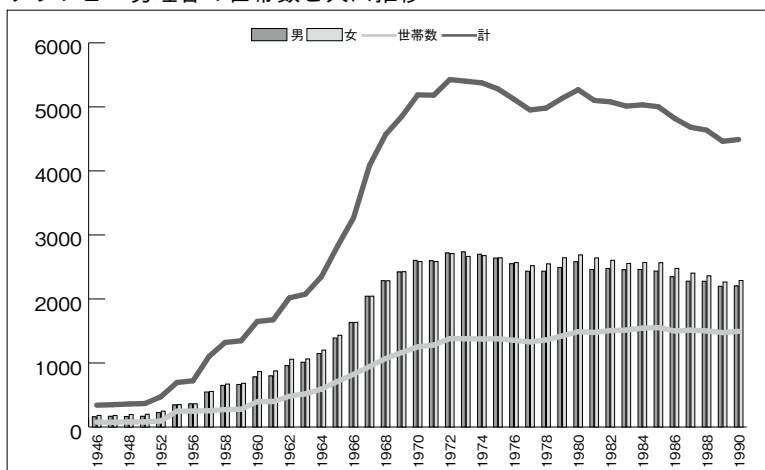
一九五〇年頃から牧港補給地区建設が本格化し、それとともに那覇市をはじめ近隣市町村からの人口の流入が激しくなった。特に一九五五年（昭和三〇）から一九六〇年（昭和三五）の五年間は、市内で一番の人口増加率（一三二％）を示している。

一九五〇年（昭和二五）までは第一次産業の占める割合は非常に高かったが、一九七〇年（昭和四五）以降急激に減少し、第二次産業と第三次産業の比率が急激に高くなった。

勢理客の南側、安謝川沿いには、トタン屋根やブロック瓦の住宅が多く、スプロール化が激しかった。しかし、一九九五（平成七）年に内間から国道五八号へ抜ける道路が建設され、周辺地域にアパートが立ち並びわずかではあるが再開発の兆しがみえる。

現在では、国道五八号に沿って商工業地帯が形成され、食糧会社、自動車販売会社、通信会社、さらに西側の埋立地に市のクリーンセンターや県中央卸売市場などがある。一九九〇年（平成二）から那覇港の第四埠頭（浦添埠頭）の建設が進められ、完成すれば、国内貿易専用埠頭として大きな期待が寄せられている。

グラフ2 勢理客の世帯数と人口推移



『うらそえの人口』（戦後編）をもとに作成。

第2節 人口の増加と都市形成

(二) 内間一帯の宅地形成

内間は市の南西部、那覇市と浦添市の境界をなす安謝川の中流右岸に位置する。面積は〇・〇六七平方キロメートルである。北は仲西、西は勢理客、東は沢岬、南は安謝川の河口を境に那覇市に隣接している。

耕地の大部分はジャーガル、マージの比較的肥沃な土壌のため戦前までは、さとうきび、いも等が作付けされた。一九〇〇年(明治三三)頃までは一部に水田があり、稲作も盛んであった。一九五〇年(昭和二五)の初期頃に園芸組合が結成され、野菜が盛んに栽培された時期もあった。一九六七年(昭和四二)に市営住宅が建設され、これを契機に那覇市のベッドタウン化していった。

一九六〇年(昭和三五)の初期頃までは人口の増加は微増であった。しかし、一九六五年(昭和四〇)頃を境にして急増してくる。これは、那覇市をはじめ近隣市町村からの人口の流入が激しくなったためで、一九七三年(昭和四八)からは宮城に次ぐ人口を有するようになった。

(三) 民間ディベロッパーによる市中央部の団地造成

浦添の大規模住宅地開発は、琉球住宅公社などの公的ディベロッパーや県内大手の民間ディベロッパーの開発プラン下で行われた。これら大規模住宅開発のもとでは、区域内の土地利用は計画的になされ、区画も整然としている。

浦添では図3に示すように、大規模な一戸建て団地として、茶山団地、浦添ニュータウン、グリーンハイツ、緑ヶ丘団地が建設された。

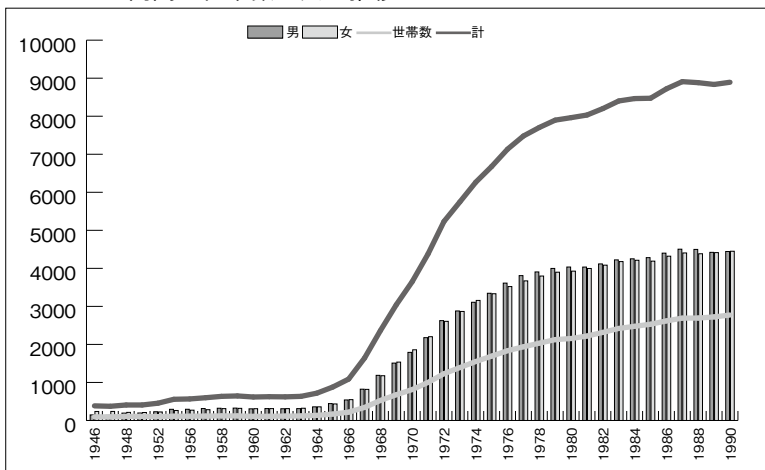
このような開発では、商店や自治会事務所、道路、公園、下水道施設などの公共施設が、団地内部で独自に配備されることが多い。既成市街地から飛地的に住宅地化を促進する傾向も強いといわれているが、浦添の場合も同様な傾向がみられる。

急激な人口増加が短時間に生じ、しかも特定年齢階層に集中するため、一時に多量の教育施設等の需要が生じ、学校建設や社会基盤の整備等が浦添市の財源を圧迫している。



茶山団地(1941年頃)
浦添市立図書館所蔵

グラフ3 内間の世帯数と人口推移



『うらそえの人口』(戦後編)をもとに作成。

(四) 国家公務員住宅・県営・市営・社宅等の建設

浦添市内には、図2に示すように大規模な国家公務員宿舎が前田と城間に建設されている。また県営住宅は牧港、港川、城間、仲西、経塚、沢岬に建設されている。市営住宅は内間と安波茶、前田の三カ所に建設されている。日本本土の公社や大手民間企業の社宅が城間から港川一帯に集中して立地している。

理由としては、那覇市への交通の便や琉球大学のある西原町に隣接するなどの立地条件があげられる。

第Ⅲ期―発展期

一九七〇年代中頃から始まった浦添市の都市計画事業が本格化し、市による都市基盤の整備、土地区画整理事業により宅地造成が推進された住宅地の形成時期を発展期として捉えた。

土地区画整理事業は、未整備な市街地や新たに市街化しようとする地区の土地について、総合的な計画を立て、それに基づいて区域内の土地交換分合を行い、宅地や道路、公園、公共施設などを適切に配置・整備していく事業である。

浦添市の土地区画整理事業は、一九七二年（昭和四七）に国道三三〇号の西側に面した伊祖・仲間の一部の区域において、組合施行として事業に着手し、街づくりの第一歩を記した。

その後、市施行事業として五区画、組合施行事業として三区画、計八区画が施行されている。これらの施行面積は市域面積の十七・三％、市街化区域面積の約二二・七％となっている。一九八〇年代には、伊祖地区と宮城・仲西地区の事業が完了している。

二〇一四年（平成二六年）現在、六地区の事業が完了し、浦添南第一地区、浦添南第二地区が施行中である。事業が完了した地区では、都市基盤となる学校、公園、基幹道路等が整備され、快適な街並みを形成しつつある。

表2 土地区画整理事業一覧表

	地 区	施行者	面積 (㎡)	施 行 年 度
1	伊祖	組 合	58,904	昭和46～昭和49
2	宮城・仲西	市	132,200	昭和47～昭和55
3	城間・伊祖	市	758,600	昭和50～平成4
4	大宮	市	372,897	昭和53～平成6
5	西原	組 合	488,792	昭和59～平成3
6	北経塚	組 合	95,482	平成2～平成7
7	浦添南第一	市	823,667	平成4～平成25
8	浦添南第二	市	603,643	平成8～平成27

『統計うらそえ』第23号、第28号、第46号をもとに作成。

図4 土地区画整理事業状況図



『浦添市の都市計画』（2002）をもとに宮内久光作成。

第2節 人口の増加と都市形成

第Ⅳ期―成長期

一九八〇年（昭和五五）以降、市内の地価の高騰に伴い、高層住宅・マンション・アパート建設が盛んになり土地の高度利用が本格化してきた時期を成長期として捉えた。これには（一）民間の建設会社による小規模団地の建設、（二）高層住宅・マンション・アパートの建設、（三）旧集落（西原・沢岬）周辺のマンション・アパート建設等がある。

浦添の一九六〇年以前の主な開発は、市の西部、南西南部に集中していたのに対し、一九六〇代以降では、市域の中央部、東部が主な開発地域となっている。こうした郊外住宅地の形成は、持家一戸建指向の強さを反映しているといえるが、高地価、遠隔地からの通勤の限界がみえてきた。一九八〇年以降は、一戸建持家に代わり、民間中高層共同住宅（マンション）が、浦添市内の中央部を中心に建設されてきた。

（一）民間の建設会社による小規模団地開発

浦添の郊外住宅地の形成は、社会経済構造の生産部門からの管理部門の分離、発展といった変化に伴い、職住分離が可能となる素地がつくられたことや道路の拡幅整備、改善等により郊外から通勤しやすくなったこと、さらに、都市内部の住居環境への対処としての「郊外住居思想」の普及、都市の地価高騰といった点が要因となっている。

さらに那覇市の地価の高騰は、住宅地立地を遠隔化させ、通勤圏を拡大させた。

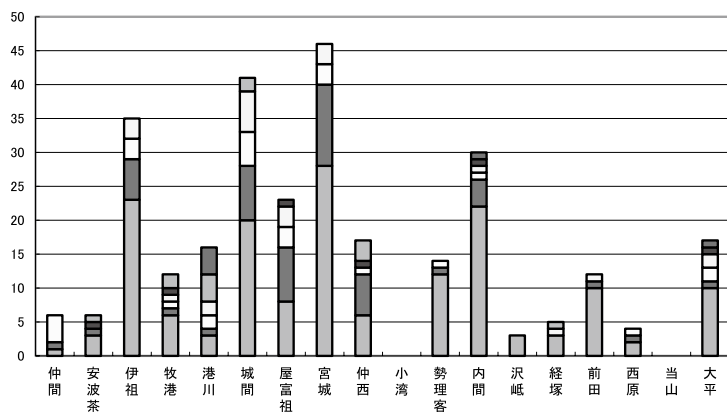
浦添の場合は、一九八〇年代までは個人住宅の需要はすくぶる多く、市の中央部や区画整理事業区域を除いた大規模開発はほとんど見られなくなった。それでも、一〇～二〇戸程度の小規模の民間ディベロッパー開発がまだ盛んに行われている。一九九〇年代以降は、地価の高騰等によりやや需要は減少している。

（二）高層住宅・マンション・アパートの建設

一般的には、六階建て以上の建造物を高層建造物という。しかし、ここでは、一～二階建造物を低層、三～五階を中層、六階以上を高層建造物とし、中高層建造物という場合は

グラフ4 大字別高層建造物の階層数

（単位） 5階 6階 7階 8階 9階 10階 10階以上



前津政廣作成

三階以上をさすものとする。

浦添市の中高層マンションやアパートは、国道五八号沿いの港川や城間、牧港一帯と国道三三〇号沿いの内間、大平一帯、さらに区画整理事業による仲西、宮城、伊祖を中心に建設されている。

(三) 旧集落周辺のマンション・アパート建設

西原、前田、沢岬などの旧集落内の空地（一〇〇坪前後）に、二、三軒の一戸建て住宅の建設が顕著になってきた。これは、道路拡張や農地等の転売によって得た金で建設されたものである。また、それらの集落の周辺にはアパートの建設が急増している。そのため高齢化率が低くなっている。（前津政廣）

二 新しい家に移り住む

一九五〇年代、牧港補給地区（キャンプ・キンザー）を中心とした軍労働および基地周辺の雇用機会の増加にともなって、浦添村は人口を増大させた。さらに一九六〇年代および一九七〇年代以降は、那覇都市圏の拡大化に飲み込まれる形で、浦添に多くの人口が流入した。都市社会学者の谷富夫は、沖縄県人口の約六割強を吸収した那覇都市圏を「過剰都市」と呼んでいる¹。なぜなら、軍雇用の大量解雇、「海洋博ショック」、そして第三次産業の肥大化など、一九七〇年代以降の那覇都市圏は脆弱な産業構造と高い失業率を抱えているにも関わらず、今日まで人口を過剰に吸収しつづけ拡大しているからである。

よって、那覇都市圏内の浦添に移り住む人々の移動や定住の背景には、雇用機会などの経済的な理由とは異なる、社会的、文化的な独自の要素がはたっているとみることもできる。またそれは、一九七〇年代以前の浦添の地域社会が、異質多様な人々をどのように受け入れてきたのかという歴史的な連続性と関わるものと思われる。たとえば、戦後沖縄の歴史的な特質、すなわち沖縄戦ならびに米軍統治という歴史経験は、日常生活、社会関係、そして共同体を一変させ沖縄社会を流動化させた側面として重視しなければならな

参考文献

- 堂前亮平（一九八七）『基地と市街地』（浦添市史第七巻資料編六）浦添市教育委員会
 『浦添市総合計画基礎資料』一九七五、浦添市
 『浦添市の都市計画』二〇〇二、浦添市
 『内間字誌』一九八一、内間自治会
 『字誌たくし』一九九六、沢岬字誌編集委員会
 『牧港字誌』一九九五、浦添市牧港自治会
 『小湾字誌』沖縄戦・米占領下で失われた集落の復元』一九九五、小湾字誌編集委員会
 『字誌』一九七二、浦添市大平自治会
 『茶山』一九九七、茶山自治会二十五周年記念誌編集委員会

1 谷富夫（一九八九）『過剰都市化社会の移動世代―沖縄生活誌研究―』、溪水社、四一五

い。とくに、人々を移動させた「押し出す力」は出身地域によって異なるはずである。また、どのような地域を移動し、浦添のどこに定住したのかなど、移動する人々を「吸収する力」も、その移動先や定住先の地域社会によって異なるはずである。

ここでは個々の移動歴に焦点をあて、その目的や動機づけにおいて、どのような社会関係を有し、どのような価値観（生き方）に基づいて移動したのかを述べておきたい。

（一）軍雇用と基地周辺労働からみる移動と定住

石原昌家の『郷友会社会』では、一九四八年（昭和二三）ごろから中頭郡具志川村の米軍補給部隊が次々と浦添村に移駐していくなかで、具志川の部隊で働いていた平安座島出身者たちが浦添村に移動する様子が記録されている。当時「他所者」「寄留民」には家屋や土地を貸さないという風潮があるなかで、家族を伴って移住する者、あるいはグループを形成し、屋富祖や宮城にトタン葺きの貸間を借りて共同生活をはじめ出稼ぎ的な移動のケースも見られる。出稼ぎ者の場合、のちに郷里から家族を呼び寄せるなど「戦後十三年目にして家族全員がそろった」という事例が紹介されている。

朝鮮戦争が勃発した一九五〇年（昭和二五）前後から浦添でも本格的な米軍施設の建設や部隊機能の移動・集約が行われるが、そのころ浦添へと向かう人々の移動には、やはり米軍施設の存在が大きく作用していたことが分かる。また、同郷者間の相互関係や、家族を伴った移動と定住の事例を知ることができる。さらに、本編の聞き取り調査では、浦添への移動に関する個別具体的な目的や動機、さらに移動形態や居住形態および定住までの特徴をうかがい知ることができる。

①米軍キャンプ生活と発電所建設

■一九二八年（昭和三）に奄美大島で生まれた佐多次宏さんは、一九四三年（昭和十八）に軍需工場で働くため愛知県名古屋市に渡った。一九四六年（昭和二一）に米軍統治下の奄美へと帰還するが、一九五〇年（昭和二五）に奄美出身の友人を頼って嘉手納村に



牧港補給地区（1972年） 浦添市立図書館所蔵

移動する。嘉手納では米軍キャンプで修理工として働きましたが、その後牧港のキャンプでも働く。そして、翌一九五一年には牧港火力発電所の建設を請け負った清水建設の工事現場に従事することになる。発電所完成後はそのまま米国資本の電力会社ギルバートウ社で社員として働き、琉球電力公社、そして今日の沖縄電力の社員として続けた。

ギルバートウ社勤務時の佐多さんは、一九五二年（昭和二七）にはすでに牧港の軍道一号線沿いに土地を購入し、早くも居を構えている。そして、翌年の奄美群島の施政権返還後も牧港にとどまり定住する。一九六〇年（昭和三五）には牧港の中通りに引っ越すが、一号線沿いの家屋は手放さずに理髪店に貸し出した。当時の牧港は「貸間街」と言えるほど貸間や借家を提供する人が多かったという。佐多さんの周囲では、おもに津堅島出身者の借り手が目立った。

佐多さんの事例からは、嘉手納や牧港の米軍キャンプでの労働、そして牧港火力発電所の建設が開始された一九五〇年代について、その移動と定住のありようを垣間見ることができる。また、本編の聞き取り調査では、当時の牧港は、中南部各所の米軍キャンプ周辺で軍道建設等を行う米国の土木建設会社の拠点となっていたという証言がある。つまり、牧港は「工作隊」と呼ばれる作業員たちの飯場や出発点となり、そのための貸間も多く存在していた。²

牧港を起点とした移動や就労生活は技能習得の機会にもなっており、その後の自立志向的な生活のあり方にも影響しているものと思われる。それは「他所者」「寄留民」には家屋や土地を貸さないという当時の風潮において、電力会社入社直後に土地と家屋を購入し、のちに貸間業を始めた佐多さんの生き方からも分かる。基地建設をはじめとした周辺地域での雇用機会の増大と人口増は、「他所者」「寄留民」の受け入れに対する地域社会のあり方を変えていった。

②軍雇用労働者としての浦添への定住

次に、一貫して軍雇用において働いた移住者の事例から、浦添への移動と定住について

2

一九五〇年代の米国土木建設会社による「工作隊」としてよく知られているのが、普天間キャンプを拠点としたアトキンソン・ジョーンズ社による「A・J工作隊」である。日系人を「支配人」とする同工作隊は、県内各地の出身者約二〇〇〇人規模の人員で構成されていたが、とくに大宜味村喜如嘉出身者がそのリーダー的な役割を果たしていた。「山城善光」「沖縄戦後秘史シリーズ・荒野の火」5「琉球新報」一九八二年三月十九日（朝刊）。



牧港火力発電所（1960年代）
浦添市立図書館所蔵

第2節 人口の増加と都市形成

見ておきたい。

■一九三四年（昭和九）に兵庫県尼崎市に生まれ、父親の故郷である奄美大島大和村に引き揚げていた萩原清己さんは、十八歳のとき名瀬市で仕事を探しても見つからず、友人（同級生）と沖縄島に渡ることにした。萩原さんは長男だったが、沖縄の「基地建設ブーム」の話を聞いて渡航を決意した。安謝港に到着した萩原さんは、浦添村港川に先に住んでいた姉のもとで一ヶ月ほど生活をした。同行した友人も、先に沖縄に住んでいたきょうだいが安謝港に迎えにきていた。

萩原さんは、当時金網もなく、原野にトタン葺き倉庫が四棟ほどしかなかった牧港補給地区で仕事を探すことにした。その事務所に飛び込んでみると、翌日から二番倉庫で働くことになった。そこは、主に自動車の部品を扱っていた。倉庫内は五〜六名単位で五つのグループに分かれており、沖縄の人はもちろん、ハワイやフィリピンの人もいた。フィリピンの人は英語しか話せなかったが、沖縄の人でも沖縄語しか話せないもので、萩原さんには言葉が聞き取れなかった。そのとき同じグループ内に復員軍人だった城間の人が働いていたので、その人に沖縄語を教えてもらった。また、基地内での英語の講座を受講するなど、職場内で使用する英語を一年ほどで覚えた。ちなみに二番倉庫で奄美出身者を見かけることはなく、むしろ基地周辺の銭高組の建設現場に多く見られたという。

このころから、萩原さんは屋富祖で貸間の一人暮らしを始めている。わずか二畳の広さで、台所もない、トイレも外にあるような貸間だったという。軍施設内にも寄宿舎のようなものが二棟ほどあったが、そこは満室だったので貸間生活となった。基地内寄宿舎には奄美出身者もあり、萩原さんは時折その部屋に出入りした。時給が上がると、基地内の「VFW」というクラブにも出かけ、ハンバーガーを食べたり、ビールを飲んだり、屋富祖で映画を観たりなどに使った。また、奄美の実家に仕送りした。

萩原さんは「二番倉庫」で三〜四年働いたが、そこが閉鎖されることになり、宜野湾市大謝名の米軍キャンプ内自動車修理工場に配置された。大謝名で二年ほど働き、ベトナム戦争が激しくなったころ、再び牧港補給地区に戻るようになった。牧港ではベトナム戦争



屋富祖通り（1960年代） 浦添市立図書館所蔵



屋富祖通り入口（1958年）宮城加清提供



1号線道路 屋富祖付近
浦添市立図書館所蔵

で使用された自動車のエンジンの修理に関わる業務についた。

その後、萩原さんは、事務所に貼り出されていた募集一覧表をみて、食料品を扱う「コミッサリー」(commissary)の募集に応募し採用された。萩原さんは、屋富祖ゲート近くの「七〇二番」棟内の牛肉および冷凍食品を扱う「ビーフ・カークス」(beef carcass)で、各米軍施設内スーパーマーケットおよび在沖軍人・軍属(家族)向けの食品の在庫管理、発注、発送等を担当していた。

その後、日用品の部署に移った萩原さんは軍の大量解雇に遭うが、結局「一日解雇」というかたちで各兵舎の修理等を行う部署(ポスト・エンジニア)ですぐに採用されることになった。また二年後には再び自動車部品関係の部署に採用され、さらに兵舎等の修理を行う部署に戻るようになった。萩原さんはこの部署で六一歳まで働き、退職した。萩原さんは、軍雇用で働いている間は、二―三年に一度、奄美に帰省していた。

この間、萩原さんは屋富祖から城間の貸間へ、再び屋富祖の貸間へと住まいを移している。また、屋富祖で知り合った読谷村出身の女性との結婚をきっかけに宮城に移り、その後、現住地となる内間の市営住宅に入居した。内間に移り住んで四〇年ほどになる。

ところで、萩原さんは、全沖縄軍労働組合(全軍労)牧港支部で会計補佐を担当し、さらに中央委員会議長までつとめたことがある。また七一歳まで地域の民生委員や保護司を担った。さらに、内間の自治会で役員をつとめ、小学校や中学校でPTAの役員として積極的に関わった。現在、浦添市シルバー人材センターの会員として、市内小中学校でプールの管理を担当している。奄美から浦添に渡り、浦添以外で生活することのなかった萩原さんは、「もうウラソエンチュだし」と自認する。

■一九四二年(昭和十七)に金武村並里で生まれた兼次徳助さんは、農家の六人きょうだいの三男として育った。金武のキャンプ・ハンセンが使用開始となった一九五七年ごろ、兼次さんの兄は小緑の米軍基地建設に一―二年ほど従事し、仕送りしてくれていた。

兼次さんは、名護高等学校の機械科一年に在籍していたとき、夏休みのアルバイトとしてキャンプ・ハンセンの建設現場(國場組の請負)で働いた。これは、兼次さんが現場事



全沖縄軍労働組合牧港支部 (1970年頃)
浦添市立図書館所蔵



屋富祖通りにあった琉映館 (1960年)
浦添市立図書館所蔵

第2節 人口の増加と都市形成

務所に飛び込んで得た仕事だった。その現場では米軍人と接する機会がほとんどなかったため、英語を使用することはなかった。高校を卒業した兼次さんはすぐに就職せず、名護の東江にあった名護英語学校に通い、名護で生活した。英語の習得は軍雇用を目指していたからではなく、県外の大学進学が目的だった。

一九六三年（昭和三八）、兼次さんは進学費用を蓄えるために浦添の牧港補給地区で働くことになった。宜野湾市真志喜にあったキャンプ・マーシーの人事部で英語の試験を受け、キャンプ・キンザーの資料統計局（D/D S）に採用されたのである。当時はベトナム戦争の最中で、多くの採用があったそうだが、軍雇用は給料が高かったので学校教員を辞めて入ってくる人もいたという。一九六六年（昭和四一）ごろからは琉球大学の卒業生を毎年一〇人ほど採用していた。

資料統計局で働きはじめたとき、兼次さんは城間に一軒家を借りて生活していた。じつは、進学費用のために資料統計局と掛け持ちするかたちで、城間の我那覇組でも働いていた。我那覇組では兄（次男）が大工として働いており、その現場の人の紹介で借家を見つけた。ちなみに、当時の我那覇組には金武出身者が三〇四名ほど働いていたという。

資料統計局は仲西ゲート近くにあり、補給物資をコンピュータで管理するセンターであった。そこは二四時間年中無休であり、一八〇名が三交代で勤務していた。そのなかで、兼次さんは、朝から午後三時までは我那覇組の現場で働き、午後四時から午前〇時まで資料統計局で働いた。さらに、我那覇組で二年働いた後、タクシー運転手との掛け持ちも四年間続いた。計六年間の掛け持ち持ち労働である程度の蓄えができた兼次さんは、那覇産業技術学校（現那覇工業高等学校）に入学・修了した。その後、沖縄大学の夜間部にも入学した。そのころ内間に一軒家を借りて、我那覇組で働く兄と生活していた。

しかし、全軍労陸軍牧港支部で書記長をつとめた兼次さんは、三ヶ月に一度のペースで行われる大量解雇の問題で組合活動が多忙になり、沖縄大学を二年で中退することになった。多いときには約三〇〇〇名が解雇されることもあり、集会、団体交渉、そしてストライキに奔走した。結局、資料統計局のコンピュータ・センターが神奈川県のカンパ座間



牧港補給地区（1972年）浦添市立図書館所蔵



屋富祖歩道橋架設前の軍雇用員の帰宅風景（1969年）浦添市立図書館所蔵

に移ることになり、一九七五年（昭和五〇）に兼次さん自身も解雇されることになる。資料統計局を解雇された人たちの中には、沖縄電子計算センター（現在のCCC）やリウコム（琉球銀行のコンピュータ・センター）に採用される人たちが多かった。

その後、兼次さんは「コミッサリー」食糧部門の事務として働くことになり、一九七六年には資料統計局勤務時代に基地内で知り合った羽地出身の女性と結婚した。一九七九年（昭和五四）から沢岬での生活が始まった。しかし、同年一〇月には「コミッサリー」を解雇され、それ以降は全駐留軍労働組合（全駐労）沖縄地区本部陸軍牧港支部の専従書記長として働いた。

二〇〇四年（平成十六）全駐労沖縄地区本部を退職した兼次さんは、那覇市近郊在住金武町郷友会の活動に関わるようになり、現在会長をつとめている。ちなみに、兼次さんのきょうだいのうち、四人は浦添市内に在住している。兄と弟は内間に在住し、また兼次さんの自宅の隣には妹が住んでいるという。

以上、萩原さんと兼次さんの事例のように、基地内の労働者として働き続けた人々の居住と移動には一定のパターンがあったと考えられる。まず、採用当初は、米軍キャンプ内の寄宿舎あるいは屋富祖や城間などゲートに近い貸間や借家を起点とした移動生活となっている。貸間や借家の場合にはきょうだいとの同居もみられ、兼次さんのように結婚後に市内に家を建て定住した場合も家族を引き寄せるケースがみられる。

また、基地内労働においては、より待遇面の良い部署を目指した情報収集や転職が積極的に行われている。米軍の組織再編や機能移転にともなう基地従業員の「解雇」は数年単位で行われており、「復帰」前後やベトナム戦争終結後にはそれが常態化していた。しかし「一日解雇」などのように基地内で再雇用された事例や、団体および行政職員、そして民間企業への採用なども少なくなかった。上記の二つの事例は、住居の移動が浦添市内でほぼ完結している。長年の軍雇用で習得した技能や情報収集網、さらに社会関係などのネットワークをいかして職業生活を維持した人々は、浦添への定住という方向にシフトしていったと考えることができる³。

3



城間ゲート（1972年頃）
浦添市立図書館所蔵

軍雇用者が一九七〇年代の大量解雇後も社会的ネットワークやその相互関係を活かして浦添市内に生活と労働の場を築いていった特筆すべき事例として、勢理客の「ありあけ保育園」を取り上げることができる。同保育園は、牧港補給地区を解雇された女性たちが、全軍労牧港支部からの支援および組合活動時の人的ネットワークを活かして一九七八年（昭和五三年）四月に開園している。同保育園を運営する社会福祉法人「牧浦福祉会」という名称には、「全軍労牧港支部と浦添市がつくった」という思いが込められている〔沖縄タイムス中部支社編集部、二〇一三、一一一―一三〇〕。

(二) 那覇都市圏の拡大と浦添への移住

一九六〇年代および七〇年代以降の那覇都市圏の拡大は、否応なしに浦添への人口流入を押し進めた。それは、浦添が那覇の近郊都市として変貌していく過程とも言えよう。那覇都市圏の拡大にともなう浦添への移住の実態はさまざまな移動経路が推察されるが、本編の聞き取り調査では一定の特徴を見いだすことができる。すなわち、母村から一旦那覇市内に移動し、借地の住居や借家等に居住し、子どもの成長などを理由に浦添に土地を購入し定住していくパターンである。浦添に移住した理由については、那覇に住んでいたときの借地の住居を建て替えようとしても、地主の許可がおりずに断念したケースが目につく。そこには、那覇市内における住宅供給の問題、とくに子どもの成長や老親の介護など家族変動にみあった住環境の整備が遅れていたことをうかがい知ることができる。

さらに、沖縄戦および戦後米軍統治の影響も見逃すことができない。本編聞き取り調査においては、一九四四年（昭和十九）の「一〇・一〇空襲」や翌年四月からの米軍上陸によって避難生活と収容所生活を余儀なくされ、帰るべき郷里の土地や実家を軍用地として接収され失ったケースが少なくない。その場合、借家暮らしが長年続き、その後ようやく浦添に定住の地を見つけたというパターンを見出すことができる。

前住地から押し出される力に対して人々がどのように対応し、どのように浦添に吸収されていったのか。ここでは、個別具体的な事情や戦後沖縄の歴史的側面を念頭におきつつ、既存の集落に移住した者と新興住宅地域に移住した者に分けて見ておきたい。

① 浦添各集落への移住

■ 一九三六年（昭和十一）に那覇市住吉町に生まれた儀間真善さんは、一九四四年（昭和十九）の「一〇・一〇空襲」以降、避難生活を余儀なくされる。翌年の米軍上陸後、南部への避難生活の途中で両親ときょうだい二人を亡くし、糸満で捕虜となる。そのまま中城や宜野座惣慶の収容所生活を余儀なくされた。後に、辺野古に避難していた叔父がその状況を知って、儀間さんらを引き取り祖母とも再会することが出来た。小学校三年のこ



1号線（現在の国道58号）牧港付近
浦添市立図書館所蔵

ろ、米軍キャンプとして賑わった具志川村の新興集落「金武湾」に移る。そして小学校五年の途中で真和志村安謝に移り、安里小学校、真和志中学校を卒業する。

安謝では、生き残ったきょうだいや祖母とともに、漁業を営む叔父の自宅で世話になり同居していた。高校卒業後、コザで写真店を経営していた兄を頼って胡屋に移り、米軍人経営の「キーストーン・ポートレートスタジオ」という写真館で働き始める。その後、国際大学夜間部に通いながら写真館で働き、卒業後は、那覇地区の漁業協同組合に勤務した。結婚後は一年間だけ安謝に戻って生活したが、写真館時代の同僚（牧港在住）が紹介してくれた牧港の借地に家を建てた。自らを「流浪の那覇市民だった」と称する儀間さんが牧港に安住の地を見つけたのは、一九六八年（昭和四三）のことであった。

■一九三八年（昭和十三）に宮古島の城辺村に生まれた友利敏雄さんは、七人きょうだいの長男であったが、高校卒業後に島を出て那覇に向かった。当時の城辺では、農業だけで生計を立てることが厳しい事情にあり、長男であっても出稼ぎなどで島を出る者が少なくなかったという。ただし、友利さんの場合は出稼ぎではなく、大学進学が目的だった。

移動当初は那覇の楚辺に住み、アルバイトをしながら大学に通った。その後、父親が牧港の土建会社で働くこととなり、城辺の家を引き払い、きょうだい三人を引き連れて来住することになった。当時、その土建会社は城辺を含む宮古島出身者が多く働いていたという。その結果、家族と生活するために、友利さんも那覇から牧港に移ることになった。

牧港では家族五人での間借り生活からスタートし、貸間や借家を移動する生活が続いた。一九六〇年（昭和三五）に琉球政府職員から教員に転職し、単身での八重山勤務となった。その後中学校、特殊教育諸学校（現在の特別支援学校）を歴任した。友利さんが牧港に落ち着いたのは一九六八年（昭和四三）だった。そのころすでに結婚していた友利さんは、牧港の建売住宅を購入し、ようやく家族揃って生活できるようになった。

■一九三九年（昭和十四）に南洋のポナペで生まれた久田オサエさんは、太平洋戦争終結後の七歳のとき、沖縄ではなく、一旦三重県に引き揚げた。三重県に六ヶ月間滞在した後、両親の故郷である名護の喜瀬に移動した。喜瀬では農業を営んだが、八人きょうだい



牧港中通り アスファルト舗装以前
浦添市立図書館所蔵

の一〇人家族で生活することは困難を極めた。美里村の泡瀬に移動し、そこでも農業をするが、やはり生活状況は改善しなかった。久田さんが十二歳のとき、読谷村から石垣島の開拓移民団（約三〇戸からなる琉球民政府による開拓移民計画）に泡瀬から参加することになり、長男と次男を除いて、家族で石垣島の米原に移住した。

米原ではサトウキビ農家を営んでいたが、久田さんは中学のときから五年間、農業の手伝いをしていた。その後、富野小中学校の給仕の仕事をしていたが二一歳のとき、川平郵便局につとめている男性と知り合い結婚した。夫の実家が近い川平で借家住まいをした。夫の両親は首里出身で戦前期に台湾へと渡航したが、終戦とともに川平へと移住していた。約十五年間川平で生活したが、久田さんが三六歳（一九七五年）のとき、夫の転勤のため那覇の首里に移動することになった。じつは、米原の両親は既に沖縄本島に戻っており、きょうだいたちも沖縄本島に帰っていた。よって、久田さんが最後に石垣島を出ており、もう石垣島に実家はない。

久田さんは、首里で一年半ほど暮らしたが、その間に浦添市経塚に土地を購入し、一九七七年（昭和五二）に家を建てて移住することになった。移住当初の経塚は、サトウキビ畑が広がり、豚舎がありハブも出没した。娘が運転する車で買い物に行くほど、周囲は何もない場所だった。経塚は移住者が多く住んでおり、名護や宮古の出身者が多いという。久田さんは、八重山では「沖縄の人」と言われ、那覇では「やいまんちゅ」と言われた経験がある。しかし、移住者が多い経塚は「気兼ねしない」地域だという。

以上、浦添の各集落に移住した者たちの移動経路に関する事例を若干紹介した。儀間さんの事例から推察できるように、その中には沖縄戦で家族を失い、帰るべき故郷や家を軍用地として取り上げられ移動を強いられた者たちが少なからず存在する。また久田さんのように、海外からの引き揚げ者たちが終戦直後の沖縄で余剰人口となって押し出され、「開拓団」として再び移動を余儀なくされたケースも少なくないものと思われる。

いずれの事例においても、家族や親族との相互関係を通じて戦後の移動生活を乗りこなし、それらを含む社会的ネットワークを通じて浦添の集落内に土地を見つけ移り住むとい



経塚集落方面を望む（1981年）
浦添市立図書館所蔵

うパターンが見受けられる。また、いずれも、結婚、就職や転勤、進学などの移動の契機において一旦那覇市内の借り住まいで居住し、そこから土地の購入や住居建設を通して浦添に移住するような経路となっている。

なかでも注目したいのは、友利さんの事例である。つまり、家族で宮古を離れざるを得なくなったとき、同郷者との相互関係が結び目となって牧港への移住を果たしたケースである。この強固な同郷関係があったおかげで、友利さんの家族は貸間や借家の移動生活を繰り返しながらも、牧港を離れることなく定住していったものと考えられる。

宮古各地域出身者が浦添に集住していく現象は、既存の文献でも確認することができ。たとえば堂前亮平の著書においては、勢理客、内間、宮城に字来間郷友会会員が多く居住している事例が紹介されている。つまり、同郷者間で住居や仕事の紹介・世話が行われていくなかで一定のエリアに集住する現象と思われる。宮古は一九五七年（昭和三二）の台風十四号（フェイ）以降、台風や干ばつを繰り返しており、農家に深刻な損害を与えている。そのような離島苦が人々を島から押し出す力となったと言えるが、他方、雇用機会の豊富さに加え、同郷者間の相互関係が宮古の人々を浦添に吸収する力となっている。⁴

②浦添の新興住宅地域に移り住む

次に、浦添の新興住宅地域に移り住んだ人々の移動の特徴を見ておきたい。

■一九三四年（昭和九）に那覇市垣花町で生まれた西平文子さんは「一〇・一〇空襲」によって母親との二人暮らしの家を失い、避難生活を余儀なくされる。米軍上陸以降は、国頭村辺土名など山中での避難生活となった。しかし、母親が山中で捕虜となり、西平さんは山中に一人取り残される。八月ごろ母親が辺土名の収容所を抜け出し、山中に呼びに来てくれた。そして祖母の出身地である大宜味村謝名城に向かい、戦争で一家全滅となった親戚の空き家で一年間「留守番暮らし」をすることになった。そこは水汲みなど生活に不便な場所であったため、親戚に相談したところ、辺土名に家を建ててくれた。

辺土名には一九四八年（昭和二三）ごろまで生活していたが、母親が那覇の松尾に借地

4

堂前亮平（一九九七）『沖繩の都市空間』、古今書院、二九―三八

第2節 人口の増加と都市形成

の家を見つけたので、辺土名の家を引き払った。松尾では母親が雑貨商店を営むなどして生計を立てた。西平さんは一九五七年（昭和三二）に結婚し、子ども四人を産んだ後も、松尾で同居生活を続けた。しかし、子どもたちが成長しても家主が改築を許可してくれないので、家を建てるための土地を探すことになった。そして一九六八年（昭和四三）ごろ、現在の住まいとなる浦添市港川に山城建設が手がけていた宅地（のちの緑ヶ丘地区）を見つけ購入した。四年間土地購入代金を支払い続け、一九七二年（昭和四七）によりやう家を建てることになった。

■一九三四年（昭和九）に北谷村桑江で生まれた大湾朝明さんは、小学校五年を修了したころ沖縄戦に突入し、家族とともに名護の多野岳の麓あたりに避難した。しかし、六月には食料が底をつき、北谷に帰ることを決意する。その途中、父親と姉とはぐれてしまい、家族三人だけになった大湾さんは恩納村喜瀬武原で米軍の捕虜となり、石川の収容所に移送された。最初は六畳一間に一〇人という寄り合い所帯の生活だったが、その後、山中ではぐれた父親と姉に再会し、規格住宅で戦後生活がスタートした。

大湾さんの家族は、北谷村桑江の土地を米軍に接収されたため、そのまま石川での生活が続く。大湾さんは石川高校を卒業し、石川ビーチや琉米文化会館で一九五三年（昭和二八）まで働いた。このころ大湾さんは、文化会館館長の勤めもあり、一九五四年（昭和二九）から一九五八年（昭和二三）までアメリカに留学している。

アメリカで気象学を学んだ大湾さんは、帰国後、米国留学時代の縁もあって、嘉手納基地内の気象台で働くことになる。そのころはコザの中の町で母親との二人暮らしとなるが、そこで半年間暮らした後、コザ山里の借地に家を建てた。そのとき、琉球銀行に勤めていた米国留学の同期からの紹介がきっかけとなり佐久川美智子さんと結婚する。さらに琉米文化会館時代や米国留学時代の縁が重なり、一九六二年（昭和三七）から那覇の琉球開発金融公社で働くことになる。

那覇在住時は、首里桃原町の瓦葺の借家を借りていた。職場への通勤の利便性、子どもの教育環境としては首里に住み続けたかったが、一九六八年（昭和四三）、浦添村港川



造成前の緑ヶ丘付近
浦添市立図書館所蔵

(緑ヶ丘)に土地を購入し、二年後に家を建て移り住んだ。大湾さんが緑ヶ丘に土地を見つけ購入したのは、義妹(妻、美智子さんの妹)の友人が山城建設で働いていたことがきっかけとなっている。

■一九四〇年(昭和十五)に兵庫県尼崎市に生まれて間もないころ沖縄に戻った知名弘さんは、親の実家がある中頭郡志川村川田で育った。川田では母親が実家の農作業を手伝いながら、軍作業で生計を立てた。小学校五年の一学期(一九五一年)ごろに母親の仕事の都合で那覇の三原に移り、借地の家を購入し生活をはじめた。知名さんによると、三原は大宜味出身者が多く住んでいたという。じつは、尼崎で知名さんを取り上げてくれた大宜味出身の産婆さんが奇遇にも家向かいに住んでおり、そこで約一〇年ぶりに再会することになった。三原では、産婆さんの家族と「まるで親戚付き合い」のようだった。

高校卒業後に就職した知名さんは、家を建て替えようとしたが、地主がそれを断ったため、新築を建てるための土地を探すことになった。母親が土地探しに奔走し、浦添村港川に山城建設が手がけた土地を見つけた。じつは、当時の山城建設には、知名さんが三原在住時に通った大道小学校の同級生が働いていたという偶然の出会いも重なっている。そして、一九六八年(昭和四三)、現在の緑ヶ丘に家を建て、定住することになった。

■一九三五年(昭和一〇)生まれの與那嶺良子さんは、那覇市上之蔵で生まれ育った。実家は履き物店を営んでおり、そこには辻遊郭の女性たちもよく買いにきていたという。與那嶺さんは、一九四四年(昭和十九)の「一〇・一〇空襲」に遭い、四年間大宜味村喜如嘉で疎開生活をしている。戦後、父親は大宜味村喜如嘉で生活をしている間に「うるま新報」に関わり、那覇と石川を往復する生活となった。

與那嶺さんの両親は大宜味村喜如嘉出身であり、父親は喜如嘉出身者の郷友会(七滝会)の創設に携わった初代会長である。よって、與那嶺さん自身も郷友会との関わりがあり、「山原出身」を自認し、七滝会の役員をつとめている。

與那嶺さんの家族は一九四七年(昭和二二)に那覇に戻るが、当時上之蔵は米軍に接収されていたため、真和志村三原で生活をする。その後、高校生の頃まで三原で生活し、一



伊祖・緑ヶ丘・港川遠景 山城住宅付近
浦添市立図書館所蔵

第2節 人口の増加と都市形成

九六二年（昭和三七）に結婚したあと壺屋や松川で暮らしている。一九六四年（昭和三九）に識名へと移ったが、與那嶺さんの夫が浦添村安波茶の宅地開発を手がけた琉信に勤めていたこともあり、現在の浦添ニュータウンに住まいを構えることになった。

■一九三七年（昭和十二）に宮古島の平良町西辺に生まれた楚南幸子さんは、結婚して間もない一九五六年（昭和三一）、夫の仕事の関係で島を出て、那覇の安謝に移った。安謝で一〇年ほど暮らしたが、「大所帯の家族」だったため、浦添村宮城に借家をみつけ移り住むことになった。じつは「大所帯の家族」とは、夫が経営する自動車修理工場の従業員たちを含んでいる。

楚南さんの夫は、那覇市松山のプリンス自動車に勤めていた。しかし、同社が一九六六年（昭和四一）に日産自動車に吸収合併されることになり、楚南さんの夫は同じ従業員と一緒に独立し、那覇市内で自動車修理工場を開業した。幸子さんも夫のもとでパンク修理工として働いた。工場には糸満やコザの人も働いていたが、宮古島出身青年たちの働き口にもなっていた。この従業員たちが住み込みで働けるように、浦添の宮城で家を借りることにしたのである。

楚南さんは宮城で三年ほど暮らし、一九七〇年（昭和四五）に浦添ニュータウンに移ったという。当時は第一期目の工事期間であったため、三〇四軒ほどしか家はなかった。その後、夫の工場が国道五八号の拡張工事のため立ち退きになることが決定し、そのまま工場を閉じることにした。

以上は、浦添の新興住宅地に移住した者たちの移動のありようについて若干の事例を紹介した。ここでも「一〇・一〇空襲」、米軍上陸と米軍統治という戦中・戦後の沖縄の歴史的背景が影響し、故郷や家を接収され失った者たちの事例を確認することができる。また、これまでの事例と同様に、移動生活を余儀なくされながらも、家族や親族との相互関係等において戦後生活を乗りこなしていく姿も垣間見ることができる。そして、楚南さんの事例のように、ここでも宮古島出身者の同郷関係の強さを知ることができる。さらに、大湾さんのように、米国留学時代の人的ネットワークを職業移動の重要な核として、それ



浦添ニュータウン公民館と広場（1983年）
浦添市立図書館所蔵

にともなう地域移動のケースを見ることが出来る。

浦添の新興住宅に移住した人々は、個々の事情によって複雑な移動経路をたどりながらも、以上のようなインフォーマルな関係を活かしながら那覇都市圏に移動し、その後ベツドタウン化が進む浦添に宅地を見つけ購入するパターンとなっている。その場合にも、那覇市内の住宅事情や地主との関係で押し出された事例を確認することができる。

ここでは緑ヶ丘と浦添ニュータウンへの移動過程の事例のみを取り上げた。当然のことながら、新興住宅地の物件は宅地開発業者とのフォーマルな関係を介して購入することになる。しかしこのフォーマルな関係とは別に、「義妹の友人」「同級生」「夫の職場」などインフォーマルな関係が重なり合って宅地の購入に至った事例も少なくない。

(三) 移動する人々を引き寄せた戦後浦添

ここでは浦添に移り住んだ人々の個々の移動歴に焦点をあて、その目的や動機づけにおいて、どのような社会関係を有し、どのような価値規範に基づいて移動したのか、若干の事例から考察した。その移動は、個々によって事情を異にしている。しかし、そこには雇用機会などの経済的な理由とは異なる、社会的な側面や戦後沖縄の歴史的な経験（沖縄戦、米軍上陸、米軍統治など）が大きく作用していたことも分かる。

一九五〇年代から六〇年代の浦添では、米軍キャンプや基地周辺の雇用機会、それに続く軍雇用を起点とした移動と定住の特徴を見出すことができる。米軍関連の就労生活は、技能習得の機会のほか、次なる就労機会の情報収集網となっている。その社会関係などのネットワークをいかした自立的な生活のあり方は、浦添への移動と定住に影響していたものと思われる。とくに、米軍キャンプ内の寄宿舎やゲート近くの貸間・借家での生活は、家族や同郷者との相互関係場面も見られる。

また、一九六〇年代から七〇年代にかけての那覇都市圏の拡大にともなう浦添の近郊都市化の過程においては、家族や親族との相互関係を含む社会的ネットワークを介して、浦添の集落内や新興住宅地域に土地を見つけ移り住むというパターンが見受けられる。いず



内間の市営住宅建設（1969年）
浦添市立図書館所蔵

れの事例の場合にも、一旦那覇市内に移動・居住し、そこから家族変動や住宅事情を主な理由として浦添に移住している。なかでも、宮古各地域出身者については、同郷者間の相互関係が浦添への移住と集住の大きな契機となっている。(桃原一彦)

三 自治会を通した人々のつながり

浦添は、基地建設や基地内労働およびその周辺の市街地化と雇用機会の増大によって、戦後沖縄の流動人口を大量に吸収した。また、那覇のベッドタウンとして近郊都市化が進み、多くの新興住宅地域を誕生させた。その過程において、浦添の地域社会は、「旧来からの住民と新しい住民とが極めて複雑に入り組んだ形」となった。¹

ここでは、浦添に移住した人々が地域社会においてどのような社会関係を構築し、共同意識を芽生えさせ、生活のあり方を見出したのかに着目し、その定住の意味を理解していく。そのうえで、まず浦添の既存の各集落に戦後移住した人々が、地元住民との間でどのような関係性を形づくり、どのような共同性を構築してきたのかを見ておきたい。次に、浦添の新興住宅地域において移住者たちが築き上げた関係性と共同性について、自治会の形成過程や地域活動を中心に見ておきたい。

(一) 新旧住民が住みあう浦添の各集落

ここで述べるところの浦添の集落とは、仲間、安波茶、伊祖など沖縄戦以前より存在する集落のことである。『浦添市史』では、上記集落の地域住民組織(自治会)を「古村落型自治会」として分類している。また、戦後間もない一九四七年(昭和二二)に「古村落」から分離して誕生した港川、経塚、当山、大平は、かつての村落のありようを引き継いだ「新村落型自治会」として分類されている。²ここでは、戦後に浦添の「古村落」や「新村落」に移住した人々の地域生活と共同性について言及する。

① 勢理客における移住者の地域生活

浦添の各集落に戦後移住したときの移住者たちの地域生活の様子は、既存の文献からも

¹ 浦添市史編集委員会(一九八七)『浦添市史 第七巻資料編六 浦添の戦後』、浦添市教育委員会一五五

² 浦添市史編集委員会(一九八七)一五六―一五九

垣間見ることができる。たとえば、一九五六年（昭和三一）に平安座島出身者が浦添の宮城で間借り生活を始めようとしたとき、「他所から入ってきた人間だから自治会には入れなかった。加入したいと思っても、言えないような雰囲気だった」「住民登録には区長の許可を得るための保証人も必要だった」という記録が残されている。³このように、基地建设および軍雇用を中心に多くの労働力が吸収された当時の浦添であっても、村落共同体の地域性を残す集落では、移住者の地域参加は困難なものであった。

移住者が経験したそのような状況は、本編の聞き取り調査においても確認することができる。一九七〇年代中頃、勢理客に防水管理会社を立ち上げ、勢理客商工業者会会長や地域老人会（勢理客勢隆会）の会長をつとめたこともある照屋正元さん（那覇市繁多川出身）によると、「以前は寄留民と地元民の間に溝があった」という。また、一九六四年（昭和三九）に勢理客に移住した塩川浩一さん（伊良部村出身）のように、基地関連の仕事に長年従事していたため、「地域の人との交流は少なかった」というケースもある。

勢理客では、移住者が自治会に加入することができなかったわけではない。移住者であつても加入を希望し、会費を納めれば、入会し活動に参加することができた。ただし、移住者にとって日頃の地域活動の場面では地元民との間に距離を感じることが少なくない。とくに、移住者が地域の伝統的な祭祀等の年中行事に関わることは困難であつたし、移住者の側も積極的に関わることに抵抗があつた。たとえば国指定の無形民俗文化財である勢理客の獅子舞など、「地元民が崇めるものに移住者が触れることはなかった」し、獅子舞保存会に入ることでもできなかった。また「寄留民」と言われることが度々あつた。一九六〇年代ごろまでは、移住者が勢理客の自治会役員に就くことは困難であつた。

他方、既存の文献では、勢理客において移住者が地域社会の担い手になっていく様子が記録されている。⁴浦添における市街地化や近郊都市化は流動人口を大量に吸収し、各地域社会での定住を促進した。それは、必然的に地域社会における住民構成を変化させる。たとえば、一九六九年当時の勢理客八班は一二世帯を擁しており、そのうち宮古島出身者が約五〇世帯、本部町出身者が四世帯、他にも八重山諸島、久米島、津堅島、伊平屋島な

3 石原（一九八六）七三

4 石原（一九八六）

第2節 人口の増加と都市形成

ど、さまざまな出身者によって構成されていた。そこでは、宮古島出身者や伊平屋島出身者が郷友会活動の経験をいかして、ピクニック、囲碁大会、ダンスクラブ大会、体育部の創設とスポーツ活動の指導などを展開している。これらの地域活動の積み重ねによって、移住者の中から新たな地域リーダーが育ち、自治会の評議員となる者、そして自治会長に選ばれる者が次々と誕生している。浦添におけるこのような地域変動によって、一九六九年（昭和四四）の村議会では、定数二二人中に移住者が五名となり、一九七三年（昭和四八）には定数二七名中十二名を占めるに至った。⁵

とくに、勢理客では大見謝幸一自治会長（伊平屋村出身）の時代（一九七〇年～七二年）に、移住者と地元民との融合を図るための工夫が活発に施されている。当時の勢理客では都市化とともに青年会活動が停滞し、区民運動会も消滅していた。大見謝会長は運動会の復活を計画し、予算化を試みる。その財源獲得の方法は、勢理客に所在する企業等から運動会の賞品を寄付してもらうというものだった。この計画を企業側に提案するとタオルが七〇〇枚も集まり、スーパーマーケットから煙草、文具店から文具品が集まった。タオルには各企業等の名称や宣伝文を印刷し、広告を兼ねた。プログラムには寄付者名をプリントし、会場に募金箱を設置するという徹底ぶりだった。また、運動会の余剰金は備品購入（テント、陸上競技の砲丸ややりなど）に充てられた。⁶

また、大見謝会長時代の勢理客では、伝統文化に関する活動にも創意工夫が施されている。かつて参加が難しかったという「十五夜」にも移住者が参加できるようになった。それは、宮古出身者や八重山出身者が郷里の伝統芸能を披露するものだった。勢理客の獅子舞十二芸のうち毎年三～四芸を行い、それに加えて、全十四班から一つずつ芸を披露し、全体で十八～二〇の演目でプログラム編成を行った。たとえば、五班は奄美大島の芸能、七班は八重山の「バシントゥイ」、一〇班は伊平屋村野甫島の棒術、十二班は宮古のクイチャーという構成になった。「十五夜」の演目は、地域住民の交流や連帯の深化も目的としているため、可能な限り集団演技の演目をするよう心がけた。⁷

また、移住者の子どもたち（二世）にとって勢理客は「地元」となる。その子どもたち

5 石原（一九八六）一〇七

6 石原（一九八六）一四二―一四三



八重山のマミドーマが演じられる勢理客の十五夜（2010年）仲西正勝提供

7 石原（一九八六）一四三

のために地元（故郷）の思い出を作ってもらったための活発な地域活動が行われている。本編の聞き取り調査では、子ども会の活動をはじめ、和太鼓や獅子舞など文化活動の事例を紹介してもらった。かつて移住一世にとって近寄りがたい存在だった獅子舞は、当然のことながら二世にとっては参加可能な「地元」「故郷」の文化活動となっている。

② 牧港における移住者の地域生活

戦後の牧港は、牧港ハイツ、マチナトタウン、上野、安川など新興住宅の自治会をいくつか抱えており、移住者と地元民との間に一定の住み分けがみられる地域である。しかし、「古村落」としての牧港集落では、移住者と地元民が入り組んだ形で地域生活をうかがい知ることができる。

一九五〇年代以降、牧港には基地建設や軍雇用およびマチナト・コマールシヤルエリアなどを中心とした市街地化や雇用機会の増大にもなっており、多くの人々が市外から来住し定住している。たとえば、県外企業の日立、東芝、清水建設、間組が担った牧港発電所の建設現場では、沖縄島北部、宮古や八重山、そして奄美大島の出身者が多く働いていた。さらに、牧港では軍作業や各建設現場の労働者向けおよび繁華街で働く女性向けの貸間業や借家業が盛んに行われており、最盛期には約二〇〇世帯のうち三分の一が貸間・借家業を営んでいた。その大半は家主が自宅の「クチャグワー」（裏部屋）を貸すような貸間となっており、借り手は男女がほぼ半々だった。本編の聞き取り調査では、宮古島出身者の同郷者結合や集住に関する事例もある。

それにともない、牧港では、集落を貫く中通り（現県道一五三号）の商店街を中心に、移住者が事業や商売を始めるケースが少なくない。牧港の地域誌では「床屋、食堂、飲み屋、その他医院もできてきた」こと、そのなかで奄美大島出身者による事業が目立ったことも記録されている。本編の聞き取りでは、前節の佐多次宏さんのように、一九五二年（昭和二七）に移住して間もなく土地や家屋を購入し、事業を展開しながら地域活動に参加する移住者のケースが見られる。



勢理客の十五夜祭。保育園児による獅子舞
(2010年) 仲西正勝提供

また、貸間・借家業をめぐるのは、一九六〇年代に那覇市内や浦添の一部の地域で宮古島出身者に貸さないという被差別的な経験の証言もあった。ところが、牧港では宮古島出身者のみならず、移住者に対する地元民からのあからさまな拒絶はあまり感じられなかったという。ただし、牧港の地域生活や地域活動への参加について、移住者と地元民との間に距離感のようなものがまったくなかったわけではない。牧港は、隣接する伊祖との境に水源を有し、那覇方面の水源地としての役割を担うほどであった。そのため、戦後間もない復興期には、集落内の道辻に約五〇メートル間隔で簡易水道が設置された。簡易水道は、地元民が集落復興のために多大な苦勞のなかで設置したものであったため、貸間・借家暮らしの者および移住者はその「負担金」という名目で利用料金を徴収された。牧港の地域誌によると、月々三〇〇円（B円）だった。聞き取り調査によると、移住者が牧港自治会に加入したとしても、自治会費に簡易水道の利用料が加算されるため、会費は地元民よりも高かった。移住者のなかには、簡易水道をめぐる地元民との格差について不満を持つ者も少なくなかったため、自治会長に抗議する場面があった。

また、前節で紹介した友利敏雄さんは、牧港区十六班の班長のころ、公民館新築の資金造成のために各戸をまわって一口三〇〇〇円の寄付金集めに奔走した。十六班の住民は圧倒的に移住者が多く、快く寄付をしてくれる者もいたが、公民館の活動や利用に理解、協力を得ることが難しく、寄付金集めに苦勞したこともあった。

さらに、牧港は軍用地も有しており、その地代（軍用地料）の存在は、移住者が自治会に参加するうえで「敷居」を高いものにしていった。その後、軍用地料の管理・運用が地主会に移行され、自治会活動とはある程度切り離されたため、移住者も気兼ねなく自治会に加入するようになった。

ところで、移住者が牧港の自治会および地域活動に参加する過程には、いくつかの側面を見出すことができる。まず、牧港の中通り商店街の通り会活動を通しての地域参加である。先ほど紹介した佐多さんは、電力会社に勤める傍ら牧港で事業を展開し、通り会の役員をつとめている。一九七〇年ごろ、佐田さんが会長るとき、通りへの夜間街灯設置を通



牧港中通り 浦添市立図書館所蔵

り会の事業として提案し、設置後の管理（電気料金の負担やメンテナンスなど）について自治会との交渉を開始した。二年をかけた交渉の末、通り会と自治会は「復帰記念事業」として連携をとり、寄付金を集め、街灯設置を実現させた。ちなみに、通り会の会長は牧港自治会の定例役員会に出席することができた。よって、移住者が多くを占めていたという牧港の通り会は、地域の担い手として重要な役割を担っていたといえるだろう。

次に、移住者が牧港の地域活動に参加する過程として重要な役割を担ったものとして、牧港小学校のPTA活動をあげることができる。移住者のなかで、地域社会との接点が少ない働き盛りの年齢層は、自宅と職場の往復で日常の多くの時間を費やしてしまう。そのような移住者にとって、一九七三年（昭和四八）に浦添小学校から分離し誕生した牧港小学校の開校は大きな転換点となった。一九六〇年（昭和三五）ごろから牧港の児童は浦添小学校までバス通学が可能となったが、それまでは「石グー（石ころ）」だらけだった約二キロメートルの不便な道程を徒歩で通学していた。また、バス通学が可能となった後も、高学年の児童は徒歩通学のままだった。通学路の安全面に不安を抱えていた牧港の保護者たちにとって、地元小学校が誕生したことは「わったー（私たちの）小学校」という意識の芽生えにつながった。その結果、PTA活動の展開とともに、地域の環境整備や緑化運動も活発化していった。それまで、牧港の地域活動は、地元民を中心とした青年OB会が主たる担い手となっていたが、移住者はPTAを介して地域活動に加わるようになり、地元民および移住者相互の交流がはかれるようになっていった。

③ 経塚における移住者の地域生活

次に、戦後「古村落」から分離した「新村落」の事例として経塚の事例をみておきたい。安波茶、前田、沢岬にまたがるヤードウイ（屋取）集落だった経塚は、戦後復興期の一九四七年（昭和二二）に浦添の行政区として誕生している。

一九七〇年（昭和四五）、経塚に移住した島袋武則さん（宜野座村松田出身）は、当時原野と農地が広がり、周囲にほとんど民家がない「僻地」「辺鄙な場所」に土地を購入



牧港小学校開校（1973年）
浦添市立図書館所蔵

第2節 人口の増加と都市形成

し、住まいを構えた。島袋さんが家を建てた現在の経塚六班辺りは地元民の経塚集落から離れており、移住者が圧倒的に多い新興住宅のような場所となる。そこは沖縄島北部出身者や宮古島出身者が多く、島袋さんと同じ宜野座出身者も三〜四世帯ほど居住している。のちに島袋さんの自宅裏手に土地を購入した人も宜野座出身者であり、その建築予定地に生活道路を通すさいには、島袋さんの土地の一部を道路用地として譲った。

移住当初のその土地は、電気の供給は行われていたが、上下水道が整備されていなかった。自宅建築中に何度か役所に赴き、上水道を整備するようお願いしたが、「自宅周辺に十四〜十五世帯の住宅が建たなければ整備できない」と言われた。島袋さんの自宅敷地の隣に木工所があり、そこには小さな水道パイプで水道水が届いていた。島袋さんは個人的に木工所に頼み込んで、そのパイプを敷地まで引かせてもらった。その後、自宅建築中に水道局が敷地前の掘削作業をはじめ、簡易水道を引いてくれた。ところが、夕方以降になると経塚の多くの世帯が水道を使用するため、簡易水道設備では高台にある六班の方で水が出にくくなるという事態にあった。結局、高台に住む人たちは、現在の「サンエー経塚シティ」のところにあった井戸から水を汲み、自宅までバケツで運ぶこともあった。

また、那覇市内に勤務していた島袋さんにとって、移住当初の経塚は交通の面でもとても不便な場所だった。島袋さんは当時自家用車を所有していなかったため、バスで一旦屋富祖まで出て乗り換えるか、あるいは徒歩で首里平良町まで出て那覇市内線のバスで通勤するという方法だった。当時島袋さんの妻は城間の外国資本商社で働いており、幼かった子どもをおぶってバスで通勤し、職場近くの保育所にあずけていた。帰宅時間は妻の方が遅かったのも、子どもの迎えは島袋さんが担当し、子どもをおぶってバスで帰宅するような状態だった。交通の不便さを最も感じたのは、子どもが急病のときだった。当時、経塚はタクシーが通るような地域ではなかったため、バスが運行していない深夜などはタクシーが拾える場所まで子どもをおぶって長い距離を歩き、那覇市安里の病院まで行った。

さらに、移住当初の不便さは、交通の面だけではなかった。島袋さんが家を建てた場所（現在の六班）は当時集落から離れており、周辺は原野と畑ばかりで民家が少なかった。



経塚水道管配管工事（1967年）
浦添市立図書館所蔵

島袋さんは夫婦共働きであったため平日日を留守にすることが多く、水道や電気など公共料金の集金人に会えないことが頻繁にあった。周囲に民家が少なかったため集金人に支払うための代金を近隣に預けることもできず、電気の供給を止められたこともあった。

島袋さんが移住した当初、経塚自治会への加入世帯はほぼ地元民が占めていた。しかし、島袋さんは、集落から離れた場所に居住した移住者であるにも関わらず、自治会に加入し、運動会などの地域行事にも積極的に参加した。また、早い時期から班長を任されている。移住者の受け入れに対する経塚自治会（地元民）の姿勢は柔軟であり、入会や活動への参加そのものに障壁はなかった。一九八〇年代以降は島袋さんの自宅周辺にも住宅が建ちはじめ、それ以降経塚の宅地開発は着実に進み、移住者が経塚地域の多くを占めるに至った。しかし、近年の移住者は、あまり積極的に自治会には参加してこないという。よって、やはり経塚自治会そのものは地元民が主体となった活動となっている。

ここまで、勢理客、牧港、そして経塚という浦添の「古村落」および「新村落」における戦後移住者の地域生活と地域参加について、各自治会の活動を中心に概観してきた。いずれの地域においても戦後の人口構成は市外からの移住者が多数を占めているものの、自治会への加入や地域活動への参加のありようには違いがみられた。

「古村落」としての勢理客では、移住者は一九七〇年ごろまで地域の伝統的な祭祀行事に一定の距離をおくという状況にあった。一九七〇年代以降、移住者の地道な地域活動の積み重ねの結果、自治会活動や役員への就任のみならず、伝統的な祭祀行事にも関わるようになっていった。また、牧港では、簡易水道の使用料金をめぐる地元民との格差はあったものの、戦後間もないころからの貸間・借家業の広がりや移住者の受け入れに対する柔軟な姿勢を地域社会に築きあげていった。さらに、移住者と地元民が共に地域社会の担い手となっていった過程において、通り会活動や小学校の開校が果たした役割は大きい。

一方、戦後間もなく誕生した「新村落」としての経塚は、かつて屋取集落だったという歴史性も背景にあり、むしろ新興住宅地域としての特色を集落内にもつ地域といえる。そのため、移住者にとっては自治会をはじめとする地域社会への参加に障壁はあまりないも



港川小学校・幼稚園開校（1980年）
浦添市立図書館所蔵

のと考えられる。むしろ、自身が移り住んだ地域社会の生活基盤整備が契機となって、移住者相互の社会的紐帯や地域社会への帰属意識を強めていったものと思われる。

(二) 新興住宅地域における自治会形成と共同性

戦後の浦添では一九六四年（昭和三九）の城間ハウジング（一八〇戸）を皮切りに、住宅団地の建設が活発化する。とくに、那覇のベッドタウン化が進展した一九七〇年の市制施行以降は、公営、民営の住宅団地の建設ラッシュが進んだ。¹⁰ 住宅団地等の新興住宅地域では、一九七一年（昭和四六）の広栄団地自治会（現、広栄自治会）をはじめとして、一九七〇年代から八〇年代にかけて自治会組織が次々と結成されていった。¹¹ よって、浦添では、一つの行政区内に複数の自治会組織が存立するという都市社会特有の現象が生じた。

たとえば、既存の文献からは港川自治会の状況をうかがい知ることができる。一九四七年（昭和二二）に牧港と城間から分離して誕生した港川では、戦後間もなく奄美大島出身者が多く移り住んだと言われ、その後も国道五八号の東側（「上港川」）を中心に多くの新興住宅が誕生した。港川自治会は移住者等の新規加入を認めているが、移住者の多くは未加入状態あるいは新興住宅において独自の自治会に加入しているという。¹² これは港川に限らず、浦添市内のあらゆる行政区単位自治会が直面している課題である。

ここでは戦後浦添の新興住宅地域に移住した人々の地域生活と共同性について、地域住民組織（自治会）の形成とその活動史を中心に見ておきたい。とくに、那覇のベッドタウン化との関わりにおいて一九七〇年代に誕生した自治会の事例からみておきたい。

① 緑ヶ丘自治会の形成と地域生活

伊祖と港川の境界に位置する緑ヶ丘は、一九六〇年代に山城建設によって宅地開発された新興住宅地域である。開発間もないころ、そこは原野が広がり、窪地や水たまりが点在する湿地帯だった。また、山城建設がその土地を所有・開発する以前は、那覇市の「緑屋」という事業所の所有地であったという記録がある。のちに当地に移り住んだ人々は、

10 浦添市史編集委員会（一九八七）
一三三―一三四

11 浦添市史編集委員会（一九八七）
二〇〇―二〇一

12 浦添市史編集委員会（一九八七）
一六四―一六五

この「緑屋」の一字を用いて「緑ヶ丘」という名称を考案している。¹³

山城マンションをはじめ山城建設が宅地開発を手がけたその界隈は、当初「山城団地」と呼ばれていた。本編の聞き取り調査では、緑ヶ丘は宮古、八重山、久米島、伊江島出身者が多いという証言があった。よって、浦添市内の他の地域と同様に、緑ヶ丘においても宮古出身者をはじめとする同郷者の強い結びつきや郷友会の活発な活動を見聞きするといふ。その一方で、緑ヶ丘が「山城団地」と呼ばれていた当時から、医師の仲村起福さんとの縁を中心にした地域の新たな関係性が築きあげられていた。その住民有志は仲村医師の自宅に頻繁に集まり「地域を良くしていこう」という語らいが行われ、住民の親睦を図るための団体を作る計画が進んだ。この新たな地縁関係が、緑ヶ丘自治会の前身「むつみ会」の結成へとつながる。

一九六九年（昭和四四）七月に住民有志六六名で結成された「むつみ会」は「山城団地」界隈の居住者で入会希望者および会員の紹介等があれば誰でも入会することができた。また、結成当初は、親睦団体という性格上会費等を徴収することはなかった。のちに会費徴収を行うようになってからは、七月から翌年六月までの米国式の会計年度で収支の管理・運用が行われるようになった。役員の会合等は初代会長の仲村医師の自宅で行い、「むつみ会ニュース」という会報誌も定期的に発行した。さらに、街灯や住宅地図看板の設置、盆踊り、ピクニック、新年会などを行った。とくに盆踊りでは、地元の電気店や建築業者に舞台設営を協力してもらった。ちなみに、一九七〇年（昭和四五）の浦添市市制施行のさいには独自の祭りを催し、打ち上げ花火や民謡グループ「フォーシスターズ」のショーを行った。このように「むつみ会」は地域有志の親睦団体であるにもかかわらず、ほぼ自治会組織のような機能を果たしていた。

一九七一年（昭和四六）、「むつみ会」は、近隣住区の把握や広報等の周知徹底を促すために班編成を行い、班長体制を確立した。また「むつみ会」の総会や会議の場では「日ごろからの交流がもっと必要ではないか」という話題のほり、班を基本単位とした住民間の交流も盛んに行われるようになった。とくに四班では各家庭を持ち回るかたちで模合



緑ヶ丘団地祭りのようす（1960年代）
浦添市立図書館所蔵

13

記念誌編集委員会（一九九三）『創立二〇周年記念事業緑ヶ丘自治会館落成記念誌』浦添市緑ヶ丘自治会、七九

「むつみ会」の地域有志は、「山城団地」という企業名を冠した名称を愛着ある魅力的なものに変えようと話し合い、この地に「緑ヶ丘団地」と名づけた。また、港川から伊祖方面までのエリアは外国人（米兵およびその軍属）向けの住宅が多く建ち並び、緑ヶ丘でも山城マンションをはじめ外国人居住者が多く見受けられた。一九六九年（昭和四四）に琉球政府が実施した「メイド等の労働実態調査に関する資料」¹⁴では外国人住宅（ハウジングエリア）が地図化されており、浦添村港川から伊祖にかけて「港川ハウジングエリア」「沖商ハウジングエリア」、そして「山城団地ハウジングエリア」を確認することができると。緑ヶ丘の街路に設置された看板には、外国人居住者にも馴染みやすいように「グリーンハイツ」という英語名も付記されていた。

「むつみ会」は、大湾朝明さん（北谷村出身）が第三代会長をつとめた一九七一一〜七二年（昭和四六〜四七）に、浦添市に対していくつかの陳情・要請を行っている。当時の緑ヶ丘においてとくに深刻な問題となっていたのが道路事情だった。緑ヶ丘一帯の道路は未舗装のままだったため、大雨が降るたびに穴だらけの凸凹道になるような状態だった。しかも道路脇の側溝が狭小だったという事情も重なり、溢れ出た雨水で道路が冠水する事態になっていた。そこで、市に対し道路舗装と側溝整備を要請したが、緑ヶ丘一帯の道路

資料の出典：
『メイド等の労働実態調査に関する書類』
沖縄県公文書館所蔵、資料コード 0000075021

15 記念誌編集委員会（一九九三） 七九

は山城建設の「私道」扱いとなっていたため、直ちに工事着工とはいかなかった。結局、山城建設から市道認定手続きの承諾を得るなど、工事の着工までに時間を要した。

当時の道路事情と関連して、児童の通学区域や通学路の問題もあった。緑ヶ丘の児童は、一九七一年（昭和四六）十二月に浦城小学校が開校されるまで、約二キロメートル離れた仲西小学校まで通学していた。大湾美智子さん（那覇市若狭出身）は一九七〇年（昭和四五）ごろ緑ヶ丘に移り住むが、当時末の子が仲西小学校の一年生だったため、登校時は子どもを学校まで送り届けるのが日課だった。しかし、下校時には、一年生ながら屋敷祖からのバスを利用して帰宅させるような状況だった。また、浦城小学校開校後も、さとうきび畑を抜けるような通学路や、空き地には水溜りのような池があるなど安全面に問題を抱えていた。そこで、子どもたちの安全確保のための話し合いがもたれ、空地の草刈り作業や登校指導が行われた。¹⁶

以上のように地域環境の整備を市に陳情・要請する行動のなかで、「むつみ会」を中心とした住民たちの間から、緑ヶ丘の自治会認定を必要とする声が上がっていった。当時の大湾会長は市に対し正式な地域自治会の承認を要請し、一九七二年（昭和四七）一月、緑ヶ丘自治会が誕生することになった。

先ほど、緑ヶ丘では山城マンションを中心に外国人居住者が多く見受けられたと述べたが、かれらが自治会に入会し、活動に参加することはなかった。一九七二年（昭和四七）の「復帰」後、外国人居住者と入れ替わるように、自衛隊員とその家族の入居が目立ちはじめた。「復帰」間もないころの沖縄県内では、自衛隊員が地域の行事や活動に参加することに反発をもつ者も少なくなかった。他方、緑ヶ丘では「むつみ会」結成のころに誕生した婦人会に自衛隊員の妻たち四〇〇〜五〇〇名が参加し、地域交流を図るなかで、隊員の方々との近隣関係も深まっていた。

また、緑ヶ丘はスポーツ活動が盛んな地域でもある。たとえば自治会独自の運動会を開催し、浦添市内の地域対抗の運動会では優勝した経歴がある。また、緑ヶ丘の「ママさんバレーボール」チームは、全国大会で準優勝を果たしている。



緑ヶ丘ママさんバレーボールチーム
浦添市立図書館所蔵

16
現在、緑ヶ丘の小学校区は港川小学校
（一九八〇年四月開校）となっている。



浦城小学校建設 浦添市立図書館所蔵

緑ヶ丘自治会の事務所は、会長宅を利用したり、大城永一郎市議会議員の事務所内に間借りするなど、これまでに四回移転している。一九七九年（昭和五四）からは三班内の土地を借りるかたちでプレハブ建ての事務所を構えたが、そこは行事等に利用するには手狭であり、台風のさいに建物に被害が出るほどの簡素なものだった。会員は自治会発足当初から自治会事務所の建設資金を積み立てていたが、会員・非会員からの募金協力、浦添市や財団法人自治総合センターの助成事業を活用することによって、一九九二年（平成四）に三階コンクリート建ての自治会館建設が実った。

緑ヶ丘では先ほどの婦人会に加え、一九八一年（昭和五六）に子ども会と青年会を結成している。しかし、移住一世が立ち上げた婦人会や青年会は、現在活動が停滞しているという。緑ヶ丘では一世の子どもたち（二世）の多くが他出する傾向にあり、あまり地域に根づいていない。また、近年緑ヶ丘地区内に移住する若い世代は、婦人会や青年会活動のみならず、自治会や地域活動そのものに参加しない傾向がある。今日、子ども会活動の世話を含め、緑ヶ丘の地域行事や地域活動を担うのは主としてシニア友の会（老人クラブ）の会員である。シニア友の会は一九七五年（昭和五〇）に結成されているが、「老人」という言葉の響きを敬遠する人でも入会しやすいようにこの団体名を付けた。

かつて緑ヶ丘自治会は隔年で運動会を開催していたが、現在は行っていない。現在の主な活動は盆踊り、ピクニック、グラウンドゴルフ大会、囲碁大会などを実施している。また、会員が歌、踊り、作品展などを披露する文化祭を二、三年に一度開催している。このような多彩な活動が評価され、一九九三年（平成五）には自治省の「コミュニティ活動活性化地区」のモデル指定を受けている。¹⁷

行政区上、緑ヶ丘は伊祖に所在する。しかし、本編の聞き取り調査においては「伊祖に所属している意識はない」という緑ヶ丘住民の声があった。「おそらく伊祖の方々も、緑ヶ丘が伊祖だという認識はないだろう」という語りもあり、緑ヶ丘は浦添市のなかで住民独自の自治が息づいた地域社会であるといえる。

② 浦城自治会の形成と地域生活

一九七〇年代、浦添市の新興住宅地において、緑ヶ丘自治会の次に誕生したのが浦城自治会である。現在の城間四丁目（北宇地真原）で結成された浦城自治会は、一九七四年（昭和四九）に市の正式な自治会として認定されているが、その前身となる地域住民の活動は認定以前にまで遡ることができる¹⁸。

北宇地真原はかつて田畑が広がり、ウシオーラサー場（闘牛場）や魚が棲む池もあった。一九六九年（昭和四四）、那覇市小緑の善太郎組が同地域に約一万坪の「城間貸住宅組合」の宅地開発を開始し、外国人向け住宅四六棟・一八四世帯分を建設した。組合の共有地として誕生した城間住宅は、出資者が土地・家屋の権利を購入し組合員となる仕組みになっていた。この物件は米軍兵士および軍属向けに月八〇ドルで貸し出された。

一九七二年（昭和四七）からは、外国人と入れ替わるように自衛隊隊員や国家公務員の家族が入居するようになった。また、一九七三年（昭和四八）ごろは、沖縄海洋博覧会会場建設業者の従業員向け宿舎となっていた。それでも一九七五年（昭和五〇）ごろまでは地域の子どもたちと外国人の子どもたちが一緒に遊ぶ光景が見られたという。

一九七二年（昭和四七）に「城間貸住宅組合」に入社した新崎和子さん（名護出身）は、共有地を出資者の個人名義に分割し登記するさいの会計処理に携わっていた。このころ同住宅では「城間住宅組合自治会」が結成されているが、各所で公務員宿舎の建設が進むと、自衛隊隊員や国家公務員は城間住宅を離れるようになった。そのため、一般市民が入居しやすいように家賃を安くした。一九八〇年代以降、所有者のなかには土地・家屋を売り払う者が現れ、増改築や新築の住宅が目立ちはじめた。

ところで、一九七二年ごろ、北宇地真原の地域はいくつかの問題を抱えていた。まず、子どもたちの就園・就学である。とくに、各地域公民館に併設されていた幼稚園は地元の子どもたちで満杯となり、新興住宅地域の移住者の子どもたちが入園できないという問題があった。また、当時の北宇地真原は、計画的な宅地造成がなされておらず、道路舗装や側溝等の整備もなされていなかった。とくに深刻だったのは、一九七三年（昭和四八）か

18

『浦城自治会創立三〇周年記念誌』（二〇〇五）を参照。



城間宇治真原 浦添市立図書館所蔵

ら着工された電電公社（現NTT）社宅や公務員宿舎方面の工事の土砂が、大雨のたびに流れ込んでくるという問題であった。街路が泥でぬかるみ、ときには自動車が往来できないほど道路が冠水し、ボートで救助された経験をもつ住民もいる。

そこで、地域の意見を取りまとめ、行政に陳情するために、住民有志四〇五名によって自治会結成のための話し合いがもたれた。その結果、一二世帯の賛同を得て「北原自治会」が結成された。つまり、当時同地域には「城間住宅組合自治会」と「北原自治会」が混在していたことになる（両自治会とも市の認可を受けていない）。

「北原自治会」は行政に対し道路や側溝の整備を要望したが、直ちに着工されることはなかった。住民らは、各世帯から二万円ずつ資金を出しあい、当時生コン会社の役員を務めていた西銘秀明副会長の協力を得て、道路をコンクリートで舗装した。ちなみに「北原自治会」の会員は、宮古、八重山、沖縄島北部などさまざまな出身者で構成されていた。年齢構成は三〇歳代夫婦の比較的若い核家族世帯が多く、老親を呼び寄せるケースは少なかった。

また、公務員宿舎と電電公社社宅の完成後は、両住宅にも自治会が結成された。つまり、同地域に四つの自治会が混在したことになる。しかし、この状態のままでは、地域の意見の取りまとめに時間がかかり、行政側もそれぞれ個別対応せざるをえなくなる。そこで、市は、四団体が一つの自治会にまとまることを条件に、正式な自治会として認定する旨を伝えてきた。そのことを受けて、四団体の役員は毎晩のように公務員宿舎の水銀灯の明かりの下で協議を重ね、電電公社社宅の自治会を除く三団体が住民組織をまとめる結論に至った。そして、浦添市城間の地名から浦城自治会という名称が決定し、一九七四年（昭和四九）に市の正式な認定を受けることになった。

浦城自治会結成当初の班編成は、公務員住宅が一班、城間住宅が二班、その他の個人住宅が三班となった。その後、浦城公園の上方が四班となった。さらに、国道五八号西側にカーモーター建設計画が浮上した際には、その周辺住民と話し合いを持つ機会が増え、住民運動を展開するなかで、同地域が五班として加わった。ただし、公務員住宅（一班）は



雨のたびに水びたし（浦城地域）
奥本道夫提供

のちに浦城自治会から脱退した。

結成当初浦城自治会の事務所は、初代会長の奥本道夫さんの自宅を使用していた。その後、会員の仲間文男さんが経営する電気店（三原電化堂）のスペースを無償で提供してもらい、自治会役員が店番を兼ねるような間借り状態の事務所となった。三原電化堂の那覇移転が決まったさいには、アパートの一室を借りて習字教室を開いていた知花千代子さんが家主の奥濱真徳さんに協力をお願いし、浦城自治会の事務所が習字教室のスペースを借りることになった。当初は手狭なスペースだったが、一九八三年（昭和五八）に知花さんの習字教室が自宅に移ることになり、自治会が一室を借り受けて現在に至っている。

ところで、浦城地域においては青年会が結成されることはなかったが、これまでに婦人会と老人クラブが結成されている。婦人会は一九七五年（昭和五〇）に結成され、活動は停滞と再開を繰り返すが、二〇〇二年（平成十四）に閉会している。老人クラブ（浦城友の会）は一九九六年（平成八）に結成され、高齢化とともに自治会会員の多くが老人クラブの活動にシフトしている。

今日、浦城地域の子どもたち（移住二世）は成長とともに他出する傾向がある。また、新しいアパートやマンションに移ってくる世帯は、自治会活動にあまり関心を示さないため、入会しないという課題がある。このように、浦添市内の他の自治会と同様に、浦城自治会においても高齢化が進行している。

③牧港ハイツ自治会の形成と地域生活

浦添市における新興住宅地域の特徴の一つとして挙げられるのが、先述した緑ヶ丘や浦城のように、外国人向け住宅の存在である。限定的かつ一時的にせよ、ここでは米軍兵士および軍属・家族との地域生活を成立させる場面も見られ、独自の自治を確立していた地域もある。たとえば、一九七五年（昭和五〇）に結成され一九八一年（昭和五六）に市の正式な自治会として認定された「マチナトポイント自治会」（一九八七年に港川崎原自治会に改称）は、同地域がかつて外国人住宅だったという事情もあり、アメリカ人も入会し



牧港ハイツ自治会事務所
牧港ハイツ自治会提供



浦城自治会親子運動会（1980年）
浦添市立図書館所蔵

第2節 人口の増加と都市形成

ていたという。さらに同自治会のユニークな点は、結成当初、日本語と英語の二ヶ国語で集会や会議が行われていたことにある。

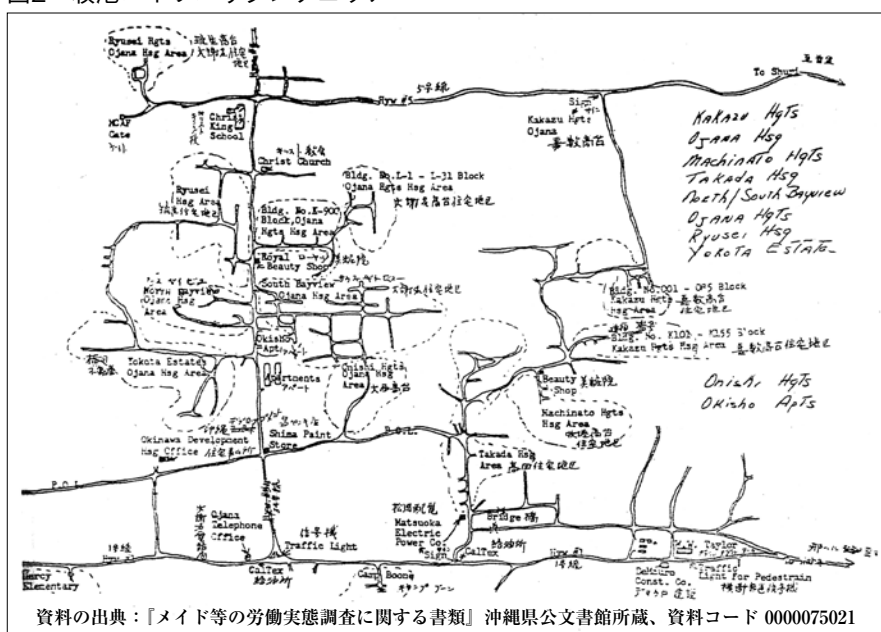
ここで紹介する牧港ハイツ自治会も、かつて外国人向け住宅街であった。牧港ハイツは、一九六〇年代前半に喜屋武建設によって宅地開発が行われ、「マチナトハイツ・ハウジングエリア」という米軍関係者向けの住宅街として誕生した。一九六九年（昭和四四）の「メイド等の労働実態に関する資料」の外国人住宅地図では、「嘉数高台住宅地区」と「高田住宅地区」という二つの外国人住宅地区の間に位置するように「牧港高台住宅地区」と記されている

喜屋武建設を立ち上げた喜屋武隆仁さん（本部村渡久地出身）は、琉球開発金融公庫の宝村信雄総裁の紹介でUSCAR（琉球列島米国民政府）のポール・W・キャラウェイ高等弁務官（一九六一年〜六四年在任）と面会することになり、浦添での外国人住宅建設を直接要請された。それは米軍組織高級将校向けの住宅であり、嘉数高台からパイプラインにかけての見晴らしのいい傾斜地約二万坪を全面開発するという内容だった。

しかし、この大規模な宅地開発は困難を極めた。この傾斜面の地主のほとんどは宜野湾市嘉数区民であり、牧港の地主は三〜四名ほどだった。よって、当時那覇市の崇元寺にあった喜屋武建設から嘉数区の公民館を何度も訪ね、地元有志との協議を幾度となく重ねた。また、この傾斜地が石山のような石灰岩の岩盤だったため、インフラの整備を可能にするためには、國場組火薬部を動員するほどの大がかりな整地が必要だった。さらに、傾斜地の下方には米軍のパイプライン（現在の県道二五一号）が通っていたため、道路の工事許可を得ることに苦慮した。この問題は、宝村総裁がUSCARに働きかけたことによって、道路を開通することができた。だが、やはりこの大規模な開発は財政的に大きな負担となり、高等弁務官の要望よりも縮小して一二〇棟ほどの建設にとどめた¹⁹。

「マチナトハイツ・ハウジングエリア」は、一九六三年（昭和三八）ごろ完成した。当

図2 牧港ハイツハウジングエリア



19

「マチナト・ハウジングエリア」を手がけた喜屋武建設は、一九八三年（昭和五八）に浦添市伊祖に移転している。

時は一棟あたり八〇〇〇ドル〜三万ドルほどの販売価格だった。米軍の高級将校およびその家族はもちろん、外資系企業アメリカ・エンジニアリングや日本のコンサルタント会社も入居した。一九七二年（昭和四七）の「復帰」前後から県民向けの販売や分譲も開始され、外国人の住民と混在するような状況が続いた。

牧港ハイツ自治会結成の契機となったのは、一九七三年（昭和四八）の牧港小学校の開校である。それまで牧港ハイツの子どもたちは、浦添小学校までの険しい道程を三〇分以上かけて登校していた。牧港小学校開校後は通学距離が飛躍的に短縮されたものの、バイパス道路側のハイツ入口と牧港川が交差する橋が脆弱であった。そのためハイツの住民は、通学路の安全確保の必要性から橋梁の建て替えを行政に陳情することになった。この陳情行動がきっかけとなり、事業所を含む一二五世帯をもって牧港ハイツ自治会が結成され、一九七四年（昭和四九）に市の自治会として認定された（現在の世帯数は約一三〇世帯となっている）。自治会結成後も外国人の住民との混在は続いたが、外国人世帯が自治会に加入することは認められていなかった。ただし、近隣関係や地域行事への参加などを介して外国人との地域交流は行われていた。

牧港ハイツは自治会発足当初事務所がなく、会長の自宅を事務所代わりに使用していた。その後、児童公園が隣接する外国人所有の物件を一〇〇〇万円で買い上げることになり、公園と一体になった利便性から、そこを自治会事務所として使用することになり現在に至っている。

牧港ハイツには発足当初から婦人会が結成され活動を展開していた。一九九〇年代中ごろから一時的に活動は停滞するが、近年は「ふれあいサロン事業」²⁰を通して女性部の活動として再び活発化している。また、牧港ハイツでは青年会が結成されたことはないが、子ども会は夏休みの体験学習やハロウィンなど活発な活動を展開している。しかし、子どもたち（移住二世）が進学、就職、結婚等によって他出する傾向にあり、やはりここにも地域住民の高齢化という課題が横たわっている。

牧港ハイツの住民構成は、他の自治会同様に出身地や職業層は多様である。ただし、か

20

地域公民館等におけるレクリエーションや交流に関する浦添市社会福祉協議会の補助事業。市内四〇自治会中、三八自治会が実施している。



牧港ハイツの自治会活動のようす
牧港ハイツ自治会提供



牧港小学校創立3周年記念式典（1975年）
浦添市立図書館所蔵

つて米軍機関高級将校向けの住宅街であったという歴史的背景があり、今日では医師、弁護士、大学教員、パイロット、企業家等の社会層の住民が見受けられるという特徴も有している。牧港ハイツの住宅は、外国人住宅らしく庭先が開放的なつくりとなっている。しかし、近年ではその庭先を囲い込むようにブロック塀を積み上げる住宅も目立つようになっている。

④ 浦添ニュータウン自治会の形成と地域生活

冒頭でも述べたように、一九七〇年代の浦添市は那覇のベッドタウンとして近郊都市化が進み、多くの新興住宅地域を誕生させた。たとえば、一九六九年には住宅供給公社の事業によって仲間の宅地開発が開始され、当時としては大規模な二三〇戸を擁する茶山団地が誕生した。そして一九七二年には茶山団地自治会が市によって認定されている。

しかし、一九七〇年代、茶山団地を上回る大規模な住宅団地として安波茶に誕生したのが浦添ニュータウンだった。浦添ニュータウンは、民間開発業者の琉信（那覇市）によって一九七〇年（昭和四五）から工事が開始され、一九七七年（昭和五二）までに三五九戸を擁する住宅団地を完成させている。この宅地開発や住宅建設および移住者の流入が進むなかで一九七二年（昭和四七）に浦添ニュータウン自治会が結成され、一九七四年（昭和四九）に市の正式な自治会として認定されている。

自治会結成の大きな原動力となったのは女性たちだった。とくにギンネムの刈り取りや地域清掃などの共同作業を通して、近隣関係を築き、地域の情報を共有する主体となった。この共同作業と住民相互の交流のなかで、自治会結成の機運が高まっていた。またニュータウンの女性たちは、浦添小学校の教頭先生から、子どもの教育と健全育成の観点から「『自治会結成』は急務である旨の強い要請」を受けている。²¹女性たちの呼びかけにより一九七二年（昭和四七）の八月には「自治会結成実行委員会」が琉信の工事現場事務所で行われ、会則草案等が作成された。また、四〇〇五〇世帯単位で班編成を行い、八つの班に区割りした（世帯数の増加に伴い一九七八年に九班に再編された）。そして、同年



浦添ニュータウン公民館創立10周年記念祝賀会
(1982年) 浦添市立図書館所蔵

21 二〇周年記念事業実行委員会（一九九三）『浦添ニュータウン自治会創立二〇周年記念誌』、浦添ニュータウン自治会 二五頁

九月に三一八世帯の参加をもって浦添ニュータウン自治会が誕生した。

ニュータウン自治会では、結成年から浦添小学校のグラウンドで班対抗の運動会を開催した。一九七三年（昭和四八）からは石置き場となっていた空き地で盆踊り大会を開催し、花火を打ち上げた。祭りのさいは近所の理髪店から電気を引いて使用させてもらい、店舗のブレーカーが落ちるようなハプニングも起こった。

宅地開発の途上にあつた一九七〇年代のニュータウンは、生活環境の面でいくつかの問題を抱えていた。同地域は、浦添市役所に近いものの森の緑が多く残り、原野と畑が広がり、墓地が点在するような風景だった。その街路は未舗装のままだったため、雨天時にはぬかるんで泥だらけになり、屋敷地の車庫内に泥水が流れ込むこともあった。また、各家庭が排出する生ゴミ（残飯）の処理をめぐる問題も抱えていた。楚南幸子さん（宮古島出身）は、夫婦で営んでいた安謝の自動車修理工場から大量の一斗缶を運び込み、蓋を開け、各家庭に配布した。当時は、その一斗缶の残飯を街路の電柱やブロック塀に吊るしておく、養豚業者が回収してくれた。

ニュータウン住民の出身地や職種は多様だが、本編聞き取り調査では公務員、学校教員、警察官、銀行員などの社会層が比較的多いという証言があつた。また、安波茶や仲間から他出した次男・三男の世帯もみられるという証言がある。入居開始当初は三〇歳代の夫婦からなる世帯が多くを占め、働き盛りで幼い子どもを抱えている家庭が多かった。住民は、仕事や子育てで多忙ななかにあつても「新天地」での地域社会づくりに力を注いだ。とくに、子育てしやすい地域づくりのために、子どもたちが出入りする空き地の草刈り作業、児童生徒会（一九七六年結成）や子ども会（一九八〇年結成）活動の世話など、週末や休日を利用して地域活動に勤しんだ。

子育て世代が多くを占める一九七〇年代のニュータウンでは、当時の新興住宅地域に共通してみられる課題、すなわち子どもたちの幼稚園への就園問題が持ちあがつた。本編聞き取り調査では、ニュータウンの住民が大平や仲間の幼稚園に入園をお願いしても断られたという証言があつた（「寄留民は入れない状況があつた」）。また、與那嶺良子さん



保育園から浦添ニュータウンを望む（1972年頃）パンダ保育園提供

第2節 人口の増加と都市形成

（那覇市上之蔵出身）の家庭では、前住地となる那覇市識名の幼稚園まで子どもの送り迎えをしていた。

同問題について、自治会は又吉盛一市長（当時）に直接かけあい陳情を行ったが、改善されない状況が続いた。そこで、他の新興住宅地域のアイデアを参考に、安波茶公民館のスペースを借りて、保育士の有資格者を配置し、「幼稚園」の機能を整えた。ちなみに、当時の安波茶自治会の西原清会長がニュータウン自治会結成実行委員会の世話人であったという縁もある。一九七四年（昭和四九）に浦添幼稚園が開園されるまでの約二年間、ニュータウンの子どもたち二〇余名が安波茶公民館の「幼稚園」に通う状態が続いた。

このようにニュータウンでは、子どもを介して、あるいは子育て環境をめぐる活動を通して、女性たちが日常的な活動の機動力となり、地域社会の結び目を担った。その日常的な交流の中で情報を交換・共有し、役所等への要望や交渉さえ独自に実行していた。たとえば、ニュータウン入口へのバス停設置を要望するため署名を集め市やバス会社と交渉し、ときには新聞料金をめぐって新聞社にかけあったりした。また、日用品の共同購入で助け合い、地域の緑化活動を展開した。さらに、就学前の子どもを抱える家庭では保育園の設置が喫緊の課題だった。これも女性たちが意見を取りまとめ、市に要望し、保育園開設の活動を展開した。その結果、一九七二年（昭和四七）、パンダ保育園の開園を実現させている。ちなみに、ニュータウン自治会の公民館が建設されるまでの四年間、パンダ保育園のスペースで自治会の総会、評議員会、役員会などが開催されている。以上のような女性たちの顕著な活動は、一九七四年（昭和四九）の婦人会結成に結実している。

一方、男性たちは自治会組織の役員体制の中心を担い、事業計画や予算の捻出等に尽力した。とくにニュータウン内への侵入窃盗事件が頻発した一九七三年（昭和四八）には、二〇人単位で三二組の自警団を編成し、深夜の一時から明け方五時まで毎晩パトロール活動を行っていた。その後、街路に防犯灯を設置するさいにも、住民独自で費用を捻出し、配電会社との交渉の末に電柱への防犯灯設置を実現させている。²²



パンダ保育園の園児たち
（1972年頃）パンダ保育園
提供

22

二〇周年記念事業実行委員会編
（一九九三）三三―三四頁

ところで、ニュータウンにおける公民館建設は、自治会結成当初からの重要課題だった。自治会は市に対し公民館建設費用の補助を再三要望してきたが、打開策が見出せない状況が続いた。ところが、一九七四年（昭和四九）、ニュータウンに近い場所現てだこホール付近のゴミ焼却場問題が浮上したところから、事態は思わぬ展開をみせることになった。当時ゴミ焼却場の悪臭と煤煙は、周辺住宅街で洗濯物が外に干せなくなるほどの影響を及ぼし、浦添市の大きな問題となっていた。その後、現在の市民会館裏手にゴミ破碎工場を建設するという打開策が見出されたが、これも周辺自治会から同意を得なければならぬ事態となっていた。そこで、市の方からは、ゴミ破碎工場建設への同意を前提に、公民館建設の費用補助に協力する旨の条件が提案された。その後、ニュータウン自治会による環境影響調査と会員間での討議が重ねられ、破碎工場建設の同意契約に達している。この作業と同時に進行しながら、公民館建設委員会が設置され、市との交渉が開始された。その結果、公民館建設費用約一六〇〇万円のうち八〇〇万円の補助を獲得し、琉信から建設用地を借りた上で、一九七六年（昭和五一）の公民館落成へと至っている。²³

ニュータウンでは一九七七年（昭和五二）に老人クラブ（若草会）が結成されている。ケースとしては少ないものの、老親とともに移住した世帯や、のちに老親を呼び寄せた世帯があった。現在、老人クラブの構成員は、老親の世代から移住一世の世代に代わり活動を展開している。一方、一九八六年（昭和六一）に結成された青年会は二、三年の活動後に停滞した。このように地域住民の高齢化が進行しており、移住二世等の若い世代が他出し、地域に定着しない傾向がある。この問題の一端には、ニュータウン住民のほとんどが借地契約のままであるという現状がある。つまり、借地状態のままでは住宅の増改築を行うことができず、二世帯同居のような住宅が造れないという課題がある。

今日、ニュータウンの周辺は、市立図書館、美術館、そしてだこホールなどの文化施設が多く見られる。文化の発信地に近いニュータウンは、二〇〇八年（平成二〇）、東京大学と九州大学の調査による「世界のすてきなまち・一〇〇選」に選出されている。

ここまで、一九七〇年代に誕生した新興住宅地域について、緑ヶ丘、浦城、牧港ハイ



浦添市役所から牧港方面をのぞむ（2012年）浦添市国際交流課提供

23

二〇周年記念事業実行委員会編
（一九九三）三三―三四頁



浦添ニュータウン公民館（1983年）
浦添市立図書館所蔵

ツ、浦添ニュータウンの各事例から自治会形成や地域活動を中心に概観してきた。これらのケースは「古村落」や「新村落」への移住とは異なり、地域の生活基盤整備から住民の組織化まで、地域の住民自治を基礎から作り上げなければならない状況にあった。むしろ、このようなコミュニティづくりの過程があったからこそ、住民間の紐帯と共同性を強固なものにしたといえよう。

また、新興住宅地域の特徴として、子育て世代が多くを占めていたという事情が関連していたことも挙げられる。とくに幼稚園や小学校への就園・就学上の問題をはじめ、生育環境の整備に関わる活動は地域に対する帰属意識と共同性を高めていく重要な要素となっている。そのさい地域の情報共有や問題提起などの役割を担った主体が女性たちだった。一方、新興住宅地域に限られたことではないが、自治会組織の役員層として行政への陳情・要請・交渉など形式的な政治行動の役割を担った主体は男性たちだった。

さらに、浦添市における新興住宅地域のユニークな特徴として挙げられるのが、外国人向けの住宅の存在である。外国人住宅の建物やインフラがそのまま移住者の受け皿となり、外国人住民と混住していたケースが少なくない。また一九七二年（昭和四七）以降は、外国人住宅に自衛隊員とその家族が入居したというケースも見られた。

浦添市において一九七〇年代に誕生した新興住宅地域は、今日、加速度的な高齢化の問題を抱えている。それは、同地域内の各世帯が同じような家族サイクルとなってしまうことに起因している。つまり、同じような年齢層の、同じような規模の家族（核家族）がほぼ同じ年代に入居を開始しているため、ある時期になるとそのエリアが一気に高齢化してしまうという現象である。その背景として、移住二世などの若い世代が他出傾向にあるということや、自治会に加入しない世帯の増加にともなう地域における世代間交流の場が減少していることも関連しているものと思われる。（桃原一彦）

【参考文献】

- 二〇周年記念事業実行委員会、一九九三年、『浦添ニュータウン自治会創立二〇周年記念誌』、浦添ニュータウン自治会。
- 字誌編集委員会、一九九五年、『牧港字誌』、浦添市牧港自治会。
- 石原昌家、一九八六年、『郷友会社会―都市のなかのムラ』、ひるぎ社。
- 浦添市史編集委員会編、一九八七年、『浦添市史 第七巻資料編六・浦添の戦後』、浦添市教育委員会。
- 記念誌編集委員会、一九九三年、『創立二〇周年記念事業緑ヶ丘自治会館落成記念誌』、浦添市緑ヶ丘自治会。
- 『浦城自治会 創立三〇周年記念誌』二〇〇五年、浦城自治会。

第三節 いくつもの「シマ」をもつ人びと

一 移住者たちの浦添

はじめに

一九五〇年代（昭和二五）から始まった牧港補給地区の建設や那覇市の都市化の影響により早い時期に浦添に転入してきた人々（以下「移住者」という）は、その後、浦添に定住し、政治・経済・文化・教育等あらゆる分野で活躍し、現在の浦添市の礎を築いてきた大きな力である。

ここでは、一九五〇年代から一九八〇年代に浦添へ移住してきた者を対象に実施した聞き取り調査やアンケート調査をもとに、いくつもの「シマ」¹を持つ人々が浦添に定住した経緯や地域との関わり等を明らかにし、移住者の視点から戦後浦添の変容を見てみたい。

（一）戦後の浦添の動きと人口流入

急激な人口集中²は、浦添の風景を純農村から都市へと大きく変容させた。また、産業構造も農業を中心とした第一次産業からサービス業を中心とした第三次産業へと大きく変わっていった。

一九五〇年（昭和二五）頃から、米軍基地が浦添の西海岸沿いに建設されたことによって、いち早く具志川市（現うるま市）や奄美大島などから多数の移住者が、屋富祖地域に住みついた。彼らのために貸住居や商売を始める人々が増えていった。そして、屋富祖一帯には飲食街や映画館商店が立ち並び、屋富祖商店街を形成していった。

一九六〇年（昭和三五）頃には、旧一号线（現国道五八号）沿いの城間から港川、牧港一帯に、米軍人関係者やフィリピン人、華僑らが商売を始めるために移住し、いわゆる牧港外人商社街（マチナト・コマーシャル・エリア）を形成した。また、軍人将校やその家族を対象にした外人住宅が牧港や港川一帯に建設され、一種の擬似植民地的な外国人の居住地が形成されていった。

1

沖縄の方言で、「シマ」ということは、文字通りのシマ（島＝アイランド）を意味するだけでなく、小さな村落をさすことばでもある。村落を表すことばとして「ムラ」「ウラ」「クダ」などもあるが、シマはムラよりも古い呼び方と言われている。かつての村落は、村落内での婚姻率が極めて高く、自律的・閉鎖的な社会であった。数十戸の小さな村落でも、独自の祭祀行事を持ち、地縁・血縁の絆で強固に結びついていた。シマはそれぞれに共有地を持ち、村落を創立した祖先神や超自然を崇める聖域（御嶽）を中心に発展していった。シマごとに異なる方言を話し、伝説と歴史を引き継いだ社会的性格を共有するものであった。

沖縄のシマは、生まれた土地への愛着新や執着心のシンボルとして、シマウタ（島唄）やシマザキ（島酒）など、シマごとに多彩な伝統文化を持つ。反面、人々のシマへのこだわりは、シマの外に対する排他性を時としてもつこともある。

2

国勢調査によると、浦添の人口は一九五〇年（昭和二五）一万一九一〇人、一九六〇年（昭和三五）二万四五二二人、一九七〇年（昭和四五）四万二七六八人、一九八〇年（昭和五五）七万二八二二人と驚異的な速さで増加している。特に、一九五〇年代は牧港から勢理客にかけての西部地域、一九六〇年代は伊祖・大平・内間の中部地域、一九七〇年代は安波茶・前田をはじめとする東部地域の人口増加率が著しく高い。（『浦添市史』

その後、旧一号線の道路整備拡張や宮城・仲西・勢理客にかけての商店街の形成、勢理客の埋立地の商工業地形成、勢理客から内間一帯にかけての住宅地の形成により、多くの移住者が入ってきた。さらに、市の内陸部には、琉球土地開発公社や民間デベロッパーによる比較的大規模な住宅開発（三〇〇～五〇〇戸）と国家公務員住宅や県営住宅、市営住宅、公社住宅等の建設、市の積極的な都市基盤整備事業と土地区画整理事業、国道五八号や国道三三〇号、パイプライン通り沿いの中高層の建造物がスプロールの建設され、多くの移住者が集中することになった。

復帰後には、国道五八号沿い一帯のマンションやアパート等の中高層住宅には、県外からの商社マンや営業マンが移住してきた。国道三三〇号沿いの中高層住宅には、浦添市外から多くの人々が移住してきた。さらに、市の中央から東地区にかけて市の区画整理事業による一戸建て住宅やアパート群、旧集落（西原・沢岬・前田）内の空き地の宅地化やアパート建設が進んでいる。

一方、移住者の浦添市内における移動現象も見られ、移住者の様相は一段と複雑化している。

（二）自治会組織の分類

浦添市は、大量の移住者を受け入れたことによって、旧来からの住民と新しい住民がきわめて複雑に入り組んだ社会構造を形成している。住民構成におけるこのような混在化や生業の変化によって、伝統的な村落組織が大きく変容していった。新旧住民間の関係、自治会組織への参加の形態等も変化していった。

二〇一四年（平成二六）現在、四〇の自治会があるが、それぞれの自治会の設立の歴史的・社会的な背景は多様である。『浦添市史』では、各自治会を、それぞれ集落の成立背景、住民構成、加入規定、地域区分や下位組織、事業内容や予算などから分析し、浦添市の都市化にみる自治会の在り様を五つの型に分類している。³

第七巻 資料編六 浦添市教育委員会、一九八七年、九二頁

3

石垣みき子「第四章 農村から都市へ」『浦添市史』第七巻 資料編六 浦添の戦後（浦添市教育委員会、一九八七年）一九七～一九九ページ。

①戦後転入してきた新住民によって構成される「新住民型」
 ②俗にいう屋取村落で、成立は比較的新しいとはいえ、古い村落の有り様が現在の自治会に引き継がれている「新村落型」

③成立の古い村落をひきつぐ自治会の中でも、新旧住民が一体化し旧来の組織の衰退がめだつ「解体型」

④旧住民を中心に構成され、かつ旧来の伝統が濃厚に引き継がれている「地元型」

⑤新住民を自治会に包摂しながらも旧住民のみの組織を維持している「二重組織型」

筆者は、「新住民型自治会」を成立時期と構造上から、さらに四つの型に分類した。

(1) 一九七〇年代初期の頃の比較的大規模な開発団地が自治会へと発展した「初期団地型」

(2) 一九八〇年代の比較的小規模な開発団地が自治会へと発展した「民営団地型」

(3) 国家公務員宿舎をはじめ県営団地が自治会へと発展した「公営団地型」

(4) 市の土地区画整理事業によって新たに自治会として発展した「区画整理型」

これらの型を現在の四〇自治会に当てはめると、次のようになる。

	新住民型			
	初期団地型	民営団地型	公営団地型	区画整理型
新村落型	広栄、茶山、緑ヶ丘、浦添ニュータウン、浦添グリーンハイツ	浦城、牧港ハイツ、港川崎原、上野、安川団地、当山ハイツ、浦添ハイツ	浦西、前田公務員宿舎、マチナトタウン、神森、浦添市街地住宅、県営経塚団地、県営沢岬高層住宅	浅野浦、陽迎橋
解体型	港川、大平、当山、経塚			
地元型	屋富祖、城間			
二重組織型	仲間、前田、西原一区、西原二区、沢岬、牧港、伊祖			
	小湾、内間、仲西、宮城、安波茶、勢理客			

(三) 住民の出身地にみる地域の特徴 ―平成十五年度調査による考察―

「高齢者の生活行動実態調査」は、浦添市の高齢者に対し「効果的な高齢者支援策の充実に図るため、高齢者の日常生活や社会参加などの実態等を把握する」目的で、二〇〇三年（平成十五）十二月十六日から二〇〇四年（平成十六）二月二〇日の間に実施されたものである。要介護認定を受けていない六五歳以上の市民から二三〇〇人を無作為に抽出し、アンケート調査を行った。結果、男性八一一人、女性九九四人の計一八〇五人から回答が得られ、回答率七八・五パーセントの高い回収率であった。

二〇〇三年（平成十五）時点で六五歳以上の人は一九三八年（昭和十三）生まれで、中学校卒業時は一九五三年（昭和二八）、高校卒業時は一九五六年（昭和三一）になる。彼らが中学・高校を卒業した時期は、ちょうど多くの人々が職や住まいを求めて浦添へ流入した時期と重なる。

したがって、二〇〇三年調査時に六五歳以上の市民へ実施したこのアンケート調査は、戦前からの浦添に住んできた市民と戦後自らの意思で浦添へ移住してきた市民を対象にしたものと言えるだろう。新旧住民で成り立つ浦添の特徴を、このアンケート集計結果に基づいて、自治会ごとに分析する。

① 出身地（図1参照）

生まれてからずっと同じ集落に住んでいる「地元」の多い地区は、西原二区、西原一区、前田、牧港、仲間、伊祖、安波茶、経塚の自治会である。

生まれはこの集落であるが、しばらく他の集落もしくは市外・県外で暮らし、また帰ってきた「一時転居」の多い地区は西原一区、当山、城間、大平、伊祖の自治会である。

生まれは浦添以外の地域で、今の集落へ越えてきてそれ以来住んでいる「移住者」の多い地区は茶山、前田公務員宿舎、港川崎原、浦西、安川団地、緑ヶ丘、神森、上野、グリーンハイツ、牧港ハイツ、ニュータウン、広栄、小湾、当山ハイツの自治会である。これらいわゆる新興住宅地を除くと、移住者の割合が高い自治会は、勢理客、仲西、港川、沢岬、宮城である。これらの地域は、米軍基地建設に伴って、早い時期に旧一号线（現五

八号)沿いに移住してきた人々の多い地域である。

② 居住年数 (図2参照)

一〇年未満の多い地区は、城間、当山、仲西、沢岬、経塚、浦西団地の自治会である。

一〇～二〇年の多い地区は、浦西団地、港川崎原、安川団地、当山ハイツ、浦城、浦添ハイツ、当山、伊祖、沢岬の自治会である。

二〇～二九年の多い地区はグリーンハイツ、浦添ハイツ、安川団地、当山ハイツ、マチナタウン、浅野浦、小湾、牧港ハイツ、沢岬、上野、安波茶の自治会である。

三〇年以上の多い地区は茶山、神森、ニュータウン、屋富祖、牧港、宮城、大平、広栄、経塚、安波茶、小湾の自治会である。

③ 出身地の内訳 (図3参照)

移住者の出身地を詳しく見ると、沖縄本島の南部、北部、宮古、中部、県外、八重山の順となっている。中でも宮古出身者の割合が高いことは特筆される。

北部出身者が多い地区は、大平、安川団地、浦西団地、港川崎原、牧港、上野、浦城、グリーンハイツの自治会である。北部出身者の多い地域は、市の中央部で、第二期の創設期の民間デベロッパーの建設によって形成された地域である。

中部出身者が多い地区は西原一区、西原二区、港川崎原、当山ハイツ、港川、神森、仲間、牧港ハイツ、城間、浅野浦、当山、宮城の自治会である。中部出身者の多い地域は、市の中央を走るパイプライン線沿いの南西部と東部地区である。

南部出身者が多い地区は広栄、西原二区、浦添ハイツ、港川、ニュータウン、経塚、緑ヶ丘、安川団地、宮城の自治会である。南部出身者の多い地域は、市の南西部地区、中央地区、北部地区、東部地区と広範囲にわたっているが、南部出身者の多い地域は、第二期から第三期にかけて転入してきた移住者の多い地域である。

離島出身者の多い地区は浦添ハイツ、当山ハイツ、小湾、グリーンハイツ、仲西、安波茶、茶山、西原一区、港川崎原、仲間、勢理客の自治会である。離島出身者の多い地域は、市の南西部地区と中東部、南部地区、東部地区に分布している。

第3節 いくつかの「シマ」をもつ人びと

宮古出身者の多い地区は勢理客、神森、内間、西原一区、宮城、上野、浦城、港川崎原の自治会である。宮古出身者の多い地域は、市の南西部地区と北部地区、東部地区である。宮古出身者の多くは第二期の創設期に転入してきた移住者が多いことが分かる。

八重山出身者の多い地区は茶山、浦添ハイッ、グリーンハイッの三自治会である。八重山出身者の多い地域は、市の中央部に集中している。

県外出身者の多い地区は、伊祖、港川、牧港ハイッ、上野、牧港、前田、西原二区、沢岬、屋富祖、浦添ハイッ、城間の自治会である。国道五八号沿いの港川一帯の地域は、中高層のマンションやアパートの建造物が多く、県外出身者の割合が高い地域である。

④その他

八割近くの移住者が一戸建ての持家であり、また居住年数が長くなる程、一戸建ての持家は多くなるが、居住年数の新しい移住者は民間のアパートなどの借屋が多くなっている。

次に、行政区別にみると、市の西部地域の国道五八号沿いの屋富祖一帯は、高齢化率が高く、一人暮らし移住者が多い。また、初期大型団地の移住者は、早い時期に浦添市に住居を求めて転入してきたことから戸建て持家が多いことなどがわかった。

(四) 移住者から見た浦添―平成二六年度アンケート調査による考察―

では、戦後浦添へ移住して来た人々は、浦添に対してどのような思いを抱き、浦添および出身地とどのように関わっているのだろうか。その実態の一端を捉えるために、次のようなアンケート調査を実施した。

調査方法

調査の対象地域は、移住者のみで形成されている二二自治会から、「初期団地型」の広栄⁴、茶山⁵、浦添ニュータウン⁶、浦添グリーンハイッ⁷、緑ヶ丘⁸の五自治会と「民営団地型」の牧港ハイッ⁹、港川崎原¹⁰、上野¹¹の三自治会、「公営団地型」の浦西¹²の一自治会、「区画整理型」の浅野浦¹³の一自治会の計一〇か所を選定した。対象者は、各自治会に一〇人程度、約一〇〇人とした。各自治会長を通して実施および回収を依頼した。全体で七二人分の回

4 宅地造成された字西原の阿部原一帯に県内各地から移住者が集まってできた自治会。一九七一年（昭和四六）に市内二〇番目の自治会として結成された。

5 一九七〇年（昭和四五）に「琉球土地住宅公社」の土地付き分譲住宅として、県内第一号団地として誕生した。

6 一九七〇年（昭和四五）から工事が開始され、一九七七年（昭和五二）までに三五九戸を擁する住宅団地が完成した。この宅地開発や住宅建築および移住者の流入が進むなかで一九七二年（昭和四七）に浦添ニュータウン自治会が結成され、一九七四年（昭和四九）に市の正式な自治会として認定されている。市の中心に位置し、複数の文化施設で構成されるカルチャパークゾーンに隣接する閑静な地域である。

7 一九七二年（昭和四七）～一九七四年（昭和四九）に民間企業によって開発された新興住宅地である。一九七六年（昭和五一）に自治会が設立し、翌一九七七年に市内二六番目の自治会として認定された。

8 伊祖城跡を仰ぎ見る新興住宅地で、前身を「むつみ会」と称し、一九六九年（昭和四四）に有志でスタートした。その後一九七二年（昭和四七）に緑ヶ丘自治会になった。

9 戦後外人向け賃貸住宅として建設され、原野から住宅街に大きく変貌した。一九七〇年代から一般住宅に分譲開始された。一九七五年（昭和五〇）に市内二五番目の自治会となった。

図1 行政区別居住経緯分布

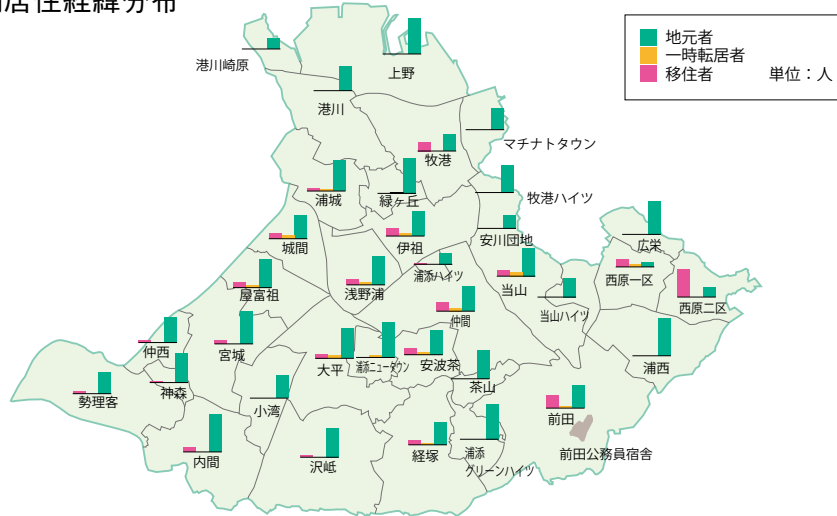


図2 行政区別居住年数分布

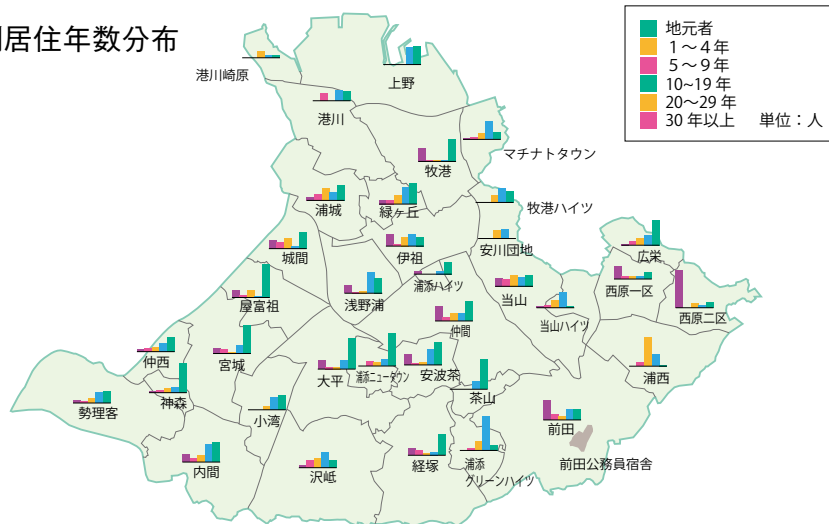
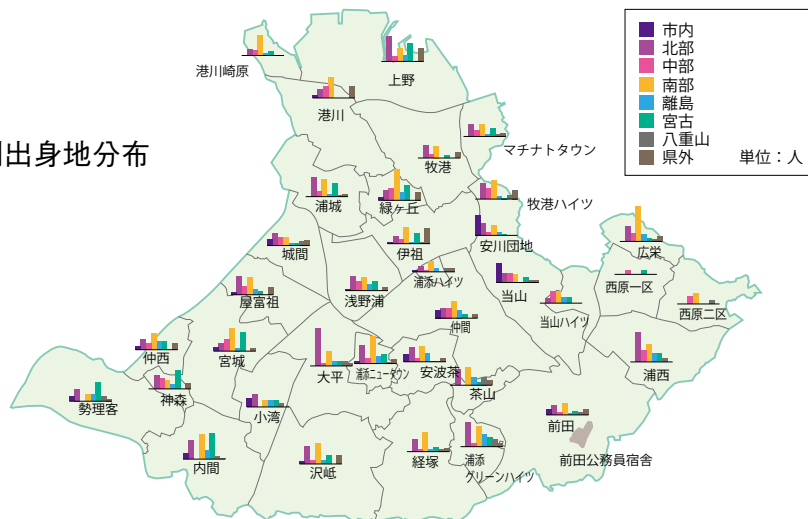


図3 行政区別出身地分布



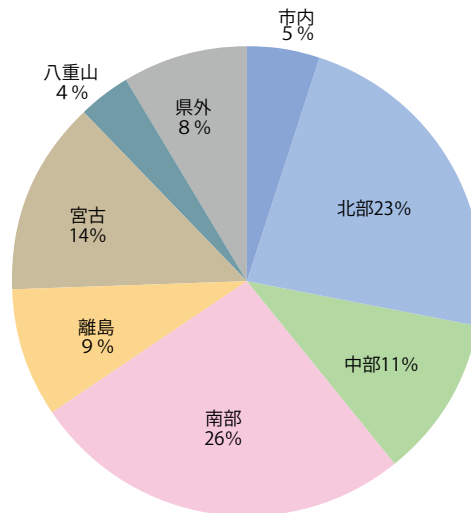
「高齢者の生活行動実態調査」にみる浦添在住者の出身地（平成15年度実施）

「高齢者の生活行動実態調査」（平成15年度実施）によるアンケートをもとに前津政廣作成。

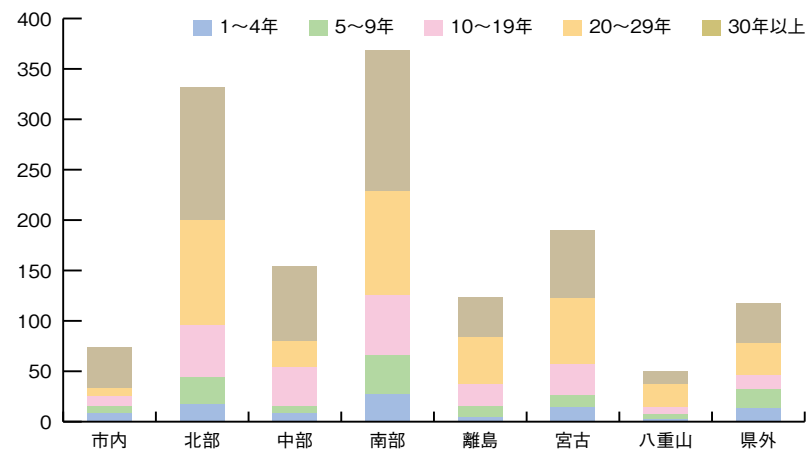
対象：65歳以上の浦添市民、回答数：1805人

出典：『浦添市介護保険利用者等高齢者実態調査』浦添市介護長寿課、2004年

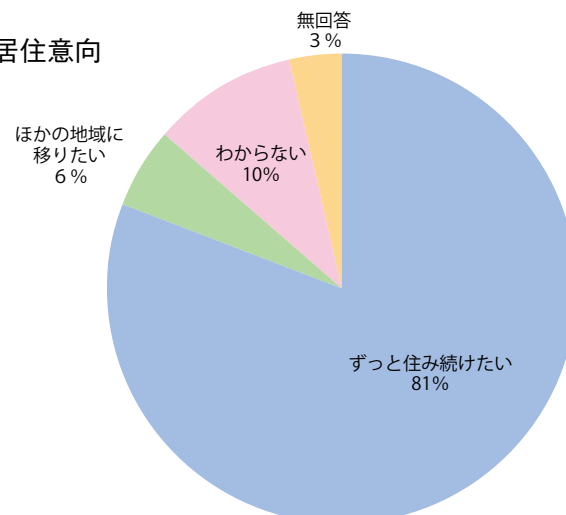
グラフ1 出身地別割合



グラフ2 出身地別居住年数



グラフ3 今後の居住意向



答を得られた。

調査内容

- ① 基本項目として、性別、年齢、出生地、職業の項目を設定した。
- ② 浦添へ移住した時の状況を明らかにするために以下の項目を設定した。
移住時期、移住時の年齢、移住の主な理由、浦添を選んだ理由、一緒に移住した人、浦添に移住する際頼った人、最初の浦添への居住地、最初の居住形態。
- ③ 浦添へ移住した後の状況を明らかにするために以下の項目を設定した。
浦添に住まいを定めた理由、最初の就職・年代、結婚（有無・年代）転職（有無・年代）家屋の購入（有無・年代）、移動（有無・年代・年齢・家族構成・理由）
- ④ 自治会活動を明らかにするために、加入状況、加入のきっかけ、活動への参加状況、役員経験の有無と活動内容、加入しての感想を尋ねた。
- ⑤ 出身地との関わりを明らかにするために、出身地の年中行事や親族行事への参加状況を質問した。さらに、郷友会（加入の有無・加入時期・郷友会名・参加場所・きっかけ・活動への参加状況・役員経験の有無と活動内容・加入しての感想）についても尋ねた。
- ⑥ 浦添市における現在の活動について明らかにするために、生年祝いや伝統行事等の市民活動への参加状況、家族との会話に用いることば、親族行事への参加状況、現住地域への愛着の有無の項目を設定した。
- ⑦ 最後に、浦添市に移住してよかった点・感じたことを尋ねた。

調査結果

① 基本項目

(1) 性別

男性が四六人、女性が二六人で男性が約二倍となっている。

(2) 年齢

10

崎原（サチバル）は、海に突出した土地の意。かつての外人住宅が払い下げられ、邦人が住み始めてできた集落である。当初は、字マチナトポイント自治会として活動し、米国人も多かった。初代会長は日米同時通訳で会議を行った。一九八七年（昭和六二）に港川崎原自治会と改称した。

11

かつてはイヌバルと称していたが、明治期の土地調査により漢字を当てはめて上野原とした。一九六五年（昭和四〇）頃から埋め立て工事が始まり、一九七一年（昭和四六）頃から土地分譲が始まった。一九七二年（昭和四七）にまちな自治会として活動を始め、一九八一年（昭和五六）に市内三〇番目の自治会と認められた。

12

沖縄県土地開発公社の分譲住宅建設に伴ってできた住宅街である。一九八五年（昭和六〇）、市内三三番目の自治会として成立した。

13

浦添市の中央部に位置している。美術館、図書館、てだこホール、運動公園等が隣接し、利便性、住環境に恵まれた地域である。一九七六年（昭和五一）に自治会が創設された。

第3節 いくつかの「シマ」をもつ人びと

六五歳未満が十一人、六五～六九歳が二人、七〇～七四歳が二〇人、七五～七九歳が七人、八〇～八四歳が八人、八五歳以上が二人となっている。七五歳未満が約七割を占める。

(3) 出生地

沖縄本島内四四人（浦添市三、国頭村二、大宜味村四、今帰仁村三、本部町四、名護市三、宜野座村一、金武町一、具志川市（現うるま市）一、石川市（現うるま市）一、読谷村一、沖縄市二、那覇市十三、南風原町一、具志頭村（現八重瀬町）一、玉城村一、糸満市二）、本島周辺離島六人（伊是名村一、伊江村一、うるま市勝連（津堅島）一、渡嘉敷村一、久米島町二）、宮古五人（宮古島市四、伊良部村一）、八重山七人（石垣市四、竹富町黒島一、与那国町二）、県外八人（北海道二、東京都二、静岡県一、岡山県一、鹿児島奄美市二）、国外二人（台湾一、フィリピン一）

浦添の移住者の出身地は、北は北海道から南は与那国まで、さらに国外にまで及ぶ多様な地域であることが分かった。

(4) 現在の職業

現業が十二人、退職（無職）が三八人、主婦五人、その他十七人となっている。移住者のほとんどが高齢者ということもあり、退職（無職）が半数以上を占めている。

② 浦添市に移住した時の状況

(1) 浦添市に移住した時期は、一九五〇年代が四人、一九六〇年代が六人、一九七〇年代が二十九人、一九八〇年代二十七人、一九九〇年代が四人、二〇〇〇年代が一人となっている。浦添に移住した時期は、一九七〇年～一九八〇年代が多いことが分かった。

(2) 移住時の年齢は、二〇代が三人、三〇代が三人、四〇代が十二人、五〇代が四人、六〇代が一人となっている。浦添市に移住した年齢は、二〇代～三〇代の比較的若い頃に移住したことが分かる。

(3) 移住した主な理由は、就職が十四人、結婚が十六人、その他が四二人となっている。その他には住居を購入した為との回答が多く、就職や結婚、住居購入のために浦添へ移住し



小湾（1962年）
浦添市立図書館所蔵



屋富祖、現仲西中学校付近（1959年）
浦添市立図書館所蔵



勢理客城門原埋立地（1958年）
浦添市立図書館所蔵

第3節 いくつかの「シマ」をもつ人びと

たことが分かった。

(4) 浦添を移住地を選んだ理由には、友人・親戚に勧められた、親戚が多く住んでいた、仕事のため・転勤地のため、新築購入、南部・中部に便利と考えたから、交通の利便性・将来の発展、住宅地として最高と思った、等が挙げられた。仕事のため、交通の利便性、親戚を頼っての移住、が主な理由である。

(5) 浦添と一緒に移住した人は、有りが五九人（続柄は配偶者が五三人、子供四人、その他一人）、無しが十三人である。浦添の移住者は、多くの場合、配偶者や子供と一緒に移住していることが分かる。

(6) 浦添に移住する際に誰かを頼って移住したのかを尋ねた結果、有りが三一人、無しが四〇人であった。浦添の移住者は、約四割の人が誰かを頼ってきたことが分かった。その内訳を見ると、親が九人、兄弟が十一人、先輩三人、親戚五人、その他八人となっている。親兄弟を頼って浦添に移住したことが分かる。

(7) 浦添に移住した時の居住形態は、間借りが十九人、同居十七人（内訳は親戚十五人、兄弟二人）、一人暮らし八人、その他十七人である。浦添の移住者は、間借りや親戚との同居が多いことが分かった。

③ 浦添市へ移動した後の状況

(1) 浦添へ移住した時に就職していた者は五五人、していなかった者が五人、その他が十二人であった。浦添へ移住した時にはほとんどの移住者が就職をしていたことが分かった。

(2) 浦添へ移住したときに結婚していた者は五四人、していなかった者が一人、その他一〇人となっている。浦添へ移住した頃にはほとんどの移住者が結婚していたことが分かった。

(3) 浦添へ移住した後他の職へ転職したかどうかを尋ねた結果は、有りが二六人、無が三一人、その他八人であった。その転職場所は、市内が五人、市外が十八人で市外が三倍以上であった。転職時期は、一九六〇年代が五人、一九七〇年代七人、一九八〇年代が五



上港川地区（1970年代）
浦添市立図書館所蔵



城間から大平に向かう道（1961年）
浦添市立図書館所蔵

第3節 いくつかの「シマ」をもつ人びと

人、一九九〇年代が四人、二〇〇〇年代が三人であった。

(4) 家屋の購入は、有りが六二人、無しが五人、その他が五人である。ほとんどの移住者が家屋を購入している。その購入時期は、一九六〇年代が五人、一九七〇年代が二人、一九八〇年代が十三人、一九九〇年代が四人、二〇〇〇年代が一人である。一九七〇年代、一九八〇年代の購入が多い。

(5) 浦添へ移住した後の移動の有無は、有りが二二人、無しが三五人、その他が十二人である。浦添へ移住した後は、移動無しがやや多い。移動時期は、一九五〇年代が一人、一九六〇年代が六人、一九七〇年代が十二人、一九八〇年代が六人、一九九〇年代が四人、二〇〇〇年代が一人である。一九六〇年、一九八〇年代を中心に市内移動が見られる。市内移動時の年齢は、二〇代が七人、三〇代が十二人、四〇代が六人で、三〇代が最も多い。

④自治会活動について

(1) 自治会への加入状況については加入が六二人、未加入が七人、その他が三人となっている。ほとんどが自治会に加入している。

(2) 自治会への加入時期は、一九五〇年代が一人、一九六〇年代が六人、一九七〇年代が二人、一九八〇年代が二二人、一九九〇年代が四人、二〇〇〇年代が二人となっている。自治会への加入時期は、一九七〇年代、一九八〇年代に集中している。

(3) 自治会加入のきっかけは、多くの人が加入は当然だと思ったと回答した。住まいを定めたからには地域の一員として自治会活動に参加し、地域の人々と交流し地域に溶け込みたいという思いが移住者に共通している。

(4) 自治会活動への参加状況を聞いてみると、自治会活動に参加するが四九人、時々参加するが十四人、参加しないが四人、その他五人となっている。浦添の移住者は、自治会活動に積極的に参加している様子が分かる。

(5) 自治会役員の経験の有無は、役員の経験有りが三八人、無しが十九人、その他が七人である。多くが役員を経験しており、自治会活動に積極的に参加し、協力的である様子が窺える。



城間、オリオンビール付近（1970年）
浦添市立図書館所蔵



茶山団地の整地（1968年頃）
浦添市立図書館所蔵

(6)自治会活動に参加してよかったこととして、情報・喜びが多い、地域の友人が多くなった、地域住民との交流・親睦、営業だった為に地域の方々に大変お世話になって感謝している、お互い助け合える仲となる、子供が小さい時は地域の方々に顔を覚えてもらい安心して遊ばせることが出来た。生活のための環境づくり・住民とのつながり、地域内交流が盛んになり多くの人を知る機会となった、人の為・地域の為に働くことは自分にとっても益するもの、子供たちを含めた地域内交流が盛んになり多くの人を知る機会となった、等の感想があった。

⑤出身地との関わり

(1)出身地での諸行事

出身地の年中行事への参加の有無は、有りが三二人、無が三七人、その他が二人である。浦添の移住者は、半数近くが出身地の諸行事に参加しており、出身地との関わりがまだ続いていることが分かる。

出身地にいる親族の諸行事への参加の有無は、有りが五二人、無しが十七人、その他が三人である。浦添の移住者は、出身地の親族行事には積極的に参加していることが窺える。

(2)郷友会

加入状況を見ると、郷友会への加入有りが三二人、無しが三四人、その他六人である。半数近くが郷友会へ加入しており、郷友会に対しての関心がまだあることが窺える。郷友会への加入時期については、一九六〇年代が四人、一九八〇年代が十一人、一九九〇年代が一人となっている。浦添の移住者は、一九六〇年～一九八〇年代の早い時期にかけて郷友会へ加入している。

加入している郷友会として、二五の郷友会と一つの県人会の名前が挙げられた。以下に列挙する。

安田、伊是名、羽地、沖永良部、嘉手苅、漢那、金武、今帰仁、在沖新城、在沖石垣、在沖白保、山里、新里、真喜屋、石垣、大宜味、大兼久、大保、鳥島、田嘉里、渡加敷



小湾、宮城クモト原付近（1968年頃）
浦添市立図書館所蔵



屋富祖（1967年）浦添市立図書館所蔵

第3節 いくつかの「シマ」をもつ人びと

村、泊会、本部、本部町備瀬、与那国、沖縄福岡県人会。

加入する郷友会は、自分の出身地が二六人、親の出身地が四人、配偶者の出身地が五人、その他三七人となっている。浦添の移住者は、自分の出身地の郷友会へ加入することが多い。

郷友会への参加のきっかけや理由は、旧交を温め親睦を図る、支援・協力・おつきあい、知人・友人と会いたいから、当然との意識、等の回答があつた。

郷友会活動への参加状況は、ほとんど参加するが十二人、時々参加するが十八人、ほとんど参加しないが九人、その他が二七人である。浦添へ移住した者は、郷友会への活動に参加する・時々参加するが半数ほどおり、郷友会への関心があることが窺える。参加する理由としては、交流により出身地の情報を得る、郷友との親交を深める、ふる里を偲ぶ、昔話談議、現在は時々参加しているが若い時はよく参加した、等の回答を得た。

郷友会役員の経験の有無は、有りが一〇人、無しが二六人、その他三五人である。郷友会には関心はあるが、役員にはなかなかないようである。

郷友会へ参加しての感想は、故郷の先輩・後輩との語らいは心が和む、故郷の情報が入るのはありがたい、生きていくための支えとして大切な団体、等の回答があつた。

⑥現在の浦添での活動について

(1)市民活動への参加については、有りが四六人、無しが十三人、その他九人となっている。浦添の移住者は、積極的に市民活動に参加していることが窺える。

活動内容は、新年会が二九人、生年祝いが九人、敬老会が三三人、成人式が十二人、運動会が二九人、盆踊り等の伝統行事が八人、その他が三人である。

(2)現在、居住している地域の愛着について、愛着を感じている方が六〇人、無しが一人、その他が十一人である。ほとんどの移住者が自分の住む地域に愛着を持ち生活していることが窺える。

その理由として、生活の便利の良さ・安心感等環境がよい、結婚・子育て・老後を考えると五〇年余も地域の方達と共に歩んだ。第二のふる里と思う、新興地であることから古

い伝統等のこだわりがない、等が挙げた。

考察

以上のアンケート調査結果から、戦後浦添への移住者について、移動の時期や経緯、居住する自治会や出身地との関わり、浦添への思いを考察する。

①基本項目

今回実施した調査の対象者は、七五歳未満が約七割で、一九七〇年～一九八〇年代に移住してきた年齢層が多い。出身地を見ると、北は北海道から南は与那国島まで多様な地域から移住している。

②浦添市に移住した時の状況

浦添に移住した時期は、一九七〇年～一九八〇年代が多い。移住時の年齢は二〇代～三〇代で、比較的若い頃に移住した。と同時に就職や結婚、居住を購入のために浦添へ移住したことが分かった。多くの場合、配偶者や子供と一緒に移住していることが分かる。またその四割近くが親兄弟を頼って移住している。浦添へ移住した時は、間借りや親戚との同居が多いことが分かった。

③浦添市へ移動した後の状況

浦添へ移住した時にはほとんどの移住者が就職をしており、既婚者であった。

浦添へ移住した後、約四割が転職している。転職場所は、市内が五人、市外が十八人で、市外が三倍以上であった。

移住者は、一九七〇年代～一九八〇年代に家屋を購入している。また、一九六〇年～一九八〇年代を中心に市内移動が見られる。

④自治会活動について

浦添へ移住した者は、ほとんどが自治会に加入している。自治会への加入時期は、一九七〇年代～一九八〇年代に集中している。

浦添へ移住した者は、自治会活動に積極的に参加するとともに、多くが役員を経験し、

自治会活動に積極的に参加、協力的である様子が窺えた。

⑤ 出身地との関わり

浦添の移住者は、出身地の諸行事に半数近くが参加しており、出身地との関わりがまだ続いている。

浦添の移住者は、その半数近くが郷友会活動に参加している。加入時期も、一九六〇年～一九八〇年代と早い。自分の出身地の郷友会へ加入することが多い。郷友会活動を通して、故郷との交流を大切に行っている。

⑥ 現在の浦添での活動について

浦添の移住者は、地域や市で開催される新年会など多くの催しに積極的に参加している。また、多くが自治会等の役員を経験しており、自治会活動への参加に意欲的・協力的である。ほとんどの移住者が自分の住む地域に愛着を持ち生活している。

おわりに

市町村自治法¹⁴第五条の規定によると、「市の要件」は次の三つである。

- (1) 人口三万人以上を有すること。
- (2) 当該町村の中心の市街地を形成している区域内にある戸数が、全戸数の六割以上であること。
- (3) 商工業その他の都市的業態に従事する者及びその者と同一世帯に属する者の数が全人口の六割以上であること。

この三つの要件を浦添に当てはめてみると、

- (1) 一九六五年の国勢調査人口が三万八二一人、一九六九年十一月末日現在人口が四万二一九人で、要件の三万人を超えている。
- (2) 市街地である政府道（現県道）三八号線と村道七号線の交差点を中心として勢理客から牧港にまたがる十一か字の戸数が八七六九戸で、全戸数一万三九三戸の八四・四％にあたる。

(3) 商工業等に従事する者の数は、一九六九年十一月一日現在で三万六七七二人（商工業に従事する者九三四七人、その者と同一世帯に属する者一万五六三六人、公務員・軍雇用員等四〇五七人、その者と同一世帯に属する者七七三二人）となり、全人口四万一二一九人の八九・二％にあたる。

一九四六年（昭和二一）四月、戦後の村政スタート以来、急速に発展を遂げた浦添村は、一九六九年時点で市町村自治法に定められた要件を十分に満たし、翌一九七〇年（昭和四五）七月一日、浦添市に昇格した。¹⁵

この戦後浦添の発展を支え、「太陽と緑にあふれた国際性豊かな文化都市」形成を担っているのは、戦禍を乗り越えて地域を守ってきた住民であり、戦後移り住んだ新住民である。現在八割を占める新住民¹⁶（移住者）たちの「浦添に移り住んで感じたこと」¹⁷を最後に紹介したい。移住者から見た浦添の魅力と現在の発展を物語るものである。

- ・ 自然環境がよく、文化遺産が多くあり、子や孫に故郷であると自慢できる。
- ・ 親と一緒に移住し、結婚後も同市に住んでいる。近隣市との距離も近く、住みやすい。公共交通機関が不便なので改善を願う。

- ・ 浦添は那覇へ行くのにも近く、中部・北部へのアクセスも便利。

- ・ 大都市に隣接して、交通の便も良く、公共施設（図書館や病院、スーパー）などが身近にあり便利である。また、住宅街としての静けさもあり、落ち着ける。但し、米軍ヘリの危険性は頭上を飛ぶときに感じる。

- ・ 小中学校が近く、子供の教育に最適である。

- ・ 現住地の自治会は静かで会員も協力的で行事も多く楽しく過ごしている。近くにモノレール駅も建設されることで益々発展が確認され、夢が持てる。（前津政廣）

二 郷友会に参加する移住者たち

（一）郷友会が発生した背景

高度成長期において日本が経験した急激な都市化と情報化は、それまでの地域社会を大

15

『浦添市史』第一巻通史編浦添のあゆみ 浦添市教育委員会、一九八九年、一六二頁―一六三頁および『浦添村を「浦添市」とする申請関係書」一―二頁。

16

移住者の割合は、一九五九年三九・七％、一九六九年五八・五％で、一〇年間で約一〇％増えている（『村勢要覧 一九五九年版』九頁・『浦添村を「浦添市」とする申請関係書』八頁）。また、前掲『浦添市介護保険利用者等高齢者実態調査』一六三―一六四頁によると、浦添出身者は三九三人（生まれてから同じ集落）二三七人、「一時市外・県外で暮らした」八一人、「浦添内で移動あり」七五人）、浦添以外の出身者は一三八八人で、二〇〇三年度の調査時点で浦添出身者二二％・移住者七八％となっている。

17

平成二六年度実施アンケート調査による。

第3節 いくつかの「シマ」をもつ人びと

大きく変化させる事になった。人口移動が活発化し、職や新天地を求めている挙家離村や集落を挙げての離村までになり、日本の広範囲で過疎化が進行した。都市地域ではこれまでに経験したことのない激しい人口増加が起こり、流入する事も出郷する事さえも自由になっていった日本の都市と農村は、この時期を境にして大きく変化することとなった。また情報化や交通網の発達によって時間的、精神的にも地方と都市の間における乖離^{かいり}は少なくなり、実態としての地方と都市、さらには故郷としての意味も徐々に変化していった。このような流れの中で多様な地域性は次第に画一化されていった。

このような現象は沖縄においても例外ではなく、戦後の基地建設による労働力の吸収や出稼ぎ等によってそれまでに経験のなかった地域間の移動や、他地域の人間が大量に都市部へと流入するという現象がもたらされた。さらに一九七二年（昭和四七）には沖縄が日本に復帰し、様々な分野に日本化の波が押し寄せてきた。沖縄の変貌は著しく、沖縄の南部においては急激な都市化が進行した。

そのような激動の沖縄社会の中で、沖縄各地から移動してきた移住者たちは同郷者同士で身を寄せ合い、同郷人組織のひとつである郷友会を組織していった。移住者の増加によって多くの機能と会員数を有するようになった郷友会は、沖縄の社会・経済・文化の各分野に多大な影響を及ぼすようになり、その結果「沖縄は郷友会社会である」とまで言われるようになった。

郷友会の組織及び役割はその社会背景によって大きく変化しており、沖縄社会の移り変わりと共に郷友会も変容してきた。

終戦直後の沖縄の各地域では戦争引揚者や他地域へ疎開していた者たちが郷里に戻り、人口が急増し深刻な食糧難が引き起こされていた。既に困窮を極めていた小さな集落ではその人口を抱えきれず、多くの住民が職を求めて郷里を離れて行かざるを得なかった。そのような背景もあり、当時那覇に比べて比較的土壌のあつた浦添には、職や住まいを求めて急激な人口移動が起こった。



浦添市民体育館で行われた宮良郷友会の運動会
前津政廣提供



浦添運動公園で行われた今帰仁郷友会の運動会
土屋なおか撮影

(二) 郷里から異郷浦添へ

浦添市に移住してきた人たちの出身地は様々で、その人たちの多くは呼び寄せなどによって同郷の先輩を頼り職を求めて浦添の地にやってくる。初めは、先輩の家に間借りなどをして、郷里の家族へ仕送り等をしていたが、そのうちに家族も呼び寄せて、浦添に家を建てるということになっていった。

その時に、浦添には土地がまだ残っていたことや、水道が整備されていたことなどが浦添に住む決め手となったという。しかし、当時家を建てるためのお金をもっている人は少なく、家を建てる時は同郷の仲間たちが協力して、それぞれの家を建てていった。

与那城村平安座出身者の事例が、『浦添市史』に紹介されている。

戦後米軍基地に勤めた名護英治さんは、一九五五年（昭和三〇）、勤務している部隊が浦添の牧港兵站地に移動したとき、ともに働いていた友人五人と浦添に移り住むことにした。字宮城に六畳二間台所付きのトタン葺き貸家を見つけて共同生活を始めた。その後それぞれが家族を呼び寄せて、浦添に定住するようになった。浦添に職を求めた男性数人がグループで共同生活を送るのも、浦添に定住していく過程も、このパターンが多かった¹。

伊平屋出身者は、本島へ移住してから大工になるものが多く、シマ出身者の家を郷友会の会員で助け合いながら建てていったという。戦後真つ先に人口が集中したのは那覇近郊であった。その後基地建設もあり、まだかろうじて土地の残っていた浦添に、離島出身者たちが移り住んでいった。伊平屋出身者が浦添に鉄工所を興し、その周辺に土地を確保したことから、同郷者たちが移り住み、親せきなどを呼び寄せて、同郷の出身者たちが協力して家を建てていった。

出身者の中でも最初に家を建てたところが郷友会の事務局になる場合もあったようだ。平安座郷友会の前森さんは一九五八年（昭和二三）に最初に家を建て、そこを郷友会員の窓口として提供していたという。

『日曜日以外は毎日六時から八時、いや一〇時までかな？開けていました。銀行みたいにお金の貸し借り（共済会活動）もあるから。



平安座郷友会創立20周年記念祝賀会（1978年12月）浦添在平安座郷友会提供

1 『浦添市史』第七巻 資料編六 浦添の戦後（浦添市教育委員会、一九八七年）二〇三～二〇四ページ



1965年ごろの浦添在平安座郷友会事務所
浦添在平安座郷友会提供

毎月理事会というものもあるから。いろんな協議事項ですね。理事で集まって話しあいました。』

事務局という面の他にも、会員たちの案内所としての役割を果たしていた。

『（不案内な那覇への用事や同郷の知人の訪問のために手助けを求める人たちが）事務所によく来ました。訪ねてくるので、教えてあげましたけどね。だからここを中心にしてみんな活動していました。』

個人で簡単に住まいや仕事などを探せなかった時には、先に生活を安定させたシマの先輩が、後から出てくるものを助けるといふ事は少なくなかったようだ。

（三）異郷での助け合い―郷友会の結成と活動―

郷友会の結成

戦後、何もかも失った沖縄の人々の生活は貧窮を極めていた。郷里を離れて暮らす人々は相互扶助を目的に模合などを始め、これが郷友会の結成へとつながっていった。このような活動は、経済面だけでなく、異郷にいる同郷のものたちの精神面でも大きな役割を果たした。

一九六〇年（昭和三五）十一月に結成された浦添在平安座郷友会（平安座島）は、軍雇用員約六〇人でスタートした。具志川村天願のQM（米陸軍補給）部隊で働いていた平安座島出身者は、部隊の浦添移転に伴い移動した。その数は、家族を含めると推定六〇〇〜八〇〇人に上った。

浦添在平安座郷友会初代会長の前森正助氏は「浦添村に移り住んでみると、非常に遠い異郷の地にやって来たような感じがした。全員が同じ郷愁を抱いていたので、一カ月一度でいいから同郷の者同士が一堂に集い、古里を語り合えば安らぎを覚えるのではないかと郷友会を結成した²」という。

平安座郷友会の前森徳一さんの話によると、平安座郷友会の始まりは、経済的な組織援助であったという。



平安座郷友会の運動会
浦添在平安座郷友会提供

2 『郷友会』（琉球新報社、一九八〇年）
一四六ページ

『模合資金ですね。毎月積み立てて、共済会をつくったんです』。

県内でも都市化が早く進んでいた浦添・那覇近郊で生活を安定させていくため、お互いに助け合うために、模合をおこなっていたという。

『会長、副会長、それから、宮城、勢理客、それから屋富祖、牧港、城間ですか、この五か所に（平安座出身者が）住んでるもんですから、そこに理事を一人づつおいて、その人たちが毎月毎月一ドルを徴収して、会計に納めるんです。で、希望者がおりましたら保証人を立てて借りることができよったんですね』。

『これが二〇〇名くらい、もっとおったんじゃないか。三〇〇名くらいおったんじゃないですか』。

このような共済会が郷友会の前身として組織されて、移住者たちの異郷の地での生活基盤を支えた例は多い。その後生活が安定していくにつれ、親睦活動の面を持った郷友会として変化していくことになる。

一九七七年（昭和五二）に結成された浦添字諸見・内花郷友会（伊是名村）も、会則に「本会は会員相互の親睦を図ると共に、郷土との連携を密にし、お互いの発展を図ることを目的とする」と明記し、敬老会やスポーツ大会を中心に活動している。

一九五〇年（昭和二五）に結成された崎本部郷友会（本部町）は、会員が多かった浦添支部が独立し、一九八〇年（昭和五五）頃に浦添市在住崎本部郷友会を結成した。浦添市在住崎本部郷友会としては月一回の模合を中心に敬老会等、定期的に集まっている。崎本部区民運動会等、母村の大きな行事には那覇近郊在郷友会とともにバスを借りて参加している。

郷友会の活動

郷友会が毎年恒例として行なっている定期的行事には総会、新年会、干支の生年祝、成人式、学事奨励会、ピクニックや親睦旅行などのレクリエーション、運動会を始めとする野球・バレーボール・パークゴルフ・駅伝大会などのスポーツ大会の他に囲碁や名刺交流会などがある。もちろんすべての郷友会がこれらの行事を全部開催しているわけではな

第3節 いくつかの「シマ」をもつ人びと

い。各郷友会によって行われている行事は様々であるが、共通して大きな行事となっているのは総会と運動会である。この二つの行事はほとんどの郷友会において毎年行う年中行事とされており、最も多くの会員が参加する行事でもある。

運動会は沖縄の村落にとって、集落全体が楽しむ一種のセレモニーであった³。移住先においては同郷人が一堂に集まる機会が少ないために相互の連帯感を高め、親睦を図ることを目的として開催されている。運動会は郷友会員だけでなく母村住民にとっても最も情熱を注ぐ行事であり、郷友会結成当初からこれまで年中行事のメインイベントとして行われてきた。他の行事とは異なり、運動会は気軽に足を運ぶことができることから、日ごろの参加状況を問わず大きな凝集力を見せる。

浦添運動公園では各郷友会の運動会が毎週のように開催され、郷友会運動会の開催を知らせる垂れ幕やのぼりが立てられている光景は、運動会シーズンになるとよく目にする風物詩でもある。

市町村・連合会単位の郷友会による運動会は規模も大きく、数千人を集める運動会もある。しかし最近では二世や三世を対象とした郷里の方言を使った借り物競争など、郷里の文化継承を意識した種目を取り入れている郷友会や、構成員の高齢化によって老若男女を問わないものへ変更するなど、時代の要請を受け、一部の競技内容を変化させているといえる。また運動会において棒術や踊りなどの各地域の伝統芸能を演目として設けている地域もあり、運動会は単なるスポーツ大会や親睦の場だけでなく、郷友意識の高揚と継承の場へとも変化している。

多くの郷友会がその会則に「母村との連携」を掲げているように、母村の年中行事に参加している。主に参加する行事は豊年祭やアブシバレー等で年中行事の中でも比較的大きな行事である。沖縄本島北部地域は地理的にも比較的参加が容易であるため、郷友会で大型バスを借り切って母村の行事に参加している。参加の仕方は郷友会と行事の内容によって異なっており、大きく分けて母村中心で行われるものに郷友会員が参加するもの、行事の一部を郷友会が担うものに二分される。過疎化が進んだ地域の中には伝統行事が今や郷



郷友会員が参加する大宜味村喜如嘉のアブシバレー 土屋なおか撮影



今帰仁郷友会の運動会を知らせる横断幕 土屋なおか撮影



浦添運動公園で行われた今帰仁郷友会の運動会 土屋なおか撮影

3 鯺坂学『都市同郷団体の研究』（法律文化社、二〇〇五年）三〇ページ

友会の参加がなければ執り行う事ができない状況もあり、郷友会の存在は大きなものとなっている。

以上のような定期的活動以外にも開催される行事がある。その一つに祝賀会及び激励会がある。これらは郷友会員がスポーツ・文化・教育などの面において県や全国レベルで評価された場合や郷友会に特別な貢献をした場合などに行われるもので、その時期に特別行事として行われる場合と総会と合わせて行う場合があり、どちらにしても郷友が一堂に会する場において表彰されるものである。

また、特に冠婚葬祭の時に郷友会の力が最大限に発揮される。郷友会の原点とも言われる葬祭においては、郷友会の連絡組織が活用され告別式等の情報が各会員に伝わっていくことになる。また新聞の死亡広告には郷友会名及び会長の名前が列記され、故人を知らないくても同郷人であるという事がすぐわかるようになっており、ほとんどの郷友会員が参列する。また、異郷の地で家族がなくなった場合、郷里とは異なりご近所全部が知り合いというわけではなく、遺族の負担は大きいことであったと想像できる。そのような時に郷友会の会員が葬儀を手伝うなど、会員の生活を大きく支えていた。

平安座郷友会においても『誰かが亡くなったという事で、ここに住んでいる人たちがみんなお手伝いしてあげた』『お墓がみんな平安座にありますので、ここの葬祭場で告別式が終わって向こうに納骨するときは、やっぱりみんなが集まっているとお手伝いしてあげました』という。このような管理を行うのも会長をはじめとした役員の仕事であった。

そのほか、会の運営を支える会員名簿の作成⁴、活動の節目の年の記念誌発行、さらに母村の字誌の発行への取り組み、「母村との連携」および「母村の発展に寄与する」という目的達成のための母村への寄付活動などがある。

とにかく、出身シマでの生活をそのまま移住先へ持ち込んだような「疑似ムラ」が郷友会であり、シマの人間が集まり、シマのことばで話し、シマの行事を行うことが、見知らぬ土地で生活をする移住者たちを支えてきた。



琉球新報ホールで行われた鳩間郷友会の民俗芸能のしらべ 土屋なおか撮影



大浜アカハチ会設立50周年記念式典・祝賀会 土屋なおか撮影



アプシバレーが終って郷友会員を見送る喜如嘉の住民 土屋なおか撮影

(四) 新住民と旧住民の融合

戦後当初、よそ者（新住民、移住者）に対しては田畑の貸借や売買は起こわれなかった。新住民たちは部屋や家を借りて住んでいたが、年月を経るにしたがい、田畑を借りたり土地を買ったりできるようになった。仕事を求めて入ってきた人々は、浦添に土地を購入し、家を建て、そこに定住するようになったのである。

新住民が新しい移住地に受け入れられていく過程を、自治会と選挙に見ることができ

る。平安座出身の名護さんは、字宮城に移り住んだ一九五〇年代、「自治会に加入したくてもとても申し出られるような雰囲気ではなかった」という。しかし、一九六七年（昭和四二）に字大平で土地を借りて家を新築した際には、引越と同時に自治会に加入した。そのわずか一カ月後には評議員を頼まれ、一九七八年（昭和五三）には自治会長に就任することとなった。⁵

伊平屋出身の大見謝さんは、一九六〇年代に勢理客に居を定めたが、当初は地元住民との付き合いはまったくなかった。ところが、一九六九年（昭和四四）に寄り合い世帯（宮古出身約五〇世帯、本部町出身四世帯、その他八重山、久米島、津堅島、伊平屋島など）からなる勢理客八班のピクニックに初めて参加したのを機に、評議員となり、翌一九七〇年には自治会長に選出された。⁶

「新住民」で自治会長に就任した移住者たちは、自治会活動においても、郷友会活動の経験を活かして、さまざまな行事を企画運営した。勢理客の伝統行事「十五夜祭」の二〇一〇年（平成二二）のプログラムには、伝統の獅子舞や長者の大主のほかに、子ども会の空手や太鼓、日本舞踊、マミドーマ、宮古めでたい節など、「新住民」の芸能も見られる。

内間自治会においてもいろんな地域の出身者がおり、自治会の祭などでは、その人たちが集まって、『今年は宮古。来年は八重山。再来年はやんばる、そういう風に出し物を出すようにしよう』という話はいつもある』といい、今では珍しいことではなくなってきた。

4 会員名簿は郷友会行事の連絡だけでなく、郷友会費の徴収や寄付集めにも利用される。この名簿は当初事務局のみが所持していたが、会員相互間にも必要性が生じ、総会などで会員に配布されるようになっていった。

5 『浦添市史』第七卷二〇六ページ

6 『浦添市史』第七卷二〇七―二〇八ページ



新城郷友会事務所 土屋なおか撮影

ている。

一九六一年（昭和三十六）、浦添村の全人口の過半数を村外出身者が占めるようになると、選挙にも変化が現れた。一九六一年三月執行の村議会選挙では一人、一九六九年三月執行の選挙では定数二人のうち四人、一九七三年の市議会議員選挙では定数二十七人のうち二人の村外出身者が当選した。他市町村からの流入によって、市議会議員の出身地構成にも大きな変化が生まれた。⁷

ここに郷友会の各種選挙への後援活動がかかわってくる。各種選挙期間、新聞上では「郷友会票」の動向が報道され、沖縄社会への大きな影響を持つていとされた。⁸

このような各種選挙と郷友会の関係が築かれたのは、郷友会結成時における沖縄本島内での離島・山村地域出身者への差別等を受け、社会的信用を高める有効な手段として、議会への進出が位置づけられた事が理由としてあげられる。多くの郷友会で同郷者から議員を出すことを目的に、選挙には母村と郷友会が連携して応援活動が行われていた。

離島をはじめとして母村の環境改善のために同郷者の代表として議員を出し、郷友会の協力によって当選させ、母村に還元するという事も目的とされた。

しかし選挙活動によって政治思想をめぐって郷友会内部に混乱が起きた事もあり、郷友会員の分裂を防ぐために、政治を郷友会に持ち込むことをよしとせず、現在は組織として後援会活動を行っていない郷友会がほとんどである。同郷者及び母村の関係者が何らかの選挙に立候補した場合は郷友会とは別に有志団体を設立して熱心な後援活動を行っている。なかには選挙事務所内に郷友会員を中心にした運営本部が置かれることもある。後援会の名称であっても、内実は郷友会組織と同様であることから、現在でも郷友会の持つ都市部と農村部にわたる広範囲なネットワークを求めて、各種郷友会行事に選挙候補者が挨拶に訪れ、協力を呼びかけている。

また思想の差はあっても結果的には同郷人の応援をしている状況には変化はなく、結果的に地縁・血縁選挙と呼ばれる沖縄の各種選挙において、郷友会の果たす影響はまだ残存しているといえる。



浦添市在住崎本部郷友会総会の幕開け 『浦添市在住崎本部郷友会5周年記念誌』1984年



宮城島出身者割引の看板 土屋なおか撮影

7 『浦添市史』第七巻 二二三～二一七ページ

8 石原昌家 『郷友会社会―都市の中のムラ』（ひるぎ社、一九八六年）一〇一～一〇三ページ

第3節 いくつかの「シマ」をもつ人びと

(五) 変化する郷友会

郷友会組織の変容

郷友会は一九七〇年代が最盛期だとされ、一九八〇年代には既に郷友会の内外においてその存在は過渡期にあるといわれており、郷友会組織の存続が危惧されていた。

大きな問題は郷友会と母村両組織の高齢化と過疎化を要因としている。母村からの新一世の減少が郷友会の構成に大きな影響を与えると共に、郷友会二世・三世との郷里意識の断層もその要因であった。一九八〇年代において既に指摘されていた問題は二〇年の歳月を経て、郷友会組織の諸側面に影響を及ぼしている。

① 構成員の変化

まず郷友会を構成する基本単位である郷友会会員の属性に直接の変化が見られる。

現在、郷友会は結成から八〇年が経過しており、郷友会結成当時から関わってきた「郷友会一世」のほとんどは高齢化し、すでに現役を引退して老人会の会員となっている。このような郷友会員の高齢化によって郷友会内部にも変化が見られ、多くの問題も生まれている。

まず郷友会活動の変化である。会員が高齢であるために親睦会、ピクニックや郷友会の大きな行事である運動会が廃止され、廃止されない場合でもスポーツ大会の内容が野球やバレーボールからパークゴルフやグラウンドゴルフなどの高齢者向けの行事へと変化した。このことが世代間交流の減少にも繋がっている。

次に郷友会役員の選出にも変化がみられる。多くの郷友会で役員のなり手がおらず、役員の選出には毎期末の大きな問題となっている。これまでも多忙を極める会長の選出は容易ではなかったが、郷友会形成期からの一世が現役を退くと、その困難が増した。郷友会の中には干支や学年等の限定された中から役員の選出へと変化している。しかし役員の中心となる中年層は自分の仕事も忙しく、「自分より上の世代がいると会長をやり難い」という理由で会長を辞退する会員が多い。その結果高齢化した一世たちが会長を担う事になるが、活動範囲が狭くなるなど活発な活動を行えない場合もある。



浦添市民体育館で行われた大浜アカハチ会のグラウンドゴルフ大会（2012年）前津政廣提供



浦添大公園で行われた金武町郷友会の囲碁大会『金武町郷友会結成45周年記念誌』2004年



前田小学校で行われた大浜アカハチ会の運動会（1995年）『設立40周年記念誌大浜アカハチ会』1998年

郷友会の構成員としてはまず、母村出身者である郷友会一世が中心である事には変化はない。この一世は母村から都市部へ出てきた一世代目であることが前提であり、年齢は限定されない。つまり郷友会には主に中学、高校を卒業し、進学のために都市部へ出郷してきた一〇代後半から七〇歳以上の高齢者まで広範囲にわたる世代の郷友会一世がいると考えられるが、郷友会の活動に積極的に参加している会員は四〇代後半以上がほとんどで、それ以下の年齢層になると大幅に減少する。

その理由としては三〇代から四〇代の会員は個人の生活で多忙を極めており、郷友会に参加する時間がなく、一〇〜二〇代などの若年層は同郷の先輩とはいえ面識のない郷友会員と一緒に活動する事はためらわれ、学校やバイトなどの自らの友人関係以外の人間関係を必要としない事があげられる。

さらに沖縄各地域における過疎化の問題も大きく関係している。一般的に活動が活発であるといわれている沖縄本島北部地域と八重山地域の郷友会では子どもの減少が深刻な問題となっている。多くの地域で子どもの減少から、複式学級の増加や廃校となった学校が現れている。このような状況においては母村から都市へ出郷する母数そのものが少なくなっているといえる。母村からの出郷者を中心に成り立っている郷友会では母村から新一世が押し出されなければ、その組織の存続に影響をもたらす。つまり母村人口の減少は郷友会一世の減少に直接つながっているといえる。さらに、郷友会のスモールグループとしての同級生グループが少人数で機能していないことも若年層の参加者減少に関係しているといえる。

また若い新一世と並んで郷友会の次世代を担う者として期待されている、郷友会一世の移住先において生まれた子どもや孫たちの郷友会二世・三世の増加があげられる。二世や三世は、当然一世の母村での生活経験はないが、参加する郷友会は一世代の母村郷友会であり、二世・三世の出生地及び居住地とは異なる事が二世・三世の郷友会活動への参加の妨げとなっている。しかし多くの郷友会一世や母村の住民は二世や三世の郷友会活動への参加を期待しており、参加する事が当然と考えられている部分もある。



伊江島郷友会の垂れ幕 土屋なおか撮影



北斗会（国頭村出身者の郷友会）の大運動会（2007年）土屋なおか撮影



西表東部パナリ郷友会の総会・新年会・敬老会のようす 土屋なおか撮影

第3節 いくつかの「シマ」をもつ人びと

二世・三世の郷友会活動への参加は一世の活動姿勢に大きく左右されているといえる。当然のことながら、一世が郷友会活動に積極的に参加していなければ二世・三世も参加することは考えられず、逆に一世が熱心に郷友会活動に参加し、二世・三世を幼少期から郷友会行事や母村行事に参加させる事で、他の郷友会員とある程度人間関係を形成することができれば、二世・三世でありながらも「積極的会員」となり、母村を自分のルーツとして認識していく事もある。

しかし例外的に一世が積極的会員として、会長などの役員を務めている場合、郷友会によって役員はほとんどボランティアでありながら多忙を極め、滅私奉公的な状況となり、家族にも同様な活動が求められる場合がある。その様な経験によって二世・三世だけでなく家族が郷友会に対して否定的な意識を持ち、郷友会活動に参加しなくなるという事もある。このような一部の役員に郷友会運営の負担が集中する状況が、役員のなり手不足や郷友会離れを引き起こす一因ともなっている。

②運営の変化

ほとんどの郷友会は、会長をはじめとする一〇〜二〇名程度の役員会を中心にして青年部、婦人部、老人会によって組織されている。

郷友会行事などの活動内容は役員会で決議し、役員が会員へ郵送などで案内を出す。電話連絡等は各班の班長へ連絡され、それぞれの会員へと伝達される。行事の決定以後は役員会と青年部が中心になって各会員の出欠確認などの準備や当日の運営までが行われる。さらに会長になると母村行事や他の郷友会行事への参加、挨拶など多忙を極める。自営業やある程度時間を作れる業務に就いていればその活動は可能であるが、現役で仕事をしていれば役員を平行して務めることは容易ではない。これら役員の仕事は時間と労力を使い、さらにほとんどの郷友会で役員はボランティアであり、なり手不足は深刻で、小さな郷友会ではやむを得ず数期を同じ会長が務めることも少なくない。

これら役員のなり手不足には若い新一世の郷友会離れも大きな要因である。郷友会結成当初からの一世は母村に対しても郷友会に対しても、感謝の念をもっており、その構成員



チャリティーゴルフ大会（2006年）『設立50周年記念誌大浜アカハチ会』2007年



宮良郷友会の総会・新年会・成人生年者合同祝賀会 土屋なおか撮影

同士で支え、助け合って来たという意識がある。その感謝の念から郷友会、母村両組織に対して協力を行ってきたが、近年になって都市部へ移動してきた若年層は生活の苦労も少なく、すでに郷友会も相互扶助の目的から親睦集団へと役割を変化させていることから、郷友会による後見を受けておらず、一世に比べて郷友会に対する意識は低くなる。

郷友会二世・三世においてはさらにその点が強調され、自分の生活を犠牲にしてまで、親の母村と郷友会のために協力はできないというのが多数を占めるようになっていく。

多くの郷友会では現在も一世が会長を務めているが、多くは五〇歳代以上であり、今後は二世・三世が役員を担わなければならない、更なる役員のなり手不足は深刻化すると考えられる。

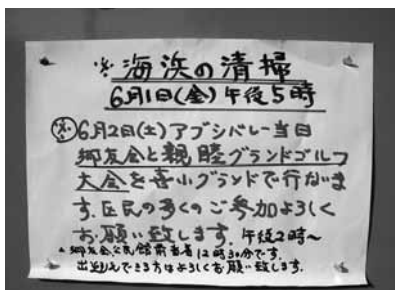
このような影響は青年部や婦人部において既に現れており、参加者の減少だけでなく、それぞれの役員や会長が決まらず、解散に至っている郷友会もある。青年部の多くは成人会と統一されるか、郷友会そのものから年齢集団がなくなる事もある。婦人会は主に踊りなどの芸能の保存を中心に活動しているため、婦人会の解散によって組織で活動されてきたものが、個人での活動へと変化したことによって郷友会活動への参加が減少することもある。

これら各部会の解散だけでなく、会長や役員が決まらず郷友会そのものの活動が停止状態にある郷友会もある。郷友会自体はなくならずとも、最盛期には浦添・那覇・名護にまで地区単位の支部によって構成されていたが、衰退していくうちに地区単位郷友会の多くが解散し、那覇近郊郷友会に統一されている状況にある。

③活動の変化

郷友会及び母村の総会を始めとした年中行事にはそれぞれの代表が参加するが、両方の組織役員が高齢化している事で、このような交流が困難になっており、往来が減少している。しかし同時に離島などにおいてはこれまで母村との往来が困難であったが、交通網の発達によって母村役員の郷友会行事への参加も見られるようになっていく。

郷友会最大の行事であった運動会は以前のような対抗意識は多少薄れ、勝利のために必



アブシバレー後に行われる親睦グラウンドゴルフ大会を知らせる掲示板 土屋なおか撮影



勢理客の十五夜祭。保育園児による獅子舞 (2010年) 仲西正勝提供



浦添大公園で行われた金武郷友会のグラウンドゴルフ大会 (2003年) 『金武町郷友会結成45周年記念誌』2004年

第3節 いくつかの「シマ」をもつ人びと

死で選手を探すような事はなくなっているが、参加選手の減少によって役員は選手集めに苦勞している。また以前は運動会以外のスポーツ大会なども青年部を中心に頻繁に行われていたが、青年部の解散や休日を合わせることが困難となり、次第に減削されていった。このように郷友会単位でのフォーマルな行事以外にインフォーマルな親睦行事の多くは行われなくなっている。しかし、これまで見られなかった変化もおきている。二世・三世の増加に伴って郷友会の年中行事の内容にも、二世・三世を対象にしたものが加わるようになった。主に「島くとうば」や各種芸能の母村の伝統文化を継承させる事を目的としたもので、母村の子どもが減少している中、母村の伝統を継承・保存していく場が郷友会へと変化しつつある。

しかしその様な中で結成当事の郷友会一世のみによって組織される老人会は、親睦旅行やグラウンドゴルフなどの活発な活動を行っている。その内実は郷友会発足当時の郷友会そのものであり、高齢化した出郷者たちは自分たちが生活した母村を郷友会に求めているといえる。

郷友会の展望

郷友会はこれまでも時代に合わせ、その役割を変容させ存続されてきた。最後に、いったん閉会したのちに再結成された郷友会を紹介する。

浦添在平安座郷友会は一九九三年（平成五）で幕を閉じたが、二〇〇三年（平成十五）に再結成された。二〇〇二年に平安座小中学校一〇〇周年があり、浦添からも那覇からもお祝いをとの強い要望を受けたからである。再結成にあたっては、会費の徴収はとりやめ、平安座自治会からの助成金で運営している。結成した一九五五年（昭和三〇）当時約三〇〇人いた会員は二〇一三年（平成二五）三月現在三五世帯四人に減ったが、平安座の行事が書かれた自治会カレンダーをもとに、ふるさと平安座との交流は続いている。

伊平屋村人會も、一九七九年（昭和五四）六月に結成し二〇〇一年（平成十三）頃には休会状態に陥っていたが、二〇一一年（平成二三）六月、伊平屋村の要望を受けて再開し



これまでに発行された郷友会の記念誌



全島うばら一ま大会での各字ごとの受付のようす 土屋なおか撮影



てだこホールで行われた全島うばら一ま大会 土屋なおか撮影

た。伊平屋ムーンライトマラソンや村育英会の支援のためのチャリティゴルフ大会を活動の柱とし、沖縄本島中南部に住む約七〇〇人の会員が、島の発展と交流のため再スタートした。

このように、なんらかの節目に郷友会活動が活発になることはあるが、全体的な活動としては、以前のような活発さはなくなってきた。郷友会の抱える高齢化・参加者の減少や組織の衰退は、すなわち母村の高齢化・過疎化問題でもあり、軍用地料によってその組織を存続させている郷友会など、郷友会と母村の関係は現代の沖縄社会を映し出したものであるといえる。郷友会の衰退・解体という形で現れている沖縄県内での同化の進行と多様化は、日本全体の縮図として広く地方と都市の関係に対して普遍的にいえることである。

これまで見てきたように、多くの郷友会は現在低迷期にあるといつてよい。沖縄社会だけでなく、郷友会の構成員の属性も、会の形成期とは大きく変化し、当初の目的であった同郷人同士の相互扶助の役割は、すでに郷友会役割として求められておらず、共助団体から会員同士の親睦団体へとその役割を移行させている。中心となる世代は母村での生活経験のない二世・三世へと変わり、そのような中で郷友会がその活動を減していくのはやむを得ないことであるともいえる。二世・三世が生まれ育った浦添に地元意識を持ち、ウラシーンチュとして生きていくこともまた、郷友会会員のものと同じであるからである。中には郷友会の消滅は自然の流れであるなどの理由から郷友会の存続のための対策をとっていない地域も存在するが、多くの地域や郷友会では郷友会組織の存続が望まれている。

戦後まもなく異郷の地を開拓し、移り住み、現在の沖縄・浦添を作り上げた移住者たちにとって、郷友会は故郷そのものである。高齢化し、たやすくは帰れなくなった本当の故郷を守る力と同じ力で郷友会は守られてきた。

しかし、その故郷と同じように、現在住んでいる地域にも溶け込んださまざまな出身者によって、今の浦添がつくり上げられている。さまざまなルーツを持ったウラシーンチュたちによって、今後はまた、新たな形のコミュニティとして変化していくだろう。

（土屋なおか）



大浜アカハチ会設立50周年記念式典で挨拶をする大浜石垣市長（当時）土屋なおか撮影

■小湾の移住―地主会から郷友会へ―

長 間 安 彦

■移住―新部落の形成

旧小湾住民は沖縄戦終結後、美里村（現沖縄市）嵩原のキャステロ並びに浦添村（現浦添市）字仲間の各収容所生活を経て、一九四九年（昭和二四）二月に字宮城の内陸部のクモト原一帯（現宮城六丁目付近）に移住した。米軍基地キャンプ・キンザー（牧港補給地区）建設に伴い、西海岸域に所在した旧字小湾の土地を軍用地として強制的に接収されたためである。移住先の割当土地は狭小で他市町村字からの新住民受け入れが難しく、一九五〇年（昭和二五）以降の基地建設拡張に伴い、外部からの同地区への居住は、間借人以外は当分の間差し控えられた。部落役員会承諾の自由転入が認可されたのは、一九六七年（昭和四二）以降のことである。新住民・旧住民が混在する現在の小湾（行政区）の自治会組織とは別に、一九五〇年代に小湾土地委員会、さらに軍用地地主会が結成されるが、米軍の「土地収用令」・軍用地代支払の変更、サンフランシスコ講和前補償問題などや、一九六三年（昭和三八）、当時の琉球政府五か年計画「土地調査法」に準じた地積確定測量を契機として「字小湾共有地主会」の組織化が意図された。当初、字共有地・移住地の固定資産などの共有財産の積立基金は歴代区長（現在は自治会長）の管理である。

■地主会の結成

結成前の一九七八年（昭和五三）に暫定的組織の部落共有地審議特別委員会が会則案を作成し、同年に区会から登記・契約等の諸書類を引き継ぎ、翌年、正式に地主会を結成した。地主会会員とその子孫の人材育成・会員相互の親睦を目的として、加入資格は「昭和二〇年まで沖縄本島に居住し字小湾に本籍をもち居住していた戸主とその家系を継承した者、並びに直系卑属の子孫」とした。屋取人も同様にその資格を有した。結成当時の会員数は一四八名を数えるが、一九九四年（平成六）の会則改正で正会員・準会員・特別会員に区分された時は、二九〇名に増加している。

地主会は「郷友会的な活動」を主としていた。総会、新年・生年会や敬老慰労金給付、共同墓園の管理運営と戦没者追悼式、小湾アギバーリーの上演、部落学力向上懇談会（学事奨励会）、字基金貸付（移住資金・厚生資金等）事業や、清明祭・五月ウマチー・七夕・御願解きなどの民俗行事開催、老人会・婦人会等の各種サークルの助成、県内外・海外研修会、さらに字誌編集や地域社会への貢献など、多くの事業計画を実施した。また、現況の自治会活動補助金のお半ばは地主会の積立基金の収入の一部から拠出されている。二〇〇一年（平成十三）の新年・生年会では小湾の海外移民者（ハワイ・ブラジル・米国在住）一〇人を招待して自治会館で祝宴を催し、同年一〇月のハワイ訪問の際には、浦添市人会との集い・小湾出身者十四人との交歓会をハワイ沖縄会館で開き、字誌編集のための移民体験調査も行った。字誌編集事業

は二〇〇九年（平成二一）に終了した。

■ 郷友会として

事業趣旨は二〇〇九年（平成二一）五月に地主会の後身となる「字小湾郷友会」に引き継がれた。役員会下部機関に育英・資産運営・厚生資金貸付等の各種委員会を置き、伝統芸能保存委員会傘下ではアギバリー保存会が活動する。会員資格は郷友会会則では「昭和二〇年四月一日現在」（一九七八年二月の地主会審議では「八月十五日まで」と記述される。同年八月に自治会共催で移住六〇周年記念式典、翌年十一月には郷友会（旧地主会）創立三〇周年記念を開催・祝賀した。二〇一三年（平成二五）四月現在の会員総数は五四二名である。

地主会から郷友会と組織名称を替えたが、前述した様に主な事業活動は継承されている。総会は勿論、新年・敬老・生年会や学事奨励会の開催、五月ウマチー・慰霊祭・清明祭の執行、研修旅行の実施、小湾アギバリーの上演及び浦添市主催の「てだこ祭り」への出演などが、年毎にある。

参考資料

- 浦添村役所総務課広報係『広報うらそえ』第四〇号二面 浦添村役所 一九六二
- 浦添市史編集委員会『浦添市史』第七巻 浦添市教育委員会 一九八七
- 小湾字誌編集委員会『小湾戦後記録集 小湾議事録』小湾字誌編集委員会 二〇〇五
- 字小湾郷友会創立三〇周年記念事業実行委員会『創立三十周年記念誌 浦添市字小湾郷友会』字小湾郷友会創立三〇周年記念事業実行委員会 二〇一〇
- 浦添市字小湾郷友会『郷友会会則・規則』浦添市字小湾郷友会 二〇〇九



宮城クモト原に建ち始めた家々、1953年。
（『小湾写真集 よみがえる小湾集落』 小湾字誌編集委員会、2003年）



ホノルルでハワイ在住の小湾出身者と交歓会、2001年。
（『小湾写真集 よみがえる小湾集落』 小湾字誌編集委員会、2003年）

■米軍基地と文学■

又 吉 栄 喜

米軍基地（キャンプキンザー）のゲートからほぼ正面に延びた屋富祖大通りの周辺に質屋、ホテル、商店、映画館、Aサインバーなどが建ち並んでいた。ここが少年の頃（昭和三〇年代）の遊び場だった。

ある年の暮れ、小学生十数人は米軍基地内のクリスマスパーティーに招待された。夕暮時、学校の運動場に寒さに震えながら集まった私たちは期待と不安（米軍基地は非常に危険だと大人に言い聞かされていた）を抱いたまま軍用バスに乗り込んだ。軍用バスはゲートをぬけ、外灯が縦横に規則正しく並んだ、広いアスファルト道路を走り、巨大なコンクリートの建物に着いた。

白と緑色が螺旋状になった棒飴、殻付きの胡桃、雪が降り積もったような大きなケーキ、香ばしいチキンフライ、赤いアイスクリーム、小さな艶やかな林檎などを食べ、姿勢が良く、きちんとした服装をした、にこやかな米兵たちに「サービス」され、夢のような時間を過ごした。

帰りの軍用バスに乗り込んだ私たちは興奮が覚めやらず「行きは良い良い帰りは恐い」の歌をもじり「行きは恐いが、帰りは良い良い」と大合唱した。

中学一年の時の米軍カーニバルは七月四日前後の昼間だったせいか、数年前の夜のクリスマスパーティーの時よりアスファルト道路は広く、長くなり、形が似た巨大な建物も数え

きれなくらいに増えた、と感じた。

戦車や軍用ジープに乗り、無料配布のお菓子を食べた後、軍作業員（雇用員）の親戚のおばさんの職場を探し歩いた。迷子になりそうな予感がしたが、ようやく探しあてた。頑丈な大きなミシンを踏み、分厚い野戦用のテントやリュックサックを修繕していたおばさんの姿は数十年後の今でも鮮明に覚えている。



第2兵站部隊主催のクリスマスパーティー（1966年） 浦添市立図書館所蔵

あの時の情景と沖縄でも有数の規模だったという城間の闘牛（場）を合体させ、少年の「内心の叫び」をテーマに「カーニバル闘牛大会」（一九七六年）を書いた。

ハーニーと蔑称された、米兵の恋人は噂ではウーマク女だったが、優しく誠実なハーニーもいた。私はあるハーニーによく映画（洋画）に連れていってもらったり、米兵が持ってきたお菓子を手渡されたりした。しかし、「英語を覚えたらアメリカハーニーになってしまう。娘の英語の成績は良くない方がいい」と考える母親もいた。またハーニーを取り合う、米兵同士の喧嘩が頻発した。

（ハーニーのうばい合いに限らず）黒人グループと白人グループ、米兵二、三人と沖縄の青年十数人の喧嘩もよく目撃した。大声を出し、棒を振り回し、米兵を追いまわす近所の青年たちの姿は別人のように逞しく、私たちは妙に高揚した。軍作業員の青年たちの「米兵を手玉にとった話」も私たちをワクワクさせた。

戦争に行きたくないのか、集落の電柱にしがみつき、泣いている米兵もいた。この米兵はどこからともなく現れた仲間の米兵に諭され、肩を落としたまま夕暮れの中を米軍基地の方へ消えていった。

「ジョージが射殺した猪」（一九七七年）は、このような米兵たちをモデルにした。

大人たちは米兵絡みの生々しい事件、事故は残酷すぎると考え、子供の目に触れないようにしたが、米軍基地に近寄せないために「フェンス（金網）」には高圧電流が流れてい

る。触れると黒焦げになる」とか「軍用犬はフェンスを飛び越えて、子供の喉に噛みつく」と私たちの耳に吹き込んだ。しかし、目に映る善悪、美醜がないまぜになった鮮やかな出来事に毎日驚嘆し、否応なく五感や胸に染み込んだ。

この原体験、原風景は後年、戦争や人間を凝視する端緒になり、私の全ての小説に膨らみをもたらしのように思える。



商店や飲食店が建ち並ぶ屋富祖通り（1964年頃）
浦添市立図書館所蔵

■特 飲 街■

又 吉 栄 喜

Aサインバーだったかどうか、よく覚えていないが、城間の大通りに米兵相手の特飲街があり、噂では白人街と黒人街に分かれていた。境界はよくわからなかったが、なんとなくこの辺は白人、或いは黒人が多い、と感じながら用心深く行き来した。時々酔った白人兵と黒人兵の喧嘩があり、黒人と白人が同乗したMPカーがサイレンを鳴らしながらやってきた。たいていMPたちは双方をなだめ、喧嘩を止めさせ、逮捕はしなかった。

米軍内の黒人差別は私たち小学生も薄々感じていた。差別されている分、黒人は狂暴だと常日頃思っていたが、ある日、遊んでいる私たちに小柄な黒人のハーニー（愛人）が何かのほずみに目を輝かせ、本当に幸せそうに「黒人ほど優しい人種はいない」と言った。

質屋に新品のカメラ、ラジオ、時計などを持ち込み、金に替え、特飲街に飲みにくる米兵もいた。

なぜか私たち小学生としか遊ばない中学生がある日、「米兵は酒が目当てではないんだ。女がいるから来るんだ。基地には高級な酒が腐るほどある。だが、女はいないんだ」と言った。一人残らず酔っ払っている米兵たちを見ながら、「若いから女がいないと生きていけないんだ」と私はぼんやり思った。

昭和三五、六年、中学生の頃、バレーボール部の練習を終

え、よく夕暮れ時に特飲街を通った。時々女子選手を護衛し、家に送り届けた。



城間の風景（1961年）浦添市立図書館所蔵

女生徒は米兵をひどく恐がっていると思っていたが、晩春のある日、友人が、「隣のクラスの女生徒が夜、Aサインバーの近くに立ち、丘から摘んできたテッポウユリを米兵に売っている」と言った。米兵たちはバーの「彼女」に花をプ

レゼントするから儲けられるという。私は信じなかった。女生徒の家は呼び鈴もあり、（当時ゴザ敷きの家庭が多かったが）昼も敷いてあるような金持ちだ。第一、香水をふんだんにつけたバーの「彼女」は匂いの強いテッポウユリを嫌がるだろう。油紙（と私たちが呼んでいた、水をとおさないツルツルした紙）の袋に詰め込まれた缶詰やスモークした肉を絶対欲しがらる。何日も気になったが、事の真偽はわからなかった。

城間の松林の近くに泉町という特飲街があり、料亭や飲み屋が密集していた。

米兵が出入りしたかどうか定かではないが（一度、辺りをキョロキョロ見回したり、珍しそうに料亭の中を覗いたり、あたかも探険をしているような米兵のグループを目撃したが）軍用一号線沿いに林立する外資系の会社が頻繁に利用した。

昼間、山遊びに行く途中、よく泉町を通った。松の木と木にわたした紐に干された大小の白い洗濯物が風に揺れていたが、戸は閉まり、人は見当たらず、静まり返っていた。

私の（警察官を辞めた）父が勤めていた外資系の会社もよく泉町の料亭を利用した。酒が強かった父は宴会が終わってもなかなか家に帰らなかった。妻（私の母）が迎えに行っても腰を上げなかったが、小学生の私が行くと、すぐ少しよるめきながら奥から現れ、一緒に帰った。

戦前、戦中、戦後と警察官だった父は、昭和二〇年代（具体的な場所は聞いていないが……屋富祖にあった「警部補派

出所」勤務だったから、たぶん浦添の）特飲街にもよく出勤し、警棒を振り、ピストルを持った乱暴な米兵を制したという。

米兵はジャックナイフを振り回し、ピストルを警察官の足元にぶっぱなしたが、沖縄の警察官のピストルの携帯は禁じられており、危険極まりなかったという。いささか精神に異常をきたした米兵もいたし、戦地よりは監獄の方がいいとわざと事件を起こす米兵もいたという。

近頃の先輩の話では、私の家の仏間の壁にピストルが下げられていたという。もしかすると米兵相手の時だけ携帯が許されなかったのだろうか（父が亡くなる三〇数年前にいろいろ聞いておけばよかったと悔やまれる）。



屋富祖の派出所（1971年） 浦添市立図書館所蔵